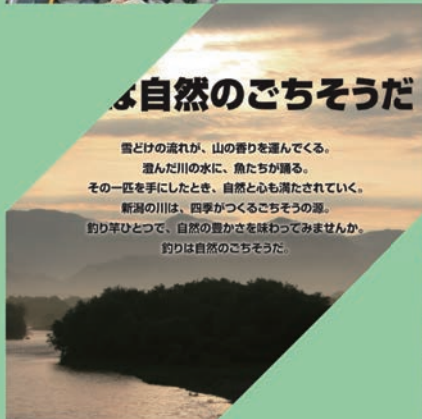
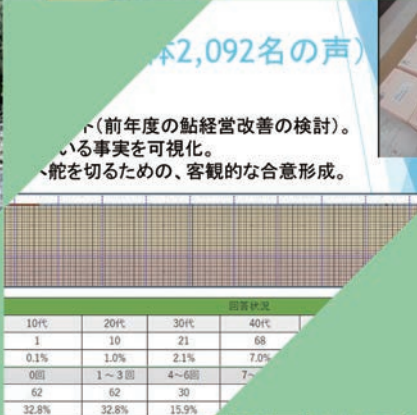
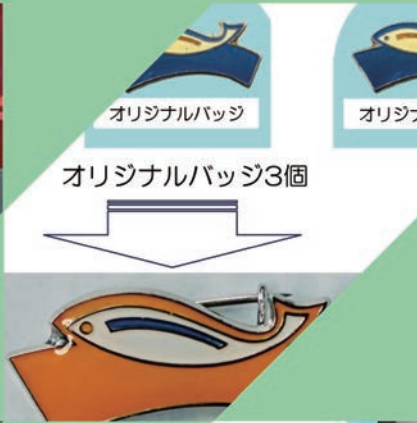


令和7年度

みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業 報告会講演録



令和8年3月
みんなでやるぞ
内水面漁業活性化事業
事務局

令和7年度

みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業

報告会講演録

目次

報告会次第	1
参加者名簿	2
挨拶	4
三重県内水面漁業協同組合連合会	6
愛知県内水面漁業協同組合連合会	13
和歌山県内水面漁業協同組合連合会	19
新潟県内水面漁業協同組合連合会	28
山形県内水面漁業協同組合連合会	35
長野県漁業協同組合連合会	45
栃木県漁業協同組合連合会	50
京都府内水面漁業協同組合連合会	65
青森県内水面漁業協同組合連合会	73
宮城県内水面漁業協同組合連合会	80
米代川水系サクラマス協議会	85
意見交換会	93
・事例報告(神奈川県水産課)	
・意見交換	
講評	108

●報告会次第

令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業 事業報告会

1. 日時：令和8年3月3日（火）13:30～17:30

3月4日（水）9:30～11:30

2. 場所：

対面出席：TKP 東京駅カンファレンスセンター カンファレンスルーム 8B

（〒103-0028 東京都中央区八重洲1丁目8-16 新槇町ビル 8階）

オンライン（Zoom URL）：

<https://us06web.zoom.us/j/83527492040?pwd=kKiRm6MQadl1klhoGAVGPiXrItkMmU.1>

（3日、4日両日）

ミーティング ID: 835 2749 2040 パスコード: 4F5siB

3. 次第：

3月3日（火）

1. 開会・挨拶

2. 事業実施報告

① 13:40～14:00 三重県内水面漁業協同組合連合会

② 14:00～14:20 愛知県内水面漁業協同組合連合会

③ 14:20～14:40 和歌山県内水面漁業協同組合連合会

④ 14:40～15:00 新潟県内水面漁業協同組合連合会

～～15分休憩～～

⑤ 15:15～15:35 山形県内水面漁業協同組合連合会

⑥ 15:35～15:55 長野県漁業協同組合連合会

～～15分休憩～～

3. 意見交換会 16:10～

終了 17:30

3月4日（水）

⑦ 9:30～9:50 栃木県漁業協同組合連合会

⑧ 9:50～10:10 京都府内水面漁業協同組合連合会

⑨ 10:10～10:30 青森県内水面漁業協同組合連合会

⑩ 10:30～10:50 宮城県内水面漁業協同組合連合会

⑪ 10:50～11:10 米代川水系サクラマス協議会

4. 講評 11:10～

5. 閉会 11:30

●参加者名簿

評価検討委員

(敬称略)

氏名	所属	役職	3日	4日
工藤 貴史	国立大学法人 東京海洋大学	教授	対面	対面
桑田 知宣	岐阜県 農政部 里川・水産振興課	水産振興企画監	-	WEB
佐藤 成史	フィッシングジャーナリスト		対面	対面
佐野 昇	全国内水面漁業協同組合連合会 滋賀県河川漁業協同組合連合会	理事 代表理事会長	WEB	WEB

専門家

(敬称略)

氏名	所属	役職	3日	4日
棟方 有宗	国立大学法人宮城教育大学	教授	対面	対面

水産庁

(敬称略)

氏名	所属	役職	3日	4日
冠 智昭	水産庁増殖推進部栽培養殖課内水面指導班	室長	対面	対面
丸茂 亮太	〃	課長補佐	対面	対面
山崎 雄一郎	〃	内水面養殖企画官	対面	対面
稲田 圭佑	〃	内水面増殖係	WEB	WEB
鵜澤 麗	水産庁資源管理部管理調整課沿岸・遊漁室内水面利用調整班	課長補佐	対面	対面
鈴木 泰礼	〃	総合調整係長	WEB	WEB
岡本 萌	宮崎大学農学部海洋生物環境学科	水産庁学生インターン	-	対面

事業実施団体

(敬称略)

氏名	所属	役職	3日	4日
古内 由美子○	青森県内水面漁業協同組合連合会	事務局	対面	対面
村上 英岐	青森県内水面漁業協同組合連合会・岩木川漁業協同組合	理事・代表理事組合長	対面	対面
奈良 安規	岩木川漁業協同組合	組合員	対面	対面
高山 遼輝○	宮城県内水面漁業協同組合連合会	コーディネーター	対面	対面
湊屋 啓二○	米代川サクラマス協議会(秋田県内水面漁業協同組合連合会)	会長(代表理事会長)	対面	対面
田中 俊生○	〃	コーディネーター(事務局)	対面	対面
野宮 幸博○	〃	コーディネーター(事務局)	対面	対面
桂 和彦○	山形県内水面漁業協同組合連合会	参事・コーディネーター	対面	対面
加賀 豊仁	栃木県漁業協同組合連合会	専務	対面	対面
田邊 宜久○	おじか・鬼怒漁業協同組合	コーディネーター	対面	対面
藤田 利昭○	新潟県内水面漁業協同組合連合会	コーディネーター	対面	対面
藤澤 孝男	長野県漁業協同組合連合会	参事	対面	対面
藤池 俊太○	〃	コーディネーター	対面	対面
笹崎 次男	〃	コーディネーター	対面	対面
大竹 一弘○	愛知県内水面漁業協同組合連合会	コーディネーター	対面	対面
小川 晴那	愛知県内水面漁業協同組合連合会	事務局	対面	対面
齊藤 宏和○	三重県漁業協同組合連合会	機構改革コーディネーター	対面	対面
新海 佑太○	〃(雲出川漁業協同組合)	コーディネーター	対面	対面
長塩 泰治	京都府内水面漁業協同組合連合会	参事	対面	対面
仲尾 万喜子	〃	主事	WEB	WEB
石井 真人○	木津川漁業協同組合	コーディネーター	対面	対面
澤 健次	賀茂川漁業協同組合	代表理事組合長	WEB	WEB
村山 修	宇治川漁業協同組合	参事	WEB	WEB
佐古 充○	和歌山県内水面漁業協同組合連合会	総務主任・コーディネーター	対面	WEB

○：発表者

都道府県担当者

(敬称略)

氏名	所属	3日	4日
小泉 慎太郎	青森県 農林水産部 水産振興課	-	対面
深澤 航太	宮城県水産林政部 水産業振興課	WEB	WEB
高橋 佳奈	秋田県農林水産部 水産漁港課	WEB	WEB
鈴木 悠斗	山形県農林水産部 水産振興課	WEB	WEB

小原 明香	栃木県農政部 農村振興課	WEB	WEB
横塚 哲也	栃木県水産試験場	WEB	WEB
竹内 智洋	長野県農政部 園芸畜産課	WEB	WEB
川之辺 素一	長野県水産試験場	WEB	WEB
赤松 佑哉	和歌山県農林水産部水産局 資源管理課	WEB	WEB
稲葉 駿	三重県農林水産部 水産資源管理課	WEB	WEB
井口日永	新潟県 農林水産部水産課	WEB	WEB
加藤 大棋	神奈川県環境農政局農水産部水産課	対面	—

オブザーバー

(敬称略)

氏名	所属	3日	4日
南 俊伍	埼玉県農林部生産振興課花き・果樹・特産・水産担当	WEB	WEB
富澤 輝樹	〃	WEB	WEB
日吉 菜々子	静岡県水産・海洋局水産資源課	WEB	WEB
田中 直幸	福井県内水面総合センター	WEB	WEB
渡邊 翔	岡山県農林水産部水産課	WEB	WEB
栗田 守人	島根県農林水産部沿岸漁業振興課	WEB	WEB
沖 真徳	〃	WEB	WEB
野根 慎平	徳島県農林水産部 水産振興課	WEB	WEB
稲葉 太郎	高知県水産振興部水産振興課	WEB	WEB
阿部 陽	〃	WEB	WEB
合戸 賢利	福岡県水産局水産振興課	WEB	WEB
大浜 秀規	山梨県漁業協同組合連合会	WEB	WEB
若林 秀夫	奈良県漁業協同組合連合会	WEB	WEB
渡辺 智典	株式会社フィッシュ・パス	対面	対面
長濃 篤史	株式会社creato	対面	対面
西山 宗一郎	〃	WEB	WEB
丸山 高範	〃	WEB	WEB
鈴木 毅	〃	WEB	WEB
珊瑚 知也	〃	WEB	WEB

みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業事務局

(敬称略)

氏名	所属	役職	出席	出席
瀧田 雅樹	公益社団法人 日本水産資源保護協会	部長	対面	対面
田角 由香	〃	主査	対面	対面
安田 秋太	〃	主事	対面	対面
安原 克哉	〃	事務局	WEB	WEB
中奥 龍也	全国内水面漁業協同組合連合会	専務理事	対面	対面
三栖 誠司	〃	総務課長兼経理課長	対面	対面
岩下 誠	〃	業務課長	対面	対面

開会・挨拶

岩下（事務局：全内漁連）：

これより令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業の事業報告会を開催いたします。私、全国内水面漁業協同組合連合会の岩下と申します。報告会の司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、開会にあたりまして『みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業』の事務局を仰せつかっております、全内漁連の中奥専務より一言いただきたいと思います。よろしくをお願いいたします。

中奥専務（事務局：全内漁連）：

皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました全国内水面漁業協同組合連合会専務の中奥でございます。公益社団法人日本水産資源保護協会さんと一緒に、この事業の事務局をやらせていただいております。

本日は令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業の報告会を開催いたしましたところ、実施機関の皆様、また東京海洋大学の工藤先生をはじめ評価検討委員の皆様、また予算をいただいております水産庁の冠室長ほか各担当の皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

今年1年間、各実施機関の皆様におかれましては、様々な取り組みをされてきたと思います。大変お疲れ様でした。上手くいったこと、いかなかったこと、あるかと思えますけども、上手くいったことだけじゃなくて、上手くいかなかったこともこの事業の成果になりますので、今日の報告会ではどうぞそこら辺も併せてご披露いただいて、共有していただければと思います。

また、こういう機会を通じて、横の繋がり、コーディネーターの皆様の横の繋がりも作っていただいて、またこれからの事業の取り組みに活かしていただければと思います。今日はコーディネーターを立てて活動しておられます11機関の皆様にご参加をいただいて、今日はそのうち6機関、明日は5機関の皆様からご発表、ご報告をいただくことにしております。限られた時間でございますけども、実り多い会議になりますように、皆様よろしくをお願いいたします。

岩下：

ありがとうございました。続きまして、水産庁漁政部栽培養殖課の冠室長に一言頂戴したいと思います。よろしくお願い致します。

冠室長（水産庁栽培養殖課）：

会場の皆様、そしてウェブで参加されている皆様、本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。水産庁の冠です。年度末まであと一月ほど残っておりますが、このタイミングで報告会を開催する運びとなりました。

海洋だけでなく陸上においても様々な異常気象などがあり、当初の計画通りに進まなかった方々もいらっしゃるかと思います。そうした状況下で、皆様が本当に尽力してくださったことに、厚く御礼申し上げます。

この事業の重要性については改めて繰り返しません。日本全体が人口減少に直面する中で需要を喚起していくことは、内水面漁業に限らずどの産業においても非常に難しい課題だと感じています。しかし、何もしないのではなく、デジタルトランスフォーメーション（DX）など、活用できる技術の一つひとつ

取り入れていくことが、何よりも重要ではないでしょうか。

今日と明日の二日間、皆様のお話を伺いながら、我々としても今後の施策をしっかりと考えていきたいと思っています。また、最後になりますが、来年度についても手法は同様となりますが、予算案の中に本事業を計上しております。国会審議の結果次第ではありますが、無事に成立した暁には、引き続き皆様のご協力をいただきながら、こうした取り組みを継続していきたいと考えております。二日間、どうぞよろしくお願いいたします。

岩下：

ありがとうございました。

今年度の報告会は2日間に分けて開催いたします。なお、本日6課題の終了後、アユルアーの普及に関わるテーマでの意見交換会の場を設けさせていただきました。

各団体は発表と質疑応答を含めて20分の時間をお願いいたします。


それでは、事業実施団体の報告に移らせていただきたいと思います。よろしくお願い致します。

三重県内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター ●齊藤 宏和・○新海 佑太

LOVE
RIVER
PROJECT

Mie



**令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業
事業報告会 <三重県内水面の事例>**

三重県内水面漁業協同組合連合会
コーディネーター 齊藤 宏和
新海 佑太

①解決したい課題 問題・提言

②三重県内水面の実施内容

1. 活動組織を構成（コーディネーター+小委員会）
2. ゾーニング推進
3. 釣り人と連携した漁場管理
 - 3-1 情報発信
 - 3-2 イベント「みえ鮎ルアー塾」
 - 3-3 「三重県鮎友釣り選手権」ビギナークラス創設
 - 3-4 フィッシングショーOSAKA2026とアンケート
4. 電子遊漁券システムデータの「見える化」

③今後の展望、事業への要望


三重県内水面漁連です。今日はコーディネーターの私齊藤と雲津川漁協の新海 2名で分担しながらお話しいたしますので、よろしくお願いいたします。

まずは解決したい課題、三重県内水面漁連でどんなことをやったのか、それから今後の展望、あと、私どもの要望について少々話をさせていただきます。

● まず最初に解決したい課題については、多分どちらの漁協さんや漁連さんも、かなり共通なのではないかと思います。まずは組合員数の減少に関する問題と、それから、収益の構造。収入をいかに増やすかという部分をどれだけできるのか？というところが、多分、どこでも共通で、我々でも課題となっています。

その中で、去年の発表では、問題提起として、一般企業では普通に、人を揃える、物、何よりかを考える、で、お金をどうやって工面するか、を考えて経営するのが当たり前なのに、思ったほど川の漁協さんや漁連さんがそれができていないということが、かなり問題なんじゃないか？という話をさせていただきました。つまり、本当は物としては色々あるけども、本当だったらやれることをやっていないだけではないか？という話をしました。それで、今年は2年目の話として、その中身について、この人の問題を解決するのは、結局は「関係人口」を増やしていかないと結構困っちゃうよ、という話を少しさせていただきたいと思います。

① 解決したい課題 → 組合員数減少、収益構造






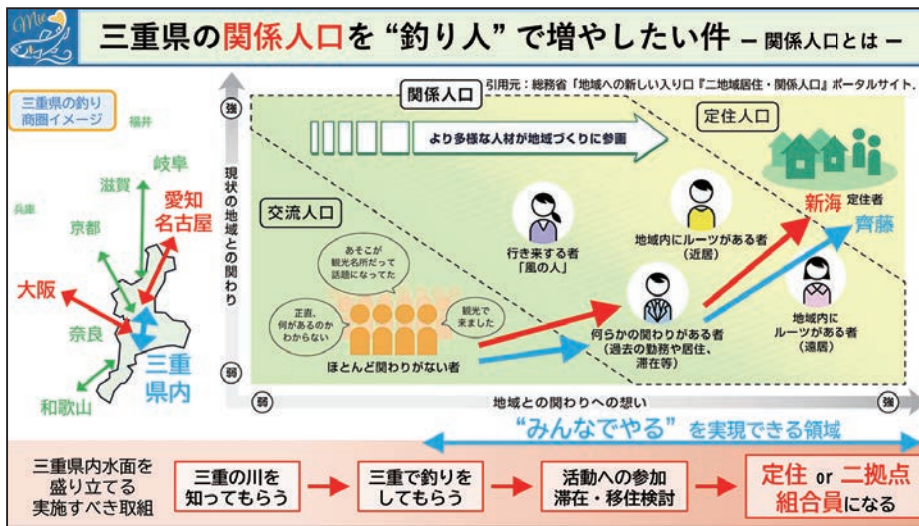
<活動1年目の問題提起>
ヒト・モノ・カネ (+情報)

から考える
“本当はやれるよね？”の話

↓

<活動2年目の問題提起>
「ヒト」：“関係人口”を増やす話
最終的に“釣り人”“組合員”
の住民が増えてほしい



齊藤：まずは「関係人口」について、こちら総務省のホームページから引っ張ってきました、「交流人口」「関係人口」「定住人口」についての話です。まず、三重県で言いますと、例えば「伊勢神宮は行ったことがある。それしか知らない」という方が「交流人口」です。そこから、三重に実際に川釣りに行きました、三重大学に行きました、三重に知り合いがいますと

いう段階、そこまで持っていくのが「関係人口」です。そこから「関係人口」から先として「定住人口」。実際に住民票がある、住んでいるという状態になるというのが実際の流れなのです。

我々がやりたいこと、三重県内水面としてやりたいこととしては、とにかくまず、実際三重でも川で釣りをできますよと川を知ってもらうこと。そこから実際に来てもらうこと。来てもらった上で、実際に川の色々やっている中で、例えば放流事業をしています、じゃあ放流事業をみんなで手伝ってみようとか、そういう流れを作っていく、最終的には三重の川、実際やっていて面白いから、三重に中古物件でも買おうか、それで三重に拠点ができたら住民票自体も三重県に移して、例えば大阪に家があるけれど、三重に住民票があって遊んでいる状態、そういうのを作れると、最終的には漁協の組合員になってもらえる可能性があるということですね。

実は組合員数を増やす方法って、実は2つしかないんです。1つは、今そのエリアに住んでいる方に、組合員にいかになってもらえるか。もう1つは他地域に住んでいる方が、例えば三重に拠点を置いて住んでくれる。その2つしか組合員を増やす方法ってないんですよ。なので、そのうちの1つをいかに「関係人口」の段階まで持って行って、関わりのある人を増やせるかというのが課題ではないかと思っています。

● 次に、実際にそういったことをやろうと思って動いている中で、我々はまず活動組織としてコーディネーターを作っていますが、その次の小委員会を置いていることが、実はすごく大きいのです。というのは、漁協さんの話を大体聞くと、色々やったらいいと思うんだけどなあ、みんな歳でどうにも動けん、といった色々な話が出てきます。それならば、まず我々は実動部隊を作って、その実動部隊でみんなで何をやろうかを考えて、それで取り組みを進めていったというのが、我々の事業のかなり根幹の部分になっています。

そういったところに色々な方のご意見をいただいて進めるのが三重県の事業になります。その中で、ゾー

② 三重県内水面の実施内容 1. 活動組織を構成 / 2. ゾーニング推進

1. 活動組織を構成

コーディネーター 新海 佑太 (釣り全般+SNS)
齊藤 宏和 (段取り+裏方)

小委員会 事業構成・内容の検討
イベント実働部隊
計14名+渡邊会長+大田参事
会合3回+LINEグループ内で議論

検討会参加者 (関係機関)


三重県農林水産部	稲葉 駿 様
三重大学大学院	金岩 稔 様
水産研究・教育機構	坪井 潤一 様
大紀町水産課長	大野 将彦 様

2. ゾーニング推進

- 基本的に各漁協で個別開催、ゾーニングを中心とした漁協運営の相談会、今年度の活動報告
- 鮎ルアー・鮎友釣り・アマゴ等でゾーニングを検討
- 諸事情により令和8年3月実施予定

ニングの推進。これ実際は色々な漁協さんが、今の段階でどんなニーズがある、どんな問題点がある、何やりたい、それをどうやって解決するか？というのを進める上で、各漁協へ実際にお邪魔して色々なお話を聞いているというのが、この2月の末からやっと回り始めることができまして、今月中に終わると思います。事業の中ではできない部分も出てくるかもしれませんが、各漁協にはいずれにしても回りたいと思っております。

3. 釣り人と連携した漁場管理 3-1 情報発信



<今年の概要、問題点・改善点>

- ① インスタグラム主体、HP改良等
- ② 令和7年6月21日～令和8年2月9日の期間内に計20回投稿
- ③ 令和7年2月2日（フィッシングショーOSAKA2025終了時点）のフォロワー数919名
→ 令和8年2月8日（同、2026終了時点）のフォロワー数1,292名、対前年比141%
- ④ 発信回数は昨年とほぼ同様、もう少し発信回数を増やせないか？ → 幾つか案あり
- ⑤ 現在実施中の事業内容は良いので、イベント開催結果の発信等でアピールしては？
→ イベント楽しめた印象のポスター作製？

● じゃあ実際に我々は何してるのかというのが、釣り人と連携した漁場管理の話になります。

まず、情報発信について、去年からInstagramを立ち上げて、昨年度末の時点で919名のフォロワーがいるところまで持っていました。それで今年は、フィッシングショー大阪が終わった時点で1,292名までいきまして、次の日ページ見

たら1,291になってました・・・、ですが、大体41%増えてます。そこまでInstagramのフォロワー数を増やせたというのが今年の情報発信、それから実際に我々のInstagramにフォローをしている方の集客の部分について達成できてます。ただ、問題点もあります。1つ目は発信内容についてですが、実は、今年はまだそれほど増えてないのですね。去年と同じぐらいの発信量になっているのですが・・・。

○ 現在のところはそうなのですが、結局、アユ釣りは夏がシーズンなので、オフシーズンの秋・冬にかけても情報発信できるように動画を撮り溜めてまして、それをこれから公表していく予定になっています。

● はい、そういうわけで、現時点で発信内容は去年とわずかに少ないぐらいですが、これから色々ところでアユ釣りイベントやフェアとかが始まってくる中で、我々ももう少し発信を増やしていきます。もうひとつ問題点、というよりは検討会で上がった内容ですが、この後話してまいります、色々な内容の事業を実施しており、それらの効果はかなり上がっているのので、結果をもう少し公表・広報したほうが良いのではないかとのご指摘を受けてます。そこはこれから進めていきたいと思っております。

● 次に、イベントを色々実施しました。こちらも全て話をすると時間が足りませんが、さっきからお話ししてる「関係人口」増やすために様々な事業を実施いたしました。

今年はどうな具合だったのかと申しますと、昨年度のアユルアー塾は計画4回に対し正味3回が実施できたのに対し、今年度は7回計画して最終的に台風で潰れた1回以外の6回開催いたしました。そのうち第5回目は参加者全員が大学生です。実際に大学

3. 釣り人と連携した漁場管理 3-2 イベント「みえ鮎ルアー塾」

開催回	開催日(令和7年)	場所	参加人数	備考
第1回	6月29日(日)	鏡子川	15	
第2回	7月15日(火)	雲出川(1回目)	14	荒天のため中止
第3回	7月21日(月祝)	青蓮寺川	16	
第4回	8月3日(日)	中村川	15	
第5回	8月6日(水)	大内山川(1回目)	17	学生向け
第6回	8月23日(土)	雲出川(2回目)	16	
第7回	8月30日(土)	大内山川(2回目)	23	
合計			116	

● 計7回企画、天候不良により1回中止のため計6回開催
● 講師参加・機材提供・開催補助・広報等に計12社+αが協力、講師参加企業様(敬称略)： 鯛カツイチ、グローブライド様、鯛ジャッカル、中央漁具様、鯛デュオ、鯛バームス

↓ イベント開催は“ここ狙い”です

三重県内水面を盛り立てる実施すべき取組


三重の川を知ってもらう

三重で釣りをしてもらう

活動への参加滞在・移住検討

定住 or 二拠点組合員になる

3. 釣り人と連携した漁場管理 3-2 イベント「みえ鮎ルアー塾」



<今年の概要、問題点・改善点>

- ①開催回数を4回→7回に
- ②学生向けの開催回を1回作りまし
※昨年イベント参加者の要望を反映
- ③全ての開催回で定員（15名）達成
→去年も参加+フィッシングショー出展が大きな効果
- ④イベント回数が多く、物理的に疲れた
- ⑤釣れる回と釣れない回で釣果に差が出る
→漁協がどう対策していくかに繋げるべき
釣れるほうが釣り客が来ます（後述）
- ⑥動ける漁協と動けない漁協の差が顕著に
→支えるか？ 変革を促すか？
諦めるか？ 根本的な問題


生向けの開催回を作ることができたのですが、これは実は昨年度の事業からつながる成果でした。昨年度、我々のこのイベントに参加された大学教授の方が、「今年のうち大学の夏の一泊研修旅行をアユルアーでやらせてほしい」という依頼がありまして、それで学生の回を組んだという状況です。それから、このアユルアー塾は、全ての回で最大定員15名を達成できているという、なかなか良い成果が得られています。

●次に問題点。イベント回数が多くて疲れます。私がすごく疲れるのです……。それから、釣れる回と釣れない回で差が出るという、非常に根本的な問題があります。まず、釣れる回はほとんど全員、最終的に全員が釣れた回もありました。一方で、参加者の半数しか釣れなかったという回もありました。この釣果の差については漁協さんに何とか解消してもらおうよう、漁協さんのエリアの中で「ここでイベントをやる」といった場所自体を検討してもらおうといったことが必要です。なかなかイベントをやっても「釣れなかった」では逆効果になりかねず、そこは問題点だと認識しています。さらに、そういった話と一緒に、例えば「駐車場ないからうちはイベントできないな」って言い切ってしまう漁協さんもある。それから、「駐車場がないから作っちゃえ」という漁協さんもある。そういった、動ける漁協と動けない漁協の差が結構出やすいです、そこは色々な意見があり、例えば、やれないところではやめる、といった考えもあれば、それでもやはり色々な場所でやるべきという考え方もありまして、そこは慎重に当たるべきだなと思ってます。

●アユルアー塾の人口の構成です。50代が一番多く、次は普通にやると多分40代なのですが、今年度は20代の大学生向けをやったんで、20代が一番多くなってます。それから女性が全体の4分の1ほどおります。これは普段、友釣りで見ている光景とかなり違うと思います。友釣りでは女性は5%もいないです、正直なところ。なので、こういったところは、女性の活用・女性をより多く取り込んでいく動きはあっていいと思ってます。それから、三重県内の方が大体半分おり、次に愛知、大阪という構成になってます。

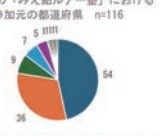
3. 釣り人と連携した漁場管理 3-2 イベント「みえ鮎ルアー塾」

2025年の「みえ鮎ルアー塾」における参加者年齢および男女別年齢構成 n=116



年齢層	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
女性	1	12	3	5	6	0	0	0	0
男性	7	14	5	16	33	10	3	1	0

2025年の「みえ鮎ルアー塾」における参加元の都道府県 n=116




●三重県 ●愛知県 ●大阪府 ●奈良県 ●岐阜県 ●三重県
●和歌山県 ●東京都 ●神奈川県 ●沖縄県 ●千葉県

<データの分析>

- ①年齢構成
50代→20代→40代の順に多かった
※学生向け開催回を設けたため
→この年齢構成で友釣りに移行して
くれると有難い
- ②男女別
女性が4分の1 →友釣りより多いのでは？
- ③参加元の都道府県
三重県内が半数を切った
愛知、大阪、奈良、岐阜の順
→他県からの来訪は順調、伸ばしたい

3. 釣り人と連携した漁場管理 3-2 イベント「みえ鮎ルアー塾」



<(よく聞かれる) イベント開催に必要な準備内容>

- ①参加者の概ね半数程度に機材レンタル発生
→ 竿・リール・鮎タビ・鮎ベルト・タモ・友船・ルアー・針等を揃える必要あり(約6万円/人)
- ②実働部隊が必要(漁協、委員会等)最低でも4名程度
- ③協力企業が有り無しで大違いと思われる(ネームバリュー、広報力、機材等)
- ④開催費用: 日当・謝金・交通費・熱中症対策飲料等1回あたり5~15万円、他に広報チラシ等
- ⑤必要十分に釣れる・魚が見える釣り場環境


備品・消耗品の詳細等を知りたい場合は、三重県内水面漁連にお問い合わせください。 0598-83-2293 naijyo@na.mctv.ne.jp

●次はこちらです。後で読んでいただくとわかるのですが、よくイベントやるのに、どうなの？という様々な質問を受けるのですね。その内容をざっと書いておきました。それで、実は、物を揃えるとかは別に難しくもなんともないと思うのです。多分、イベントやるのには、十分に釣れる川や場所をいかに準備できるかのほうが、よほど難しいと思ってます。なので、ここの根本的な部分を解決し

つつ、こういうイベントをやらないと、最終的にお客さんが増えない可能性があると思ってます。それは体感的にありますので、そちらだけお話ししておきます。何かありましたら色々ご質問いただければと思います。

●次に、実は友釣りの大会も開催しました。友釣りの大会をそのままやるのではちょっともったいないこともあり、ヒントをいただいたところを生かし、ビギナー向けの回を作ったんですね。そうしたら、釣り大会って中～上級の人しか来なさそうなもんなんですが、ビギナーの方が全体の2割ぐらいは来ているというのがわかりました。これは、友釣り自体は面白くて、やるのはいいんだけどもなかなか敷居が高いな、ということが、ちょっとでも崩せるんじゃないか？という目途は立つのかなと思ってます。なので、ビギナーの定着率を上げるような活動をしたと思います。

3. 釣り人と連携した漁場管理 3-3 「三重県鮎釣り選手権」ビギナークラス創設



開催回数	場所	総参加者数	男性	女性	ビギナー
第1戦	長瀬太郎生川	36	34	2	6
第2戦	大又川	24	19	5	5
第3戦	雲出川	25	21	4	6
計		85	74	11	17

<今年の概要、問題点・改善点>

- ① 単に大会ではなく、「初体験でもサポーターが付いて友釣り大会を体験できる」イベントとした
- ② 開催結果：友釣りを始めて3年以内のビギナークラス参加者は全85名中17名（全体の20%）
- ③ 改めて、「我々が目指すべきはガチ釣り大会よりもビギナーの定着率向上」と認識
- ④ この場合、初級～中級者向けの「鮎釣りがより面白くなる情報・指導者の供給」が有効では？
→ 次年度に組み込みたい



●次にフィッシングショーです。今年のフィッシングショー大阪は2月6、7、8日に出展して、昨年度と同様に色々なこと行いました。その中ではトートバッグを配布をして、その代わりにアンケートをとっています。それから、今年は三重県の伊勢周辺で活動されてるYouTuberの「ちぬ子」さんに司会をお願いしております。ちぬ子さんには写真を撮ったりサインしたりというのも含めてやっていただきました。そして

トートバッグ。あれはとても良いと評判で、そんな具合に色々なことができました。

●その中身についてはこちらにあげてありますとおり。これも後で読んでいただくと良いのですが、トークショーをアユルアーだけじゃなく友釣りについても組んでいるのが今年の特徴です。先ほどお話ししたとおり、インスタグラムのフォロワー数をかなり増やすことができた結果になっています。それから、アンケートの結果についてざっと新海の方からお話します。

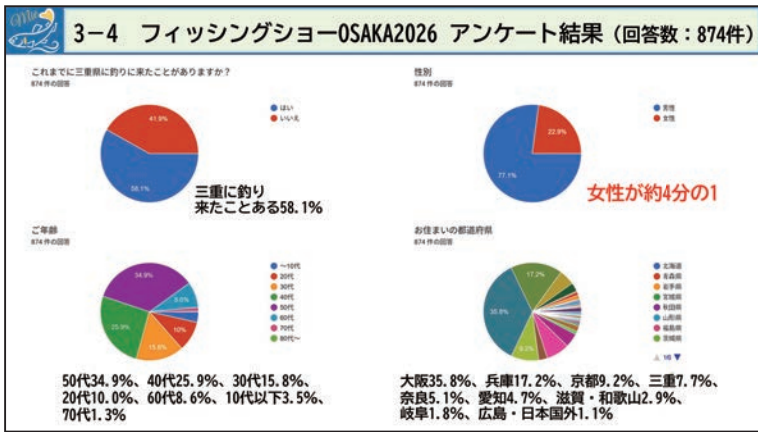
3-4 フィッシングショー-OSAKA2026 出展概要



開催日：令和8年2月6日（業者商談日）、7～8日（一般公開日）
 会場：インテックス大阪 6号館Bゾーン⑨、2コマ（シマノさん正面）
 来場者：一般公開日の2日間合計36,390名
 配布物：インスタのフォローでステッカー（前年継続）
 アンケート回答でトートバッグ（新規）
 一緒に三重県釣りマップ、漁協ガイドを配布
 イベント：トークショー「The アユルアー」×2回
 講師：ダイワ 木森直樹氏、有岡只祐氏
 トークショー「友釣り、短期上達への道。」×1回
 講師：シマノ 小沢聡氏、島啓悟氏
 司会：全ての回を、三重県在住YouTuberのちぬ子氏が担当
 聴衆は120名程度（アユルアー）、30名程度（友釣り）

成果：①インスタのフォロワー数
 イベント開始直前（R8.2.1） 956名
 → 終了直後（R8.2.9） 1,292名（35%増）
 ②トートバッグ約 900枚を配布
 ③パンフレット約1,050枚を配布
 ④ステッカー在庫約400枚を配布
 ⑤アンケート回答数874件を収集（次頁）

費用：日当・交通宿泊費55万円、ブース44万円、配布物45万円、他



○このフィッシングショー大阪で出展した際、来場者アンケートを実施した結果です。

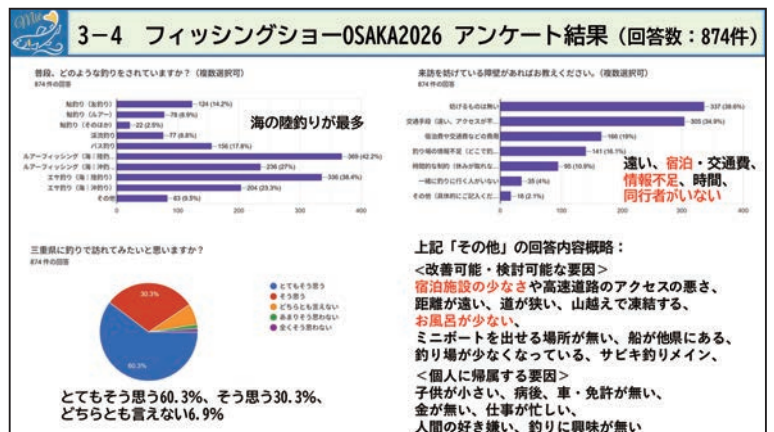
1つずつ説明します。まず「三重県に来たことあるか」では、「来たことがある」が半分以上。そもそも、このフィッシングショー大阪に来られている客層は大阪、兵庫、京都、三重という感じで、右下のエリアが多いですね。ブースに興味持っていた方には多少の偏りがあるって、兵庫、

京都、三重、奈良、愛知の人が多かったかなという印象でした。

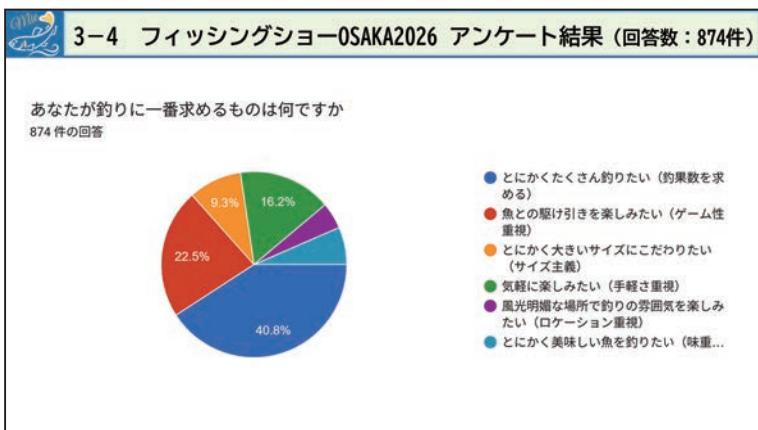
右上のグラフ見ていただくと、4分の1ぐらいが女性の方にアンケートを回答いただいているのですが、大体がご夫婦やカップルのように男性とペアで来てるような方もフィッシングショーでは見られました。左下のグラフでは、ボリュームゾーンの50代が一番多く、次いで40代という結果です。フィッシングショーの来場者とそのボリュームと大体同じぐらいなのかなという印象です。ただ、20代と30代も、25パーセントぐらいは来ていて、若い世代も興味持ってブースに来ていただけました。

○「普段どんな釣りをしているか？」を聞いたのが左上の結果です。一番多かった回答が、例えばエギング、メバリング、アジングといった「海の陸釣り」で、そういった方が多かったような印象です。

三重県では環境的に海釣りが強いのですが、海に行った後、例えば早朝は海で釣りをして、帰りに昼からはアユ釣りしよう！といった戦略もできるのではないかと思います。



では、「来訪を妨げている障壁は？」というところでは、色々あるなかでピックアップすると、「宿泊場所」や「情報の不足」。特に情報不足ですね。これは情報発信することで何とかできないかというところ。また、「同行者がいない」というのも、結局はその交通費とか時間、宿泊の問題かと思えます。次に「三重県に釣りに訪れてみたいと思いますか？」に対して、とてもそう思うが60パーセント。



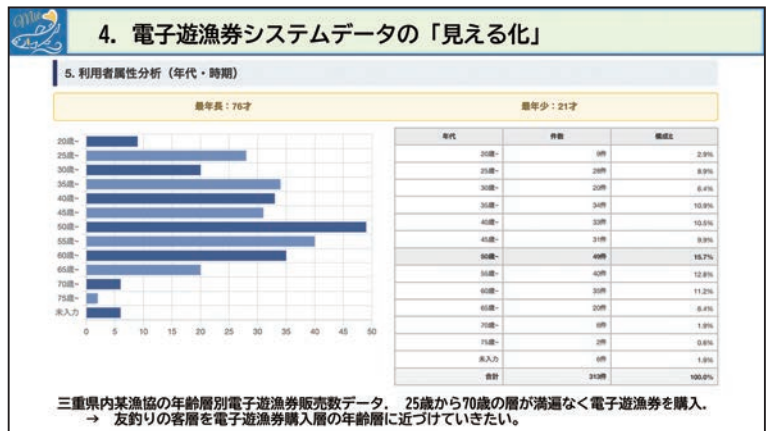
○で、これが一番重要で、「あなたが釣りに一番求めるもの何ですか？」というのを聞いてみました。

一番多かったのが「とにかく数釣り」を求めている方が多く、次に「魚との駆け引き」、次に「気軽に楽しみたい」、最後に、その次に「大きいサイズにこだわりたい」という回答で、このあたりは乱暴な言い方をしてしまいますと、とにかく「たくさん釣りたい」というのは友釣りの思考で、

あとから言った3つの回答は、どちらかというルアー釣りの楽しみに偏っているような感じがあると思うのです。その3つをまとめると、40パーセントを超えてくるので、やはり、ルアー釣りを推進するのは内水面の遊漁者を増やすのに有効なのではないか、というアンケート結果が得られました。

● はい、ありがとうございます。

続きまして、電子遊漁券のデータについても色々「見える化」を進めています。電子遊漁券のデータを1つだけ例であげましたが、こちらはとある漁協さんの全ての遊漁券です。年券も日券も全部含んでますが、ボリュームゾーンは25歳から65歳が最大くらいなんですね。これはやはり、電子遊漁券使う方というのは、フィッシングショーの来場者にかなり似てるのだけど、若い層がより多いのかなと思います。なので、電子遊漁券を購入される層を、少しでも川釣りに引っ張ってることができれば、若返りができるんじゃないかなと思っています。



③ 今後の展望、事業への要望 (2件)

☆イベント構築は概ね達成できた → 次のステップへ
→ イベントの持続性を高める取り組み・組織作りへ
漁協の参加、イベントスタッフとして動ける人材確保
①ルアーの取組をレビューするシンポジウム開催を提案

☆将来を見据えた、川釣り人口の確保・定着が必要
→ 引き続き、三重の川釣りをアピール
海釣り層・若い年代・女性を川釣りへ誘う
女性客が川釣りを継続し易くする取り組み
※釣り客が参加できる漁協活動作り
※滞在や移住がセットで提案できる組織作り
例: 空き家バンク×漁協 漁協×観光部・観光協会

②正直、3年で終わらせるのは勿体ない！
4年目以降も継続できないでしょうか？

3年ではなかなか達成し難い取組連携も必須

三重の川を知ってもらう → 三重で釣りをしてもらう → 活動への参加滞在・移住検討 → 定住 or 二拠点組合員になる

● 最後に今後の展望と要望についてあげさせていただきました。

まず、我々の検討会の中で上がった意見として、イベント自体はとても順調に進んでいるので、そこを次の段階の「持続性」、今まで行った1回目、2回目からこの後も続けられるような体制づくりにシフトするとか、そこに配慮した事業をやってはどうかという意見をいただいています。

そういう形のことを行うには漁協さんの

参加等を進めていきたいのですが、そんな中で、結構色々なことが実施できている状況にもありますし、他県でもこういったイベントを開催されてるので、今日も後で話があると思いますが、できることなら「アユルアー」に関して、この事業の中でも外でもいいのですが、できればこの事業の中で「アユルアーについての取り組み」をみんなでやるぞの形で、「どこまで出来て、この後はどうすべきか？」というイベントを組んでいただくとありがたいなと思っています。

2つ目。将来を見据えた川釣り人口の確保です。最初にお話ししました、やるなら三重を知ってもらって最終的に定住なり2拠点生活まで持っていければいいな、というのを進める上で、引き続き三重のいいことをアピールしていきたいと思うのです。例えばこの「移住先まで考える」というのをやろうと思ったら、地域にある空き家バンクと漁協が共同して、「ここ釣りにちょうどいい空き家がありますよ」とか、その情報提供まで行えれば理想的なんですけど、いかんせん3年間じゃあ難しいのです。なので、できることなら4年目以降もこういった一連の取り組みをするために、事業として4年目以降も採用していただくとありがたいなと思っています。よろしくお願ひします。

ということで、三重の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

愛知県内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 大竹 一弘



愛知県内水面漁連の事務局でコーディネーターしております大竹一弘と申します。本日はよろしくお願いたします。

●まず、愛知県について簡単に説明します。今年の2月に調べた愛知県の正組合員数の数は3,059名です。去年は3,300を超えていました、その前の年は3,600でした。およそ年に300人が減っています。そんな愛知県なのですが、本県もご多分に漏れず高齢化、だいたい組合員の方は70歳を超えています。そんな中でも、組合を続けていこうと思っていただけてる組合がたくさんありまして、その方たちを手助けした

い、それが愛知県内水面漁連の願いでこの事業をやっております。助けたい、それが愛知県内水面漁連の願いでこの事業をやっております。

事業の背景と危機的状況

3,059名
県内漁連加盟16漁協の正組合員数

組織の消滅を防ぐ戦略的転換点

現在、愛知県内の内水面漁協は、高齢化と極端な次世代層（10～40代）の欠如により、深刻な担い手不足に直面しています。

具体的には、愛知県の総人口は約745万人で、そのうち内水面漁協の正組合員数が約3,000人ですので、全体の0.04%にあたります。非常に限られた人口で川釣りが支えられている状況がうかがえます。

デジタル化をはじめとする利便性向上と、新たな釣法導入を掛け合わせた施策は、釣り人の関心と行動を生み、遊漁料の確保や地域活性化につながる重要な投資であると考えています。漁協の持続的運営には、効率化と魅力創出の両輪が不可欠です。

実施体制と専門人材の積極的活用

限られた人員で多岐にわたる業務を兼務している漁連では、十分な活動が行えない可能性があります。そのため、外部の専門人材を単なる助言者としてではなく、仕組みを理解し、活動を加速させる触媒として活用します。

<h4>全体統括・普及啓発</h4> <p>大竹 一弘 宮田 昌和 コーディネーター</p> <p>漁協調整、デジタル整備、検討会運営を主導。既存業務との整合性を担保しつつ、組織の舵取りを実施。</p> <p>電子遊漁券データの分析方針策定、公式HPやSNSを活用した広域発信戦略を統括。</p>	<h4>技術指導</h4> <p>齊藤 宏和 アドバイザー</p> <p>三重県等の先行事例に基づき、規則改正やエリア選定、研修会開催等の具体的なノウハウを提供しました。</p>	<h4>技術指導</h4> <p>新海 佑太 アドバイザー</p> <p>釣り全般における漁協の深さを基に、研修会での船ルアー釣り指導など、円滑な釣り体験に寄与しました。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------

●まず実施体制として、私は2年前に漁連の参事に就任しました。それまで釣りもやったことありませんでした。人材不足ここに極まり、というところあるんですが、そんな私を助けていただけるよう、皆様にちょっとお声がけしまして、助けていただいてやっている次第でございます。

●本年度の初めに、愛知県は何をやりたいの？と、聞かれまして、「共通遊漁券をやりたいです」と答えました。それは、県内に大きな漁協さんのA漁協さんと中程度の規模のB漁協さんがあり、それらの漁業さんとの間で一緒にやっつけられないか？との構想があり、この事業に応募して共通遊漁券の導入を計画しました。しかし、当初はこれならいけると考えておりましたが、現実是不調に終わってしまいました。

と言いますのは、A漁協さんの方は愛知県産のアユを放流することにこだわりを持っており、遊漁券収入だけでなく他の事業の収入をもとにして、遊漁券収入を超える費用を放流にかけています。対してB漁協さんはそこまでのこだわりと資金はお持ちではありません。「愛知矢作川未来会議」を通じて話し合っていければと思ったのですが、第一回目の会議で、双方の考えと現状が明らかになり、不調となってしまいました。このことは本当に失敗しました。一番の原因としましては、情報収集が本当に不足しておりました。

この事業を始めるにあたり、事業内容のヒアリングの際にどなたからいただいた言葉で「漁協を置き去りにしてませんか？」って言われたのを思い出しました。本当に置き去りにしてたなと思い、反省しております。

目的の再定義

実態に即した「現場の理解醸成」

当初は「愛知矢作川みらい会議」を通じて、新しい取り組みを進めていく予定でした。しかし実際に進めると、「昔からのやり方を大切にしたい気持ち」や「それぞれの漁協が抱える事情」があり、思うように進まないことがわかりました。

本年度は「漁協の理解醸成」を最優先課題とすることとし、釣りを増やすための施策として「鮎ルアー」に着目。「鮎ルアーは友釣りの敵ではなく、共存可能な新しい入り口である」という認識の統一を第一歩としました

A漁協



放流鮎の品質が同じくなく交渉の余地がない

B漁協



組合長一任友釣りができればよい

川釣りの普及啓発：鮎ルアーの検討


抵抗感の正体とは

組合役員の構成と意識

- ・年齢層：70代が中心
- ・主に友釣りを楽しむ方が多い

そのため、

- ・鮎ルアーは知っているものの、実際に体験したことが少ない
- ・友釣りとの共存に不安がある
- ・おとり店への影響を懸念している



●その結果、まずは経営的に苦しい方のB漁協さんにまず焦点を当てました。B漁協さんは組合員も含めてアユの友釣りが主の漁協です。そこで、友釣り客というのは、これまでも構成分布を見る限り70代を超えて、なかなか若い人が呼べない。そこで、組合長は考えました。アユルアーやってみよう！そして、そのことを組合で報告して同意を求めたところ、組合員からはかなりの抵抗感が出ます。その抵抗感の種類としては、まず友釣りをやるのが主流の漁協において、アユルアーというのは名前は知ってるけれど、実際にやったことはない。友釣り客との共存に対して不安を感じてしまう。これはもう未知なものだからということです。また、オトリ店が嫌な顔をするんじゃないのだろうか？。こういったことが、漁協で挙げられた不満点でした。そこで愛知県内水面漁連では、まず組合員を対象としたアユルアー研修会を行いました。

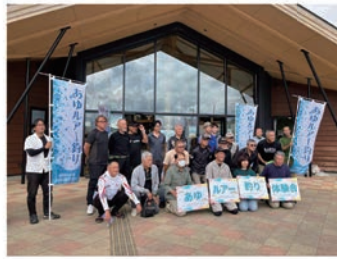
組合員の方々がまず理解をしないと、アユルアーってできないと思ったからですね。まず9月24日にロケハンを実施し、9月28日に漁連傘下の寒狭川中部漁協のアユルアー専用区で、組合員対象のアユルアー教室を開催いたしました。参加者は27名で、ダイワのフィールドテスターの木森直樹さんを招いて実施しました。実際の光景としましては、本当にこんなすごくいい水の透き通ったところでやりました。このことで何が変わったかということ、まず漁協の人たちのアユルアーに対する理解が深まりました。これを始める前には「アユルアーは無理だ」と言っていた副組合長が、「もうフラットな状態で考えていい」、ということまで持ってくることができました。

川釣りの普及啓発: 鮎ルアーの検討

抵抗感を「理解」へ変えるプロセス

現場での実証と組合員の理解促進のため、以下の研修・勉強会を実施しました。

- ▶ 9/24 (ロケハン/勉強会) : 実施に向けた現地調査と事前協議
- ▶ 9/28 (寒狭川中部) : 講師に木森直樹氏 (DAIWA) を招聘し、漁協向けの産学と実釣のワークショップを開催。参加者27名。
- ▶ 2/11 (東栄町) : 振草川漁協が次年度導入に向けた勉強会を開催。



川釣りの普及啓発: 鮎ルアーの検討



組合員自らがルアーを操作し、水中で鮎がルアーへアタックする瞬間の手応えを直接体感しました。
「目に見えるゲーム性」が、従来の釣果至上主義とは異なる、新たな魅力を伝えました。

鮎友釣りとは鮎ルアー釣りの比較評価

研修を通じて、「友釣り vs ルアー」という対立構造ではなく、場所とターゲットを分けた共存・棲み分けが可能であることを確認。

比較項目	鮎友釣り (伝統的釣法)	鮎ルアー釣り (新釣法)	評価と共存の可能性
竿の長さが必要川幅	約9m 広大な川幅が必要	約3m 狭小な河川でも可能	未活用の小規模河川や支流が、新たな漁場として機能して遊漁券販売が増大する
1人あたりの専有面積	約400㎡ (20m×20m)	約60㎡ (左右3m×10m)	釣り人の収容密度を向上させ、漁協収益の最大化に寄与
楽しみ方の質	釣果重視・安定感	ゲーム性・プロセス・戦心の要素が強い	海釣りルアーマンなど、新規未経験層の流入を促進
おとり店への影響	必須	基本不要 (利用可) 遊漁券販売で寄与	おとり利用の手間を減らさず、結局は現地消費に貢献する

【発見】 これまで友釣りには適さなかった狭い川幅の河川が、鮎ルアーなら有力な漁場になる (新資源の発見)。

何より、まったく釣りの知らなかった私
 がアユルアーをかなり勉強しました。その
 おかげで、各漁協に訪ねていくとき、「私
 この前アユルアー行ってきました。これが
 ですね、本当にゲーム性の高い釣りで」と、
 このように言っていくことで、5漁協ほど
 が前向きに考えてくれるようになりました。
 何より関係者がしっくり理解できるっ
 てというのが大きかったと思います。

ここに出席している方はだいたいご存知か
 と思いますが、私が一番注目している
 ところは占有面積です。友釣りはだいたい
 400平米が必要なのに対して、アユルアー
 は60平米。これは何を示しているかとい
 うと、「狭い川でも十分いける」ってこと
 です。400平米が確保できる川じゃなく
 てもいける。そして、「ゲーム性が強い」。
 このことは、もしボウズで帰っても釣り人
 は満足して帰ってくれる。次もお金払って
 日券を買ってくれる。それだからアユル
 アーやろうよと。こんな説明ができるよ
 うになりました。

●ほかにも愛知県としては、デジタルマッ
 プの整備や、データ解析。データ解析に言
 いますと、愛知県の日券を買ってくれる、
 デジタル券を買ってくれるお客さんは、や
 はり概ね50代がトップなんですけど、ほか
 の県に対して唯一違うなと感じたところ
 が、買ってくれる75パーセントから90
 パーセントの人は愛知県民でした。まだ余
 所から来てない、よく知られてないなど感
 じました。なので情報発信。ホームページ
 を作りました、SNSも始めました。ぜひフォローをしてください。

デジタル基盤整備とデータ利活用

勘と経験による管理から脱却し、エビデンスによる漁場計画への転換を目指します。

デジタルマップ整備
 河川をマップ上で可視化し、遊漁者への分
 かりやすい情報提供と可視化を目指し、情
 報を拡充していきます。

データ活用・分析
 釣り人の属性を知るために電子遊漁券デー
 タを整理。客観的なデータに基づく効率的
 な誘客計画の策定に移行していきます。

情報発信基盤
 連合会公式ホームページの新設と、SNS連
 携体制の構築を行い、若年層や新規層へ届
 く発信力を強化しました。

●で、今後の展望ということで、まずしっかりと戦略的エリアの選定ってかっこいい言葉書いてありますが、やる気のある漁協とやる気のない漁協をちゃんと分けて、やる気のある漁協には、もう惜しみなく。やる気のない漁協に対しては、やろうよと粘り強く。そういった意味の選定を行う、まず基本的などのところと、あとは自走型と言いますか、漁協が自分たちでできるような体制を作りたいと思っております。いつまでも、うちが支援するのではなくて、漁協が単体で、大会を開けて人を呼べて、そんなふうになっていただけるように思っております。

今後の展望: 持続可能な愛知へ

実証フェーズを終え、令和8年度以降は振草川漁協等の事例を皮切りに「実装」へ移行します。成功の鍵は、漁協執行部の「やるぞ!」という熱量にあります。


戦略的エリア選定
利便性と景観を重視した「鮎ルアー戦略区画」をピンポイントで設定し、新規顧客の満足度を高めます。

自走型「愛知チーム」の育成
外部の専門人材への依存から脱却し、愛知県内で独自にイベントや勉強会を企画・運営できる自律的なチーム体制の構築を目指します。

検討会で挙げられた課題:
内水面への関心を高めるための取り組みを強化する

内水面漁連の所在する愛知県新城市では、「日本三大軽トラ市」の一つとされる「しんしろ軽トラ市」が、毎月第4日曜日に開催されています。愛知県豊田市から静岡県浜松市にかけての来場者が多く、来場者数は約1,000人～3,000人規模となっています。そのうち、おおよそ1%にあたる10人～30人程度が釣り人と見込まれます。

本事業では、「川談義～あなたの川でのエピソードを教えてください～」と題し、来場者に自由に語っていただく場を設けました。釣り人に寄り添いながら対話を行い、共感をベースとしたコミュニケーションを通じて、普及啓発を図るとともに、現場の声やニーズの把握といった情報収集を実施しました。



釣り人を見つけるアイコン

社会適応性/バイアスの刺激
Q. ブラックバスの放流は違法と言われているにもかかわらず、なぜ放流(キャッチ&リリース)を行うのですか。
Q. 釣り場でゴミが散乱しているところはありませんか
自己肯定感の共感を得る場所
Q. 海釣りでは何が釣れますか

●あと、検討会で色々あげられた取り組みなんですが、まず内水面の関心を高めるための取り組み。フィッシングショーとか色々ありますが、うちの場合はお金もなく、ただ立地的にはすごく良いところがあります。この写真の後ろに見えるところ。これうちの事務所なんです。そのまん前が、「軽トラ市」という、日本三大軽トラ市の会場になっておりまして、うちの事務所は軽トラ市の本部事務所に貸す代わりに、そ

の前に出展させてもらいました。で、だいたい軽トラ市には 1,000 人から 3,000 人規模の来場者があるのですが、お客さんのだいたい 1 パーセントが釣り人です。どうやってその 1 パーセントを見分けるかっていうと、これ、ウェーダーっていいまして、胴長ですね。これがわかる人、だいたい何回、何往復もしまして、ちらっちらっ、しっかりと目で追ってくれる人は釣り人です。

そういう人に声をかけて、いろんな話を聞こうというものです。「川談義、あなたの川のエピソード教えてください」。このように題しまして、もう本当にフリートークです。まず、来てくれた方が話したいことをまず聞きます。そういった話の中で、我々が心がけてるのが社会適合性バイアスの刺激。これ何か、かっこいい言葉で書いてありますが、何かかっていうと、人からよく見られたい、社会の適合性があるんだよっていうふうになんかよく見られたいところをできる限り刺激、刺激していく。そして、自己肯定感。釣りされる方って、家に帰っても結構孤独なことがあって、お母さんが理解してくれないとか、自慢できる場所がない。その自慢できる場所をとにかく用意して、まず、ここに来てほしい、来ていただいて、その場所で、あのような聞き方をします。


ブラックバスの放流は違法と言われてますけど、なんでじゃあちゃんとキャッチ・アンド・リリースしちゃうんですか？釣り場、釣り場が、ゴミで散乱してる場所ありませんか？こちらの、例えばゴミで散乱していませんか？、といった聞き方しますと、見事にこのところが刺激されて、「俺はな、いつも綺麗にしてんだよ」、本当かどうかはわかりません。でもこの共感を得られる場所で、自らそのように発言したことが大事だと思っております。そして、共感を得られる場所というのを利用しまして、「海釣りでは何を釣れますか？」。うち川の連合会ですけど、「海釣り何でも釣れますか？」「今年暑くありませんでしたか？」「できれば夏の暑い時に、木陰でアユルアーやりませんか？」、そんな話の仕方をしています。

なぜ違法なのにキャッチ・アンド・リリースするのか？ これ私も聞いてて、すごく考え方が違うなど思いました。ブラックバスが可哀想だからです。殺しちゃうことが可哀想だからです。殺しちゃうことによって漁場が汚れるのが嫌だとか、そんなことも言ってますが、そのこのところを、そういった考えを持つ釣り人がいるということも考えた上で、ブラックバス対策はしなければいけないなって、本当思いました、この事業をやって。

検討会で挙げられた課題:
継続のために、だれもが運営できる組織であること

漁協では財政的な制約により専属職員の確保が難しく、経理や会計業務を役員が兼務するケースが増加している。しかし、これらの業務は専門性が高く負担が大きいため、担い手の疲弊や離脱につながる課題がある。特に県の指導においては複式簿記による会計処理が求められる一方、経験のない人にとっては単式簿記が限界であり、対応が困難である。このため、未経験者でも運営に参画できるよう、業務の仕組みやデジタル化による負担軽減が求められている。

組合長として
組合員から求められるスキル



指導力
経営能力
調整能力
継続力
提案力
作文力
会計処理...etc

●次に、漁協が継続してくために、誰しものが運営できる組織であると。これについて考えていきます。うちの愛知県の漁協は小さいところが多く、専属の事務員の確保が難しい。なので、理事が兼務するケースが増えてまいす。その理事や組合長に対して、組合員が求めるスキルというものが、指導力、経営力、調整能力、継続力、提案力、作文力、会計処理。これらを1人に対して求めてしまうため、それに耐えきれずに理事をやめる。組合長に

ならされそうだから組合すらやめてしまう。そう多くはないですが、そのようなところが見受けられました。ただ、それは本質的な問題だと思っております。まず、会計に関して、県の指導においてはほしい複式簿記のクラスのことを求められます。それに対して、経験のない人間ができるのは、お小遣い帳みたいな単式簿記が限界です。であるならば、単式簿記を書くかのような形式で複式簿記が作れるような会計システムがあればいいって思いました。そういうことで、試作してみました。現在、うちの内漁連で使って試したのちに、各漁協に普及していこうかと思っております。

●次に挙げますが、遊漁券の販売問題で、釣り人が遊漁券を買うことができず、せっかく釣りにきたが、無券で釣りして、そのまま監視員にも出会うことなく帰ってしまう問題が発生しています。

それに対して、フィッシュパスさんやつりチケさんの電子遊漁券という対策があるのですが、愛知県が考えましたのは、こういったものです。これ、この下の部分を折るとピカッと光る発光体が付いており、発光体

が光ってる間はこの日券が有効だよ、というシステム。それを、このような容器に入れて普通のジュースのごとく売ってみようではないか。そして、この自販機の業者に、もう割り引いた額で初めから仕入れていただいて、漁協が一番初めに売り切ったら終わりとする。そのくらい、手間をかけないような運営を試みたらどうだろうかということを考えました。

この日券の法律的な問題について県の水産課の方に確認したところ、遊漁規則に明記すれば問題なく、要は組合の中で終わる問題であるということでした。この話すると、大抵の方が「どこの自販機に入れよう？」っていうくらい食いついてくれまして、ぜひ、これ来期に実施できれば嬉しいなあと思っております。

検討会で挙げられた課題:
無人で遊漁券を販売したい

多くの釣り人が遊漁券の販売場所を把握できず、やむを得ず無券で釣りに入るケースがあります。また、現場で監視員に出会うこともなく、そのまま帰ってしまうことも少なくありません。こうした課題を解決するため、遊漁券の自動販売機を検討しました。

具体的には、インターネット環境がなくても利用できるよう、自動販売機の缶ジュースを透明なプラスチック容器に置き換え、その中に遊漁券を入れて販売する仕組みです。遊漁券には折ると発光するサイリウムを同封し、購入後に光らせて携帯していただきます。すでに県の水産課に確認しており、遊漁規則に明記すれば問題ないとの認識です。



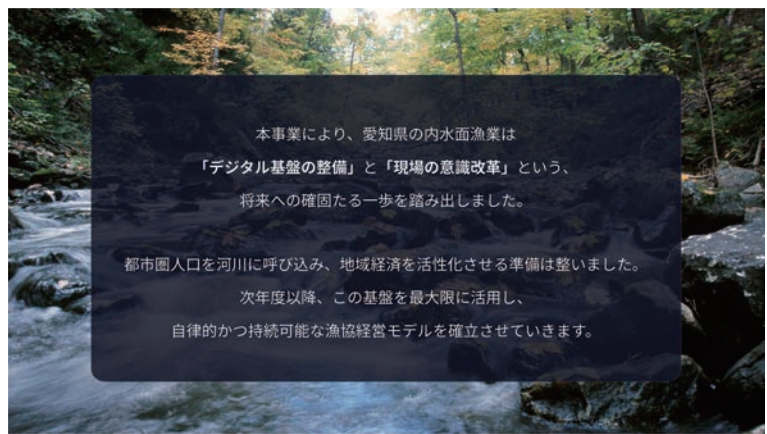
AIによるイメージです

●本事業により、愛知県の内水面漁業は、デジタル基盤の整備、広報という意味でのSNS、ホームページ、そして、遊漁券の販売を見て、どのような販売がされているのかと、ということが分かったのと同時に、現場について本当に詳しく入っていったと思っています。

どんどん愛知県としてやっていかなければいけないのは、まず、釣りに来てない人、残り99パーセントの人口の人たちへの呼び込み。

そして、地域経済を活性するために、漁協と例えば商工会が繋がりを持って、大会運営ができるようなことができたかと思っています。

次年度以降は、先ほどあげました問題、色々なことやりたいという課題のほかにも、組合のための大会運営講座、組合のためのSNS講座、こんな形で組合の運営を助けることができたらいいなと思っています。以上で愛知県の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



～質疑応答～

岩下（事務局）：

大竹さんどうもありがとうございました。初年度ということで色々と紆余曲折もあったかと思いますが、トライ・アンド・エラーで進めてこられたんですね。皆様、質問いかがでしょうか？
はい、水産庁の丸茂さんお願いします。

丸茂課長補佐（水産庁栽培養殖課）：

水産庁の丸茂です。発表ありがとうございました。お疲れ様でした。本当に多岐にわたる取り組みをされていて、素晴らしいと感じました。アユルアーの検討会や軽トラ市での発表、それに自動販売機の取り組みなど「すごいな」と思って伺っていたのですが、これらの活動は年度初めの計画段階では挙がっていなかったように思います。これらは最初から考えていらっしゃったことなののでしょうか。それとも、事業が始まって進めていく中で、色々アイデアが生まれて実行されたのでしょうか。そのあたりをお聞かせいただければと思います。

大竹（愛知県内漁連）：

ご質問ありがとうございます。当初の計画では、まずは愛知県の客層を調べることで、そして先ほどお話ししたA漁協とB漁協の間で「共通遊漁券」を実現することを主眼に置いていました。ところが、当初予定していた共通遊漁券の話がいきなり頓挫してしまいまして……。なぜ失敗したのか、なぜ頓挫したのかを自分なりに考えたところ、「漁協のトップは『やれる』と言っていたけれど、その下の現場の方々の思いまで踏み込めていなかった」という反省が生まれました。そこで「それでは漁協が本当に求めているものは何なのか」という視点で考え直し、今回の様々な活動を形にしていきました。ですので、ご質問への答えとしては「後者」になります。事業を進める中で思いついたアイデアを形にしていっていったものです。

和歌山県内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 佐古 充

令和7年度みんなでやるぞ 内水面漁業活性化事業 成果報告会

和歌山県内水面漁業協同組合連合会

コーディネーター 佐古 充

和歌山県内水面漁業協同組合連合会のコーディネーター佐古です。よろしくお願いいたします。

和歌山県内水面漁業協同組合連合会
会員 13 河川漁協
組合員数 4,681人（令和6年12月31日現在）…16,210人（昭和61年）
漁業権魚種：
アユ(13漁協)、アマゴ(9漁協)、うなぎ(6漁協)、こい(1漁協)、もくずがに(7漁協)



●和歌山県はちょうど紀伊半島の西側にあって、上を大阪府、紀伊半島の中央部には奈良県がありまして、東側は三重県と接している県です。温暖な気候ではありますが、度々台風の被害が起こるところでありまして、雨量も降水量も多い県であります。

和歌山県には13の河川漁協があって、全てが和歌山県内水面漁連に属しております。組合員数については、令和6年12月30日現在の人数では4,681人です。

最盛期だった昭和61年には16,210名の組合員がおりました。それに比べたらかなり減っておりますし、去年の発表の時は5,000人ほどだったので、1年で約300人が減っております。

漁業権としては、アユが全て13漁協にあり、アマゴが9、ウナギが6、コイが1、モクズガニが7漁協あります。

●これはほとんど皆様方の各県も同じだと思っただけですが、このみんなでやるぞ事業に取り組むにあたっての背景とは、各種の河川工事、山林の荒廃や大雨災害、災害復旧による河川環境の悪化、でまたカワウや外来魚による食害、あと急速な過疎化によって、組合員の減少が見られております。それに伴い、また遊漁者の減少や漁協の役員の高齢化が進みまして、以上のことから漁協の経営が悪化

◎背景

- (1)河川環境の悪化
- (2)カワウや外来魚による食害
- (3)急速な過疎化→組合員の減少
- (4)遊漁者の減少
- (5)漁協役員の高齢化、職員の不足
→漁協事業が実施できない

⇒漁協経営の悪化が深刻

して収入が減少している、ということで職員が雇えない、職員が不足しているということで、漁協事業が実施し得ないという、深刻な状況になっております。

◎ゾーニングや釣り人と連携した漁場管理

(4)遊漁者の減少

⇒「わかやま友釣り塾」
「友釣り体験教室」の開催

(5)漁協役員の高齢化、職員の不足

→漁協事業が実施できない
⇒紀の川大堰の人工河川式魚道における産卵場整備作業の実施
⇒玉川漁協アマゴ発眼卵放流


●そういったことを少しでも食い止めたいため、ゾーニングや釣り人と連携した漁場管理において、遊漁者の減少対策として、和歌山友釣り塾と友釣り体験教室の開催を、5番目の漁協役員の高齢化や職員の不足により漁協の事業が実施できていないことに対して、紀の川大堰の人工河川敷魚道における産卵場整備作業と、玉川漁協でのアマゴ発眼卵放流を実施しました。

●「わかやま友釣り塾」です。これは平成28年より実施している事業で、ちょうど令和7年度で10年目を迎える塾でありまして、令和2年と3年については新型コロナウイルス感染拡大のため中止しておりますが、ちょうど令和8年度8期生を募集しております。対象者としては、18歳以上、今シーズンから本格的に釣りを始める方で、全講習4日間を受講できる方、アユタビやタイツといった服装等を準備し、車で参加できる方、

「わかやま友釣り塾」

平成28年より実施（令和2年と3年は新型コロナウイルス感染拡大のため中止）
（第8期生募集）

〈対象者〉下記の条件を満たす方
○18歳以上で、今シーズンから本格的に友釣りを始める意思のある方
○全講習（4日間）を受講できる方
○アユタビ&タイツ（又はウエーダー）、帽子、服装（アユベスト等）を準備し、車で参加できる方。
※アユ竿、引舟、玉網、ベルトはシーズン中レンタル可能
※レベルアップ講習ではありません。友釣りができる方は申し込みません。
〈参加費〉無料 ※無料に含まれるもの 講習代、アユ竿等レンタル、仕掛け・針等消耗品、講習日の遊漁券・オトリ代
〈募集人数〉20人⇒**37人参加**
※希望者多数の場合は、書類選考の上決定し、メールで連絡します。
ドメイン「naisuimen.com」からのメールを受信できるようにしてください。
〈申込期間〉令和7年1月17日～3月31日 まで
〈申込方法〉本募集説明下部の申込みフォームリンクより、必要事項を記入の上、送信してください。
〈講師〉喜多幅 武、福田真也、宮井孝和、森岡達也（敬称略、五十音順）
〈塾長〉つり人社 会長 鈴木康友
〈講習内容〉5月の延3日間で、仕掛け作りや友釣りの基本的な知識・技術を指導し、10月に卒業検定を行います。



ということです。竿でや引き舟、タモ、ベルトはシーズン中レンタルしております。先ほど言いましたように、これはレベルアップ講習ではないので、初心者やこれから友釣りを始める方を対象にしております。参加費は基本無料で実施しており、無料に含まれるものには講習代や遊漁券とおとり代も含まれます。毎年、募集人員20名と書いてはいるんですけども、昨年1月17日から3月31日まで募集しまして、結局37名の参加がありまして、当初は20人ぐらいまで書類選考して絞ろうやないかという話もあったんですけども、講師先生と相談した結果、せっかく申し込んでもらったんだからということで、倍近い37人の参加を受けました。講師については4名おられ、釣具メーカー各社のテスターさんと、株式会社つり人社の会長の鈴木康友さんにこの友釣り塾の塾長を務めていただいております。

令和7年度8期生37名は、20代が8名、30代7名、40代5名、50代11名、60代6名で、女性が7名参加されました。だいたいその半分近くが隣県の大阪府と和歌山県の方です。人数で言いますと大阪から19名、和歌山県が9名、奈良県が4名というところで、遠いところでは愛知県から2人参加していただきました。

令和7年度(第8期生) 37名が受講
 ※20代…8名、30代…7名、40代…5名、50代…11名、60代…6名 女性7名

- 1回目：5月11日 開塾式、机上講習
 (仕掛け作り) …対象外
- 2回目：5月18日 河川講習(実釣) …対象外
- 3回目：6月1日 河川講習(実釣) …対象外
 6月～8月は自主練習
- 4回目：9月14日 腕試し講習(大会形式)
- 5回目：10月5日 卒業検定(実釣)

第8期生37名全員無事卒業
 (1期生から8期生 合計176名卒業)

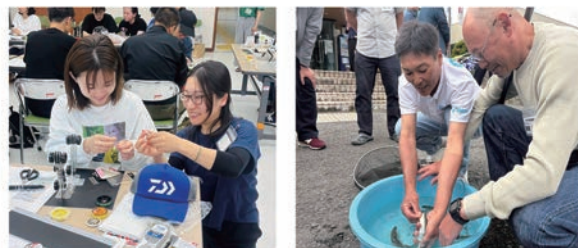


●1回目から3回目の開催時期は「みんなでやるぞ事業」の事業期間から外れますので対象外なのですが説明します。第1回目は6月11日に開塾式と仕掛け作り、続いて2回目、3回目に実釣を行っております。やるぞ事業の事業期間内の4回目は「腕試し講習」というのがあるんですけども、これは8期生と卒業生とがペアを組んで、お互い教え合いながら大会形式の講習を行っております。5回目は「卒業検定」で、これも実釣です。

その結果、8期生37名が無事卒業しまして、これまでに1期生から8期生で合計176名が卒業しております。この卒業の基準というのは、何匹釣ったから卒業とかっていうのではないんですけど、一連の作業というか所作ができれば合格です。2回目、3回目、4回目、5回目で必ず一人1匹は釣っており、全く釣れなくて卒業という方はゼロでした。

●これが実際の机上講習の仕掛けづくりです。ちょうどこの左側の写真、こちらの女性の方、右側の女性の方が卒業生で、左側の白いシャツの方が受講生なんです。右側の写真は鼻カンをつけているところです。これらは2、3回目の河川での実釣の講習の様子です。これが腕試し講習での集合写真です。これは5回目の卒業検定。卒業生一人一人に鈴木会長が卒業証書を授与しているところであります。

第1回目：机上講習（仕掛け作り）



第2回目：河川講習（有田川）
 第3回目：河川講習（日置川）



4回目：腕試し講習（日置川・大会形式）



5回目：卒業検定（日高川）



●友釣り体験教室です。これは友釣り塾とは別で、日置川で実施している事業です。先ほどの友釣り塾とは実践型になるんですけど、これは1日体験の教室であり、夏休み中に6回の実施計画を立てましたが、天候等で2回中止になってしまいましたが、4回の開催で37名の参加がありました。講師についてはこれ地元の漁協の役員さんが中心で講習を行っておりまして、先ほどのわかやま友釣り塾の卒業生の方もサポートをしてくださっております。

友釣り体験教室




日置川
 実施場所：田辺市中辺路町近露
 実施日：6回実施計画
 7月27日、8月4日、
 8月18日、8月25日、
 (計4日間 37人参加)

紀の川大堰の人工河川式魚道における産卵場整備作業

自然環境の保全や自然を通じた社会活動を行いたいという理念を持った企業に、内水面漁協が行っている増殖活動等を「研修プログラム」として体験させることにより、社会的な役割・重要性の認知度の向上と漁協収益の向上につなげる取り組みを行う。
 また、この活動の意義を参加者同士で語る座談会を開催した。

実施場所：和歌山市有本（左岸）




●次は紀の川大堰です。漁協の役員だけでは、なかなか活動ができない状況下にあるということで、紀の川大堰の人工河川敷魚道における産卵場造成の整備作業を今年度も行いました。これは企業の参加プログラム、研修プログラムになります。大台ヶ原を源流として県北部を流れる紀の川の河口に、平成15年に大堰が建設されました。地元の紀の川漁協は平成19年から、その人工河川、ちょうどこれが人工河川になるんですけども、ここで清

掃作業を行った後、アユの稚魚を放流して増殖活動を行っています。これまでは本当に10名足らずで作業を行っていました。

●人工河川の長さは大体800メートルあるんです。幅は6メートルぐらい。ずっとほったらかしですので、沢山の藻が生えてしまいます。それらの藻を、昨年度も参加いただいた企業の方をはじめ、国土交通省の和歌山河川国道事務所の所長・副所長さん、釣り人やわかやま友釣り塾の卒業生、流域の漁協の関係者、また、水産技術研究所の坪井さんも昼からの座談会のために朝から参加して藻引きをしていただきました。昨年度は大体28名だったと思うんですけども、今回はその1.5倍、総勢44名の方々に参加をいただきました。昨年度は大体朝から午後の2時か3時頃まで清掃の時間がかかったんですけども、44名なら800メートルの区間を半日で終わられました。このように皆さんウェーダーを着て川に入って作業していただきました。

清掃作業

実施日：令和7年10月25日
 参加者：企業1社(1名)、国土交通省、釣り人、わかやま友釣り塾、流域の漁協関係者、紀ノ川漁協 など合計44名







座談会

水産技術研究所 坪井潤一さん
和歌山県自然博物館 平嶋健太郎さん
和歌山移住オンナ 宮本遥菜さん（わかやま釣り塾7期生）



●昼からは水産技術研究所の坪井さん、和歌山県立博物館の学芸員の平嶋健太郎さん、和歌山友釣り塾の卒業生で YouTuber 「和歌山移住オンナ」こと宮本遥菜さんに登壇いただき、和歌山県庁資源管理課の赤松さんの司会進行で、この活動の意義などを話し合う場として座談会を開催しました。

● 10月31日には、綺麗になった人工河川に紀の川漁協で養成したアユの親魚 1000キロ、1尾 100グラムで1万匹を放流しました。

続いて12月13日にアユの産卵と流下仔魚観察会を開催しました。先ほどの自然博物館の平嶋さんのご協力も得まして、こういうチラシを撒いて募集したところ、56名の参加者が来ていただきました。去年は別々に日を分けて開催したのですが、なかなか人の集まりが悪かった反省のもとで、今回は13日土曜日の夕方3時から卵と赤ちゃんの観察会を行いました。

こちらも国土交通省の和歌山河川国道事務所の所長・副所長・課長さんや、博物館の友の会の方々、地元和歌山大学の学生さん、県立高校の生物部の学生さん、そしてわかやま友釣り塾の卒業生の方々に参加いただきました。人工河川はちょうど水深が20～30センチぐらいで、お子様でも川に入って石を掴んでみたら卵が見られる状況で、発眼卵も観察できました。ちょっと時期的に遅かったので産卵の状況は悪かったんですけど、夕暮れ・日没後の流下仔魚の観察会では、県の水産試験場の方にもお手伝いいただいて、プランクトンネットで流下仔魚を採取、観察することができました。

自然の河川では、特にこういう小さい子どもたちが川に入って卵を見る経験はなかなか難しいと思うんです。自分で言うのは何なのですが、たくさんの人が参加されて、卵のや仔魚の観察していただけたことで、本当にもう有意義で、大成功やったかなと思っています。

親アユ放流（親アユ1,000kg）
実施日：令和7年10月31日



産卵及び流下仔魚観察会 日時：令和7年12月13日(土)



和歌山の宝・アユの秘密に迫る！
卵・仔魚（赤ちゃん）観察会

和歌山の清流が育む名産の一つ、アユ。その命の始まりを知っていますか？本観察会では、アユがどのように生まれ、育っていくのか、観察し見ることができない「卵」や「仔魚（しごき・赤ちゃん）」の姿を、安全な人工河川内でじっくりと観察します。アユの生態への理解を深め、和歌山の豊かな自然の恵みを感じていただきます。定年で引退した学生さんや、自然保護に関心のある市民の皆様のご参加をお待ちしております！

★イベントのポイント★

- 「アユの産生の秘密を解き明かす！」
どんな場所？で産卵しているのか、間近で観察できる！
- 山門前川によるわがやまの帰国
- 講師として、和歌山県立博物館の平嶋健太郎氏（学芸員）をお招きします。専門的な知識に基づいた解説を聞きながら、アユの生態を深く学びます。

持ち物

- 靴以上の長靴、ウェーダーがおすすめです。（お借りに入ります）
- 防水性の手袋（肘までの長さがおすすめです）
- ヘッドライト（夕方以降の観察に活用するため）
- 観察用グッズ（観察ケース、カメラなど）

※参加費は無料です。持ち物はご自身でお願いします。

ご参加ご希望の方は和歌山県内水産漁港までお電話ください。入場料も全て、お持ち帰りする場もございません。

電話番号：0735-66-0477 メール：info-mail@naburaiman.com

産卵及び流下仔魚観察会
参加者：56名

※主な参加者：国土交通省、和歌山県、県自然博物館友の会、和歌山大学生、県立高校生物部、わかやま友釣り塾、



●次は玉川漁協さんの発眼卵放流および意見交換会です。釣具メーカーの株式会社ティムコさんとともに、釣り人と漁協の接点を増やす目的で、アマゴの発眼卵放流を実施しました。玉川は和歌山県の北東部、大阪と奈良の県境に近いところにある紀の川の支流になります。11月23日に、虫かごにアマゴの発眼卵を入れまして、2万粒を右の赤い点の3か所にわけて放流をしました。当日はこの事業の視察で佐藤成史さんがお見えになって、いろいろとアドバイスいただきながら実施しました。放流作業の後は参加者と漁協関係者での意見交換会を開催しました。

ティムコさんからは、稚魚放流は今まで経験していたが発眼卵放流というのは初めての体験だった話や、遊漁者の中にはこうした事業へ積極的に参加したいものの、なかなか漁協の方でも情報発信ができていない課題も明らかになりました。やはり、和歌山県はどう

してもアユが主体の漁協が多く、アマゴについては少し遅れてるようなところもあったんで、うちの内水面漁連でも今後はアマゴについても少しでも力を入れた情報発信をしていきたいと思っております。

玉川漁協 アマゴ発眼卵放流及び意見交換会

釣具メーカーである㈱ティムコと共に釣り人、漁協との接点を増やす目的でアマゴ発眼卵放流を実施。



開催日：令和7年11月23日(日祝)
 場所：丹生川流域3ヶ所
 放流数：2万粒（漁協分1万粒含む）
 参加者：29名

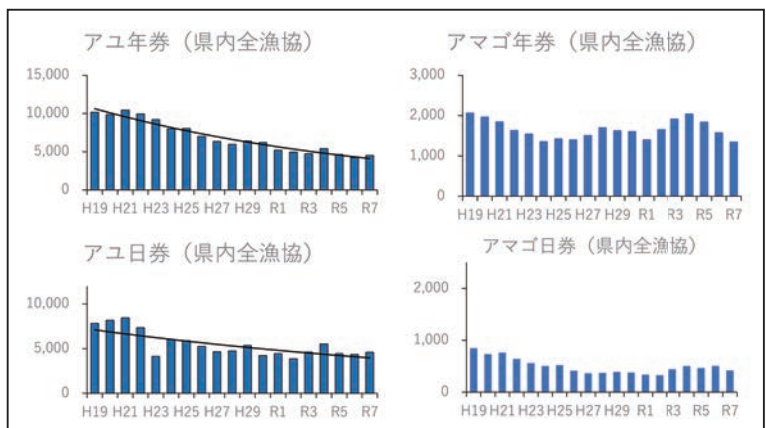


ICT遊漁システムを活用した漁場管理の高度化、内水面漁業の活性化

- ・和歌山県内で発行されている紙券の購入者情報の実態を把握し、遊漁者の攻勢を把握することで今後の情報発信の基盤を作る。
- ・遊漁者向けの情報発信強化
 YouTuberの「和歌山移住オンナ」こと宮本遥菜さん（わかやま友釣り塾8期生）に県下河川のアユ釣り動画の撮影および発信を依頼。
- ・遊漁者向けデジタル地図の検討と制作

●続きまして、ICT遊漁システムを活用した漁業管理の高度化、内水面漁協の活性化です。これは株式会社フィッシュパスさんをお願いいたしまして、購入者情報を把握し、遊漁者の情報発信の基盤を作り、遊漁者向けの情報発信強化も目的として、先ほどの YouTuber 「和歌山移住オンナ」こと宮本遥菜さんをお願いして、県下河川でのアユ釣り動画の撮影を依頼しております。あと遊漁者向けのデジタル地図も策定しております。

●これは県内の漁協の年券と日券全体の資料です。平成19年に比べたら現在はもう半減しております。年券も約半減しております。アマゴもおおよそそうです。アマゴの年券で令和3年とか2年、3年ちょっとポコッと膨れているところがあるんですけども、それはゾーニングでキャッチ・アンド・リリース区を設定した漁協が全部で4つありまして、そういうところで補助が出た、開始したらちょっと収入が増えたところなんです。それが今

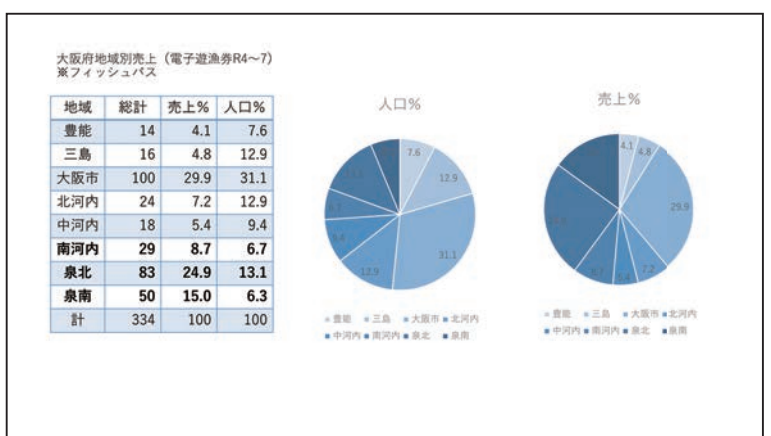


は補助事業がなくなったところで、また減少してきたという事情があります。

日高川漁業協同組合 (R4~6)			有田川漁業協同組合 (R4)			古座川漁業協同組合 (R2~5)		
	枚数	%		枚数	%		枚数	%
和歌山県	960	28	和歌山県	270	23	和歌山県	540	28
大阪府	1622	47	大阪府	672	56	大阪府	552	29
奈良県	347	10	奈良県	124	10	奈良県	160	8
兵庫県	211	6	兵庫県	62	5	兵庫県	105	6
京都府	164	5	京都府	48	4	京都府	78	4
滋賀県	18	0	滋賀県	5	0	滋賀県	20	1
三重県	68	2	三重県	4	0	三重県	288	15
その他	70	2	その他	15	2	その他	154	8
計	3460	100	計	1200	100	計	1897	100

●これがフィッシュパスさんにおいて上期のデータを取りまとめた表です。和歌山は大阪府に隣接しており、日高川は和歌山でも1、2を争う有名な河川で、半分ぐらいが大阪府からのお客さんで次は和歌山県という形になります。古座川漁協さんは一番県の南にある川ですが、そこでもやはり大阪府が3割ぐらいを占めており、お隣の三重県からも多く来ていただいているのがわかります。

●先ほど大阪府と言いましたが、大阪の地区別のデータでは、太字で書いている南河内、泉北、泉南は大阪の南部。ちょうど大和川より南の地区になります。大阪府の人口比率から言いますと、この地域は4分の1しかないんですけれども、売り上げがちょうど半分ぐらいありまして、やっぱり主に和歌山県に来ていただく方のメインは大阪府の南部の方。やはり、和歌山の北部と大阪の南部とは行き来、交流があるので、大阪の南部の方は和歌山は近いというイメージがあるみたいです。逆に大阪の北部の方から見たら、もう和歌山って遠いな、というイメージあるみたいです。大阪でも北と南で和歌山に対する距離感が違って、大阪の南部の方がより和歌山に来ていただいているということがわかりました。



・遊漁者向けの情報発信強化

YouTuber「和歌山移住オンナ」こと宮本遥菜さん（わかやま友釣り塾7期生）に県下河川のアユ釣り動画の撮影および発信を依頼
4河川（紀ノ川・日置川・古座川・七川）※紀の川大堰人工河川の事業も

吉座川にやってきました

鮎ジャパンカップ王者の君臨する川・日置川で友釣り修行してきました（和歌山...）

●次に、情報発信です。「和歌山移住おんな」宮本遥菜さんに、本年度は4河川を撮影していただきました。また、紀の川大堰の事業についてもYouTubeで発信いただきました。

●和歌山県ではホームページで情報発信しております。これは、ユーザー登録していただいた遊漁者に釣果を投稿していただいて、そのまま載せているんですが、投稿したらスロットが回って、大当たりの「背掛かり三連発」が揃ったら来年度の遊漁券が当たるシステムです。もし外れても、抽選で地方の名産品などをプレゼントするというホームページになっております。



●先ほどのホームページは、実際釣りをする方をメインに対象としたホームページなので、これから釣りをされる方や観光目的の方からしたら、とっつきにくい思いもあります。そこで、ホームページをもう一つ作って、川の魅力や各種観光の発信し、多くの人に情報を見ていただきたいという思いで、和歌山県公式観光サイト「聖地リゾート」とリンクさせていただいて、川の発信を行ったらどうかと考えて、今進めているところです。

●デジタル釣りマップの作成もお願いしました。釣り人への情報として、駐車場や入川道の細かい情報が一番必要だと思いますが、駐車場も私有地だったり、地図上に表すのはちょっと厳しいところもあります。入川道にも看板を立ててくれているのですが、実際に行ったらヤブの中に入っていきような場所もあり、そういった整備も必要なので、表示するのはちょっと難しい思いは持っています。あとトイレですね。女性の方も増えておりますので、トイレについてもマップに載せていきたいと思います。



まとめ

- ・「わかやま友釣り塾」
体験型の釣り教室よりも実践型の教室であるにもかかわらず、毎年入塾者が絶えない。講師、各釣具メーカー、釣具店、関係者の方々はもちろん、卒業生の協力が大きい。「わかやま友釣り塾」の輪(和)が年々広がっているのが実感できている。「友釣り体験教室」との連携強化を図る。
- ・紀の川大堰の人工河川式魚道における産卵場整備作業
自然の河川では体験できない産卵場整備から流下仔魚調査までの漁協が行う増殖活動が、身近に体験できるので、地元企業や自治体へ発信し、漁協の取り組みの社会的役割・重要性をもっと認識してもらいたい。
- ・玉川漁協 アマゴ発眼卵放流及び意見交換会
漁協が行う増殖活動が釣具メーカー、釣り人と共に実施できた。お互いの接点を増やせた。
- ・ICT遊漁システムを活用した漁場管理の高度化、内水面漁業の活性化
遊漁券の分析の結果、和歌山県内及び近隣(大阪府)の遊漁者が多数を占める。県内及び大阪府の遊漁者へ重点的に誘致活動を進めたい。また、年齢層は50歳以上の方が6割以上を占める。20代30代の遊漁者を増やすとともに、50代60代の方も誘致したい。情報発信の重要性が増す中、県公式観光サイト「聖地リゾート 和歌山」を活用し広く情報発信を行いたい。またHPを持たない漁協の情報発信を積極的に行うとともに、漁協の活動及び河川の紹介動画などを製作し発信したい。

●まとめです。わかやま友釣り塾、実践型の教室であるにも関わらず、毎年入塾者が絶えません。来年8年度の9期生を3月1日から募集を開始して、昨日の夕方時点で16名の応募がきております。いつもよりペースが早いです。そのうち4人は女性です。講師の方々や各釣具メーカー、釣具店、釣り人のご協力はもちろんですが、やはり卒業生の方々の協力がとても多く、それを無くしては

この事業は成り立たないと思っています。新しい塾生さんとグループを作ったり、互いに連絡を取り合いながら実施しており、友釣り塾の輪が年々広がっているのが実感できております。卒業生の協力があるからこそ友釣り塾です。また、紀の川大堰の活動も和歌山の子どもたちにもっと川のことを知ってもらいたい思いで実施しております。

漁協がこういったことをしていることを、もっと地元の企業さんや自治体の皆様方にも発信していきたいと思っています。玉川漁協さんのアマゴの発眼卵の放流も、メーカーさんや釣り人の皆さんと互いに協力し合いながら取り組んでいきたいと思っています。

ICT 遊漁システムでは、近隣の大阪府、特に南部の遊漁者が多数を占めることがわかりました。大阪府の人口は和歌山県の約 10 倍あるので、大阪南部の方にもっと和歌山に来ていただけるように、情報発信をしていきたいと思えます。また年齢層でも、金銭的、日程に余裕のある 50 代、60 代の方にも来ていただきたい、そういう誘致をしたいと考えております。

また、県の公式の観光サイトを活用し、ホームページを持たない漁協さんについても、もっと積極的に発信を取り組んでいきたいと思えます。

以上で和歌山県から発表終わります。ありがとうございました。

新潟県内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 藤田 利昭



新潟県内水面漁業協同組合のコーディネーターの藤田です。お願いいたします。

普段私は水産振興協会で放流用のアユの種苗を生産して放流するという仕事をしている関係で、県内漁連とは深く繋がっております。

この事業は今年は1年目になりますが、事業を行うにあたって、やっぱり「なんで新潟県で急にやることになったの？」っていう話を詰めました。

状況は皆様方と同じです。組合員が減少したり高齢化したり、どんどん減っています。ただし新潟県ではそれらに加えて、実は内水面漁協の収入としてサケ稚魚の国の買い上げがかなりあります。サケが取れなくなった時点で漁協様もかなり困っており、もう本当に今やらなければこのまま消滅するのじゃないか？というくらい困っているため、この事業に取り組むことになりました。

新潟の事業目的

**川釣りは、地域に残された貴重な資源
その活性化と関係人口の増加を目指す**

**「どのような施策が、新潟として有効なのか」
小委員会を設置して検討へ**

構成メンバー | 新潟県水産振興協会専務理事 藤田氏、新潟県水産課副参事 山口氏・技師 井口氏、水産試験場資源課長 吉田・主任研究員 岡地、魚沼漁協 前参事 桑原氏、新潟県観光協会 次長 磯貝氏・主任 梁瀬氏、フィッシャーズ黒崎 店長 中野氏、内水面連合会 副会長 北村氏（魚沼漁協）、委託事業者（フィッシュバス） 事務局メンバー | 専務理事 新沢・事務局長 補佐 多田・主任 小日山

●そんな背景もあり事業を始めるのですが、皆様方と同じです。

まずは、どのようにしていくか？。内漁連の体制だけでは力がないものですから、まずは小委員会を立ち上げました。資料をご覧ください、構成メンバーとして行政、水産試験場、釣具メーカー、そして観光協会を私どもは仲間に入れてもらうということで進めました。

検討する内容

- 減少の要因を探る / 考える
- 増加させるための施策着手

具体的には

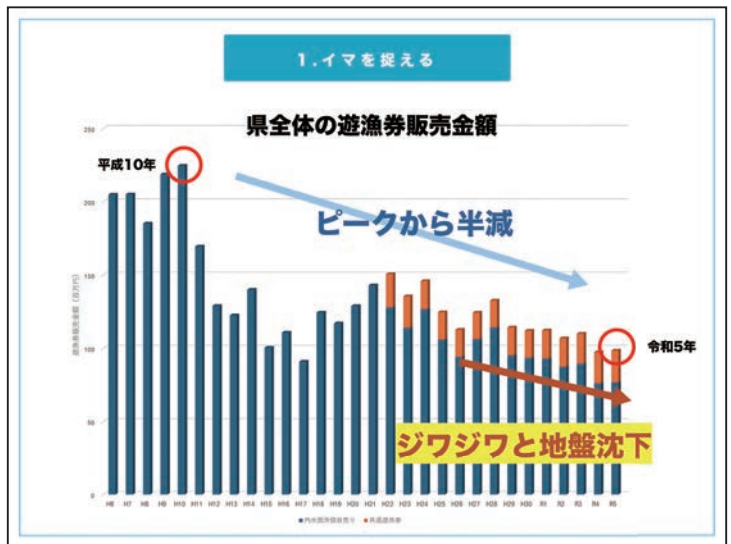
1. イマを捉える作業
2. 漁協のリアルを探る作業
3. 情報の拠点を作る作業

●検討する内容は、やはり釣り人を増やすことによって収入を得たい、ということなのですが、今、どんな状態か具体的にはっきり分かっていない。漁協さんはどういう点に困っていて、どうしようとしているのか、ということをもっと探って、そしてそれを何とか皆様たちにも広く知らしめたいということで進めてまいりました。

●まず、今の状況ということで見ていただきます。

新潟県は広いのですが、意外と遊漁券の収入はあまり多くなくて、最盛期で2億ちょっとだったものが見事に減っております。不思議なことにコロナの時期も釣りの方は良かったのか、あまり減らなかったんですが、やっと1億円超えるぐらいしか遊漁券の収入はありません。

これを何とか増やしたいと考えています。



1. イマを捉える

Q. 釣り人はどこから来ているのか

【県溪流魚共通券より】

都道府県	件数	割合
新潟県	852	69.5%
群馬県	113	9.2%
埼玉県	95	7.7%
東京都	69	5.6%
長野県	33	2.7%
神奈川県	26	2.1%

新潟70%

関東25%

【紙】遊漁券販売の集計

都道府県	件数	割合
新潟県	599	71%
群馬県	85	10%
埼玉県	63	7%
東京都	36	4%
長野県	23	3%
神奈川県	13	2%

【電子】遊漁券販売の集計

都道府県	件数	割合
新潟県	253	65%
東京都	33	9%
埼玉県	32	8%
群馬県	28	7%
神奈川県	13	3%
長野県	10	3%

●新幹線ができてからスキー場の方は賑わっているのですが、釣り人口は関東からあまり入ってきていない実態があります。

ほぼとは言いませんけど、7割方が県内の釣り人の遊漁券で賄われております。

関東から来られていると言っても25パーセント。そのほか、遠いですが関東の方というのはほとんど釣りに来られることはないような状況です。

1. イマを捉える

Q. 新規客とリピーターの割合

- 2024年 | 387件 (新規187件 リピーター202件)
- 2025年 | 365件 (新規111件 リピーター246件)

電子遊漁券の販売内訳より

2023	2024	2025	件数	
●			316	単年購入
	●		387	単年購入
		●	365	単年購入
●	●		201	複数年購入
	●	●	105	複数年購入
●		●	8	カムバック購入
●	●	●	141	3年連続

2023年	購入数	316
2024年	購入数	387
	新規	185
	既存	202
2025年	購入数	365
	新規	111
	既存	246
	2年ぶり購入	8

2023年のみ購入	106	離脱者
2024年のみ購入	80	離脱者
2025年のみ購入	111	

▶ 単年購入のみの離脱者は、

- 年齢によるものか？
- 興味が失くしたのか？

●では、その中身はと申しますと……。釣り人のうちの1/3が毎年入れ替わっているという状況です。

その離脱者というのはお年を召された方で、亡くなったわけじゃないでしょうけれども、お年を召されて釣りを辞められた方々と推測をしています。

そこに若い方に入っていたら、1/3が脱落するという部分はかなり補えるのじゃないかと考えています。

●それから、困ってる困ってるという漁協は現状どのような状況か？ということで、各漁協を訪問して話を伺ってまいりました。

県の一番南。皆様、翡翠という石をご存知ですよ。翡翠の取れる糸魚川と、それから、少し北の能(のう)、そして、県北部の荒川という三箇所の漁協を回った結果です。


糸魚川の漁協では、姫川という大きな一級河川ありますが、サケが取れない関係もあって、今度サクラマスと漁業権魚種にしたい。サクラマス釣りは普通の遊漁券に比べて高く、日釣りで2万円ほど取れる。釣り人にもインパクトのある魚なので、サクラマスを漁業権化して釣りをさせたいと考えておりました。

次に、能。皆様方の漁協もどうでしょうか？組合長やりたいって人、豊富にいらっしゃいますか？みんな組合長やりたくないし理事もやりたくない。そんな状況が多い中で、地域おこし協力隊の方々が全国にいますよね。その方に組合長になってもらって、今後、若い人を惹きつけるような新事業を立案しているという組合もありました。

それから、県の北部の荒川。ここ、実は20年ほど前になりますが、1日2万円で河川でサケ釣りをやらせることによって、組合でおおよそ2,000万円の収入があったそうです。サケ釣りに来る方は県内よりも県外の方が多くて、周辺の旅館や地域のお店等も潤ったということで、観光にも非常にプラスになったという成功体験があります。そういったところですが、サケがダメになった後どうしようということで、今後はアユに注目をしているという状況があります。

2. 漁協のリアルを探る

変化する環境と釣り人のニーズに対応するため、
県内の漁協を巡回し、現場が抱える課題や運営の負担を**直接ヒアリング**



糸魚川

サクラマスの漁業権取得を目指して調査や種苗を育成中

能生

組合長世代交代。地域おこし協力隊主体でHPリニューアル。サーモンなど新規事業立案していく

荒川

20年前は清流日本イチョモダムの影響を感じている。アユの産卵床造成にトライしたい

など

2. 漁協のリアルを探る

- 新たな漁業権取得の手順(魚種)を知りたい
- キャッチアンドリリースの考え方と漁場管理
- 流行りのアユルアーを学びたい
- 放流しても魚が釣れないので資源調査がしたい
- サケでは漁業が成り立たなくなっている
- サクラマスを狙う人が増えたので対応したい

▼

川にかける思いは熱く、
「新潟の川は凄い」を再構築して、自信に繋げていきたい
次年度は、上記の課題を参考に施策立案へ

さらにいろいろと要望を伺うと、先ほど言ったサクラマス含めて新たな漁業権魚種を作っていきたい。また、若い人たちのための・・・まあ、私なんか古い人間ですから、釣ったら食べなきゃと思っているのですけれど、今はそんなこと言っているような状況じゃないようです。キャッチ・アンド・リリースの区間を設けたところは非常に若い人が来ていると。

で、先ほどから話に出ているアユルアーは人を呼べるということでアユルアーの講習会をやりたいとか。放流しているのに魚が釣れない。これはどこの川でもよくある話ですが、浮き石がないとか川が傷んでますよね。色々な状況の中で、国交省や県の土木ともう少し連携していかなければいけないと思っている、といった話がありました。

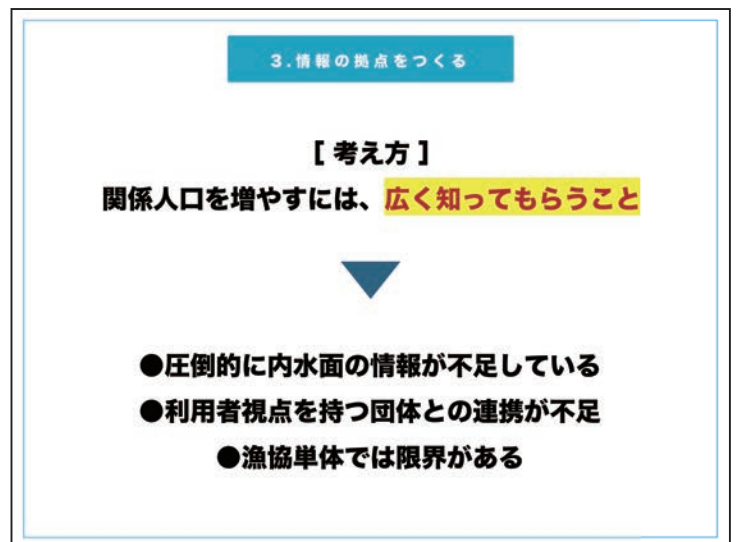
先ほども言いましたが、本当にサケはもうどうしようもない。北の県の方はよくご存知かと思いますが、サケではお金を稼げない。現在のところは、サクラマスはまだ若干ですが帰ってきてますので、そういったものでお金を稼ぎたい。

こういったことを整理しました。来年もこの事業を続けたいという強い意思があり、なんとかこれらの課題を整理していきたいと思っております。

●釣り人を集めるにしても、どのような形なのか？また、釣り人ばかりでなくて川に関心を持っている人や、川に関心のある企業さんなどとも連携をしたいと考えております。も広く集めたいと考えております。

釣りに関しても、どんな道具やどんな場所、また、宿泊に関する情報などの発信が必要です。そこで、まずは手始めに県の観光協会にアプローチしました。

新潟県の観光協会のホームページ「にいがた観光ナビ」は2000万件ものアクセスがあるサイトですが、これまで釣りに関する記事はありませんでした。そこで、釣りという部分をこのホームページに作ってもらいたいということで、「にいがた観光ナビ」にアユ釣りの記事を掲載してもらいました。新潟はまだ冬で雪も多い中ですが、アクセス数が思ったより伸びているという話を伺っております。



3. 情報の拠点をつくる

公益社団法人 新潟県観光協会

年間ページビュー：2,000万

“にいがた観光ナビ”を運営



<https://niigata-kankou.or.jp>

3. 情報の拠点をつくる

「にいがた観光ナビ」初の川釣り記事掲載へ



<https://niigata-kankou.or.jp/blog/1356>

3. 情報の拠点をつくる


**資料【川は、観光資源】を作成して
地域の観光協会へ訪問&セールス**

糸魚川観光協会、妙高市観光協会、妙高市観光振興課、刈羽村観光情報、十日町市観光協会、南魚沼市観光協会、魚沼観光協会、長岡観光コンベンション協会、三条市観光協会、加茂市観光協会、加茂市観光振興課、阿賀町観光協会、阿賀野市観光協会、新発田市観光協会、村上市観光協会、胎内市観光協会、新潟観光コンベンション協会など

▼

**【内水面】という言葉を知り始める方も多く
多くは川釣りの仕組みや活動に共感いただいた
川の存在感を高める企画立案へ**

観光協会や道の駅などポスター掲出を依頼▶



3. 情報の拠点をつくる

**観光を入口にする場合、必ずしも釣り人とは限らない
情報受信者に応じた器が必要**

**釣りに対してフリー層や
ライト層にリーチするもの**

新潟行ってみたい！を誘発するもの準備



ホームページの改裝

**釣りに対してミドル層や
ヘビー層にリーチするもの**

コアな情報を載せたものを用意して
地域の漁協や販売店を可視化



釣り場マップ | 連合会発行の遊漁のしおりでも紹介

●その中で、川釣りの情報の拡充と進化と書いてありますが、これは電子地図についてです。先ほどもお話しありましたけれども、トイレや駐車場の情報や、何が釣れるのかといったことも含めた河川の地図を漁連のホームページ等に掲載し、携帯でも見れるような形にしていきたいと進めております。

また、遊漁券購入者の7割が県内の方というのは、ちょっともったいないと私も思っております。せっかく新幹線や高速道路もあって遠くはないわけですから、スキー客ばかりでなく釣り人についても、なんとか関東の方を中心に新潟県に来て釣り券を求めてほしいということ。

それから、地域企業との連携です。皆様、「菊水（きくすい）」というお酒ご存じでしょうか？新発田市の国道7号線沿い、加治川という二級河川のすぐ脇にある菊水酒造様では、酒蔵のほか展示場やラボ、食堂、直売所等々を展開して、多くの方にお酒をアピールしておられます。その社長さんより、「加治川の水を私どもは扱ってるのだから、加治川のPRに一枚加わってもいいよ」という話をいただき、スポンサーになっ

●ただ、私達と観光協会様との対話の場であつた話と聞いているのですが、観光協会の方から「ナイスイメン」って何なの？と聞かれたそうです。「溪流」とか「清流」と言われればわかるのですが、「内水面」という言葉の反対に「外水面」という言葉もないしなあ・・・と、海ならば「海面」と言えば分かってもらえますが、「内水面」という言葉は一般の方にとっては分かりにくいようです。事業の名前も付いていますし。

そんなこんなで、まずは「ナイスイメン」の説明から入りまして、新潟県の川と川釣りというものを皆さんに知ってもらいたいということで、この一番左端にありますとおり、「釣りは自然のごちそうだ」をキャッチフレーズにして、アユやイワナにヤマメ、そしてサケも食べてもらいながら泊まってもらい、川を全身で感じてもらうようなことをPRしながら、釣り人も増やしていきたいと思っております。

今後の展望

川釣り情報の拡充と深化

- ・釣り記事に続き、溪流釣りの記事作成と情報発信を行いたい
- ・県観光協会を通じて県アウトドア協会に話を持ちかけ、連携を図る予定
- ・そのほか地域の観光協会への企画提案など、営業活動を実施している

北関東へのアプローチと共通券の拡販

- ・県内および北関東の釣具店への積極的な営業を行い、販路拡大につなげたい
- ・影響力のある方にアンバサダーとして就任してもらい、認知拡大を図りたい
- ・リゾート地を活用した川釣りの企画を検討する

地域企業と川の存在価値を高める

- ・単なる寄付ではなく、地域に理解を得られる関係を構築したい
- ・川の未来を見据え、共に歩んでいただけるスポンサーシップを検討する
- ・教育との連携も必要と考えている

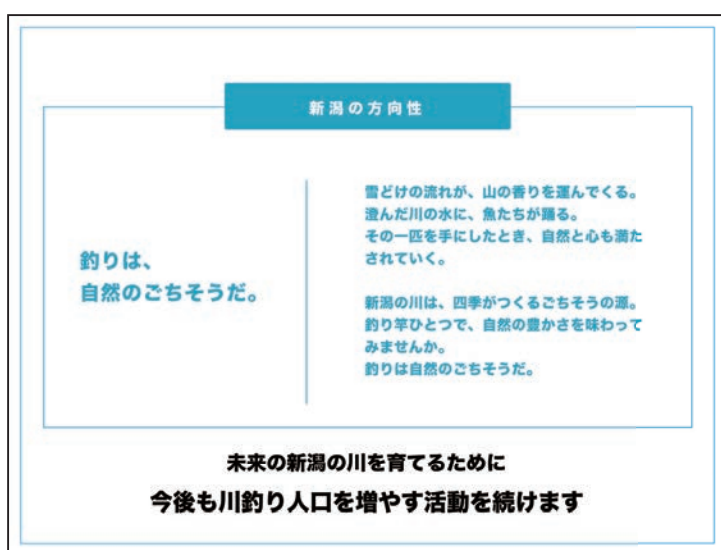
魚が棲める適切な放流について検討したい

- ・放流が主な増殖手法となっている
- ・天候や河川環境の変化が著しく、「思っているほど魚がない」との声もある
- ・河川に適した増殖方法を検討するため、まずは調査を行いたい

てもらいたいと考えております。具体的な内容は来年の話になりますが、まずは菊水酒造のラボで川や川の生き物・魚の紹介をしてほしい、といったオファーも固まりつつあります。とてもありがたい話であり、遊漁券に名前を入れさせてもらうだけでも助けになりますので、現在話を進めております。

次に、ちょっとここは難しいところなのですが、魚が住める適切な放流について検討したい。これは水産試験場の方も検討メンバーに入っておりますので、どのくらい放流したらいいかということ、皆様方のところも少し数が減ってるかと思うのですが、義務放流に関しては放せば放すほど良いわけでもなく、どの程度放流したらいいのか？ということ、この事業で少し見つめ直してくれないかという漁協さんから意見がございました。

ただ現状、本当に川が傷んでいますから、行政の力を借りなければ川を良くすることは難しく、何とか自分たちでも産卵場を作る程度はやっていきたいのですが、そういったことも来年検討していきたいと考えております。



●最後、まとめさせていただきます。

私どもがアピールする点は、「釣りというのは自然からいただいたごちそうです」ということで、観光客も含めた一般の方にもアピールをしていきたいと思っております。

河川や内水面の話ばかりしていますけれども、新潟の海は信濃川や阿賀野川という大河川の恵みでできていることや、大きな佐渡ヶ島にはカレイやヒラメ中心に多くの魚いますし、岩ガキもたくさん育っています。

そういったことも含めて、新潟の自然を感じて川釣りをしてもらえればと思います。

ということで、このような形で今年度のまとめとして来年度につなげていければと思っています。以上、ありがとうございました。

～質疑応答～

岩下（事務局）：

藤田さんありがとうございました。新潟県は1年目とは思えないほど盛りだくさんの内容で、特に観光との連携という部分は非常に参考になったのではないかと思います。それでは今の新潟県さんのご報告につきまして、ご質問ご意見等ございますでしょうか。

はい。湊谷さん、お願いいたします。

湊屋（米代川水系サクラマス協議会）：

秋田の湊谷です。ご報告ありがとうございました。

最後のまとめのところで「適切な放流について検討したい」というお話がありました。これ、非常に我々にとっても、頭の痛いというか、難しい問題だと思っているのです。

新潟県さんでは、その「適切」というのを、何を基準に、あるいはどのような手法で、その、いわゆる「川のキャパシティ」みたいなものを捉えていこうと考えていらっしゃるのか。もし現段階で、小委員会等が出ているお話があれば教えてください。

藤田（新潟県内水面漁連）：

湊谷さん、ありがとうございます。

正直に申し上げまして、まだ具体的に「これだ」という基準があるわけではありません。ただ、漁協さんからは「放しても釣れないのは、放しすぎなんじゃないか」という、ちょっと逆説的な意見も出ています。いわゆる餌の取り合いと言いますか。

ですので、来年度は水産試験場の方に、過去の放流量と実際の漁獲というか釣果の相関。それから川の石の状態ですね、さっき言った傷み具合。そういったものを、いくつかのモデル河川で少し詳しく見てもらえないか、ということは今、相談を始めたところです。

義務放流という数字がある中で、それをどのように現場の「釣れる・釣れない」に落とし込んでいくかというのは、非常に難しいチャレンジになると思っています。

湊屋：

すいません。先ほどサケが取れなくなると、ありましたが、これはもう秋田県も含めた日本海側も、太平洋側も多分そうだと思うのですね。その中で今秋田県はすでにサクラマスの漁業権を設定して遊漁券も好調に伸びております。そうしますと、今新潟県さんではサクラマスを釣らせる場合、どのような券でお売りになっているのでしょうか。

藤田：

サクラマスを釣らせる川は、大河川中心に4つか5つ漁協があったと思います。今、サクラマスに漁業権を設定してないところが要望を出しているのですが、試験的に釣らせてからとか、なかなか1年ですぐ行政もくれませんよね。どういう手順でやろうか？といった話が出た、ということだと思っています。

湊屋：

分からないことがあれば、秋田県に聞いてください。

藤田：

はい。よろしく願いいたします。

山形県内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 桂 和彦



●山形県内水面漁連の桂です。参事・兼・無償のコーディネーターを務めております。では早速始めさせていただきます。昨年度も報告していますので、基本的には昨年の続き、グレードアップ版とってください。

令和7年度みんなでやるぞ 内水面活性化事業報告

- (1) 負担の少ない賦課金・行使料の徴収システムの構築
R6：会費ペイの提案
R7：システムの運用拡大と新たなシステムの提案
- (2) ICT遊漁券システムの活用と機能追加による全漁協の情報整理・漁場マップの作製
R6：マップの作製、電子遊漁券のスマホ購入画面への漁協ごとにアンケート機能追加
R7：マップの積極的運用と①、②の新規取組み
①アユイング講習会（新規）
②共通遊漁承認証購入者へのアンケート機能追加
- (3) 県の魚「サクラマス」の漁場管理と遊漁振興
R6：スモルト魚標識・放流、釣獲情報収集・パッシ進呈
R7：新たに秋幼魚標識・放流、プレミアムパッシ交換
- (4) 2回の検討会を実施（R7.7.23, R8.2.26）

●内水面の活性化事業ということで、山形県では1番目に「負担の少ない賦課金更新料の徴収システム」。次に、皆様と同じように「ICT遊漁システムを活用したものの機能追加と情報の整理、漁場マップの作成」というもの。

それから、「県の魚サクラマスの漁場管理と遊漁振興」に関して、先ほど新潟県の方もサクラマスについてのお話がありましたが、山形の取り組みを詳しくお話しさせていただきます。4番目は「2回の検討会の開催」として、7月の計画検討会と先日終わったばかり

りですが、2月に報告会という形で検討会を開催しました。

●まず、負担の少ない賦課金更新料の徴収システムです。

令和6年度は構築を行いました。今回は運用拡大と新たな提案ということで進めさせていただきました。この賦課金更新料の徴収というのは、組合の支部長や総代が集めるのですが、皆さん歳を取ってきて集金が大変です。そしてなおかつ、伺っても留守でいないとか、何回も行かなきゃならないこともあります。また、小さな組合には、もう総代も支部長もいないところもあり、では、どのように事務局が楽できるか？ということで提案いただいたのが、この「会費ペイ」というサービスです。

負担の少ない賦課金・行使料の徴収システムの運用拡大

【組合員賦課金等徴収の課題】

- ・組合運営上で賦課金・行使料の徴収の負担は大きいとの声
- ・徴収者は総代や支部長等の高齢者であり、組合員数の多い漁協ほど大きな負担
- ・留守の場合など何度も伺う必要があること、組合員の減少による総代の未設置の可能性

【課題解決に向けたR6の取組み】

システム名	会費ペイ
導入/月額費用	なし/なし
決算手数料	3.5%+100円/1決済
その他費用	口座引き落とし別途500円~1000円(初年度)
決済方法	クレカ、口座振替(コンビニ)
登録作業	管理者からメールでURLを送付 →組合員が自分で必要情報入力
コンビニ決済	引き落としができない場合の手段として可能
システム連携	LINE連携

【R6の取組み結果からの課題とR7で実施した対応策】

◇R6の取組みにおける課題とR7での対応

- ・漁協事務局や組合員のICT活用能力の差が大きい
⇒ **つりチケ職員が漁協に出向き対面でサポート**
- ・漁協職員の操作習熟・情報共有の不足
⇒ **専用マニュアル整備(67ページに及び)**

◇R7の成果と新たな取組み

- ・4漁協が試行的取組みを実施予定であったが、2漁協(1漁協は准組合員5名が参加、1漁協はR8から1支部で参加予定)のみが参加という厳しい結果
⇒ **もっと簡単なシステムの提案が必要**
- ・スマホ不慣れ、クレカなしで現金のみの高齢者などデジタル化の強硬は漁協を支えてきた組合員の置き去りにするリスク
⇒ **ヤマト運輸「払込票発行サービス」を提案**

この「会費ペイ」というのは、基本の決済方法がクレジットカードと口座振替で、操作はスマートフォンを使います。まずこれでやってみようと昨年6年度に実施したところ、漁協の事務局の方や組合員のICT活用能力の差が非常に大きいことがわかりました。若い事務局員ならばそれなりに対応できるのですが、年配の事務局員では対応はほとんどできません。そこで、つりチケの方が漁協へ出向いて、サポートをしていただきました。

さらに、漁協職員が自分でもできるように、操作の習熟と情報共有のために専用マニュアルも整備していただきました。これが非常に丁寧なんですけども、67ページもあって、なかなか職員が読みきれないという難点もあります。

令和7年度の成果と新たな取り組みとして、実は4つの漁協がこの会費ペイを取り組む予定だったのですが、2漁協が参加します。一つの漁協は準組合員の5名のみが、もう一つの漁協は令和8年から組合長さんが所属している1つの支部が参加することで決まっています。

このような厳しい結果が出たので、やはりスマホを操作して行う作業は、どこの県の皆様も一緒だと思うんですね、これをやろうとすると、おそらくどこの県でも、やはり難しい。

そこで、新たな提案はないですかとお願いをいたしました。スマホに慣れてなくて、クレカなしで現金のみを扱う高齢者さんでもできるような策はないかということで、ヤマト運輸の「払込票発行サービス」というものを、つりチケさんから提案していただきました。

会費ペイとヤマト運輸の振込票発行サービスを比較しました。

会費ペイとヤマト運輸「払込票発行サービス」の比較

項目	会費ペイ	ヤマト運輸	郵便局
支払場所	PC、スマホ	コンビニ、郵便局	郵便局
利便性	◎自宅でも利用可能	○コンビニならいつでも	△曜日や時間が限定
使いやすさ	△高齢者にハードルが高い	◎IT不要で高齢者も安心	◎IT不要で高齢者も安心
管理しやすさ	◎リアルタイムで入金確認可能	◎リアルタイムで入金確認可能	△入金確認に時間がかかり照合が入力

※郵便局振込を活用している漁協もあるので参考として示す

↓

R8からヤマト便を3漁協が実施希望、1漁協が検討中

現在、1つの漁協さんが郵便局の振込も活用しているということで、郵便局の場合も横に並べています。

会費ペイは自宅のできるの非常に楽なのですが、支払いはPCやスマホの操作が必要なため、高齢者にはハードルが高すぎる。一方、郵便局は現金扱いができるけれども、土日が休みです。便利でIT不要なので高齢者も安心ですが、ちょっと扱いづらい。ということで、じゃあこのヤマト運輸のサービスはどうか？、コンビニでも郵便局でも支払いができます。コンビニなら開いていたらいつでもできますので、これを各漁協さんに提案してみました。そうすると、令和8年から3漁協がヤマト便のサービスの実施を希望しています。一つの漁協さんは、もう1回説明を伺った上で検討するというので、4つの漁協がこのサービスをの利用を考えています。実は今日、つりチケさんの方が漁協に出張説明に伺い、明日にもう1つの漁協さんにも説明に伺っていただくことで動いております。

**ICT遊漁券システムの活用と機能追加による
全漁協の情報整理・漁場マップの積極的運用**

《実施するに至った背景》

- ・漁協・遊漁の振興を進める上で、**地域との連携が必要**であることから、**成功事例等の情報発信**は不可欠
- ・漁協の取組み（放流・釣り体験、C&R、アユルアー釣等）の**情報の整理・発信・共有が不十分**
- ・漁協間の情報共有・連携・地域協働で新たな遊漁者増大につなげ、**情報の発信に加え、情報の収集が必要**

↓

ICT遊漁券システムの活用と機能追加により情報の集約・発信に加え、遊漁者市町村、観光業界と連携を深め、漁業と地域振興を図る体制整備を構築

【R6の取組み】

- ・漁場マップの作製
- ・各漁協の電子遊漁券購入画面へのアンケート機能追加
- ・情報共有に向け、全漁協組合長、事務局のスマホにラインワークス機能追加
- ・漁協関係者へのアユルアー釣り講演会

【R7の取組み】

- ・漁場マップへの新たな情報追加と情報追加方法の事務局研修会
- ・共通遊漁承認証購入者へのICTを活用したアンケート機能追加
- ・漁協関係者及び一般遊漁者へのアユルアー釣り講演会

●次に、ICT遊漁システムの実践的運用についてです。

昨年は漁場マップの作成でしたが、今回は積極的運用として少し内容をグレードアップさせて取り組みました。この事業を実施するに至った背景として、やはり地域との連携が今までは全然なかったということ。成功事例等の情報発信は不可欠なだけでもやってこなかったこと。

それから、ここに放流などいろいろ書いてますが、漁協の取り組みに関わる情報の整理、発信、共有が不十分で全然されていませ

んでした。さらに、漁協間の情報共有、連携、地域共同で新たな遊漁者増大に繋げるための情報「発信」も必要ですが、情報の「収集」も必要だということで取り組みました。

現在我々が出来ていることとやり始めたことは、情報の集約、発信、遊漁者までは取り組んでいます。この後の、市町村、観光協会との連携っていうのがまだできていません。できれば来年はこの部分を取り組んでいきたいと考えております。

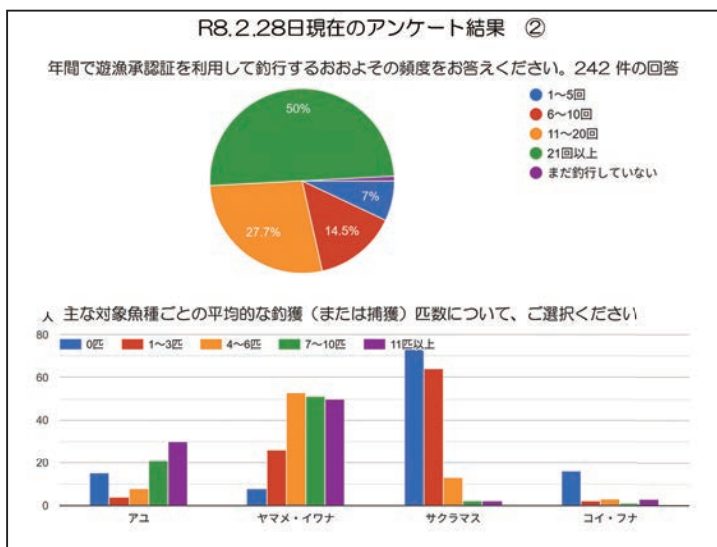
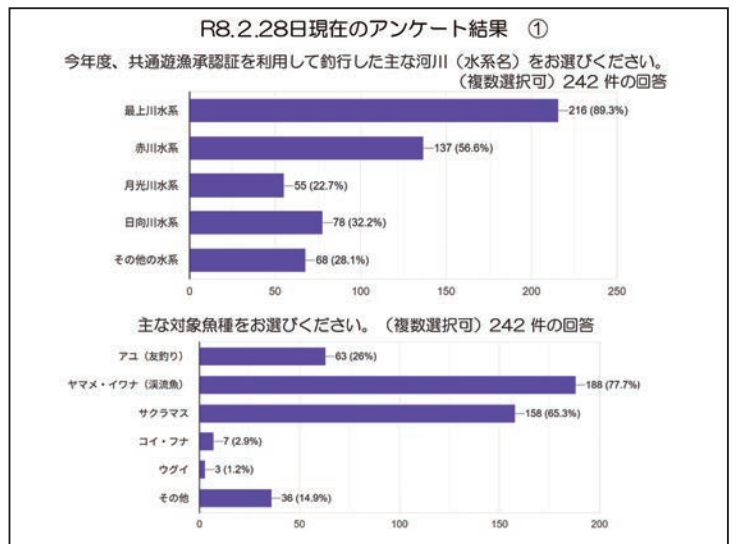
R6年度の取組みで、まずは漁場マップを作りました。他の団体の皆さんと同じですね。それから、各漁協の電子遊漁券の購入画面の一番最後にアンケート機能追加しました。このアンケートのベースは漁連で作って、漁協さんごとに取り捨選択することで漁協独自のアンケートになっています。ただ、釣りに来た人はその場でスマホで遊漁券を買ったとしても、アンケートまで答える余裕が無いようで、そのまま釣りに行っちゃって、なかなか答えてくれません。ここをなんとかしたいと考えています。

昨年度、漁協関係者を対象にダイワの前山さんを講師に招いてアユルアーの講習会を行った際、実は前山さんは私の研究室の後輩だったことが判明し、来年も来てよ！とお願いしたところ、ご快諾いただき、令和7年度もアユルアー講習会を実施いたしました。漁場マップについては、令和6年度までにフィッシュパスさんに各漁協の漁場図とアユルアーができる漁場の情報を入れていただいたところで、今年度は漁協の所在地と、各漁協の遊漁証を発行している場所の情報を全部入れていただきました。

また、この事業が終了しても事務局の我々できちんと情報が追加できるように、検討会の翌日に2月26日に漁連の事務所で情報追加の仕方を研修をしていただきました。これで、もう我々自身が漁場マップにどんどん情報を追加していけますよと、今のところは思っています。ポロッと忘れるかもしれないんですけども、その時はまた聞きながら進めるということで。

●これが2月28日現在のアンケート結果です。複数選択可ということで242件。共通遊漁証の手続きを始めてわずか1週間か2週間の間に、240件くらいの回答いただきましたところ、最上川水系が最も多かった結果です。最上川水系には寒河江川、小国川、最上・鮭川といった大きな漁協さんがあり、最上川水系にこられる方が多い。それから赤川水系。ここはサクラマスがあるので、赤川水系に来られる方も非常に多いです。

主な対象魚種ではやはり溪流魚が非常に多く、次にサクラマス、三番手はアユでした。

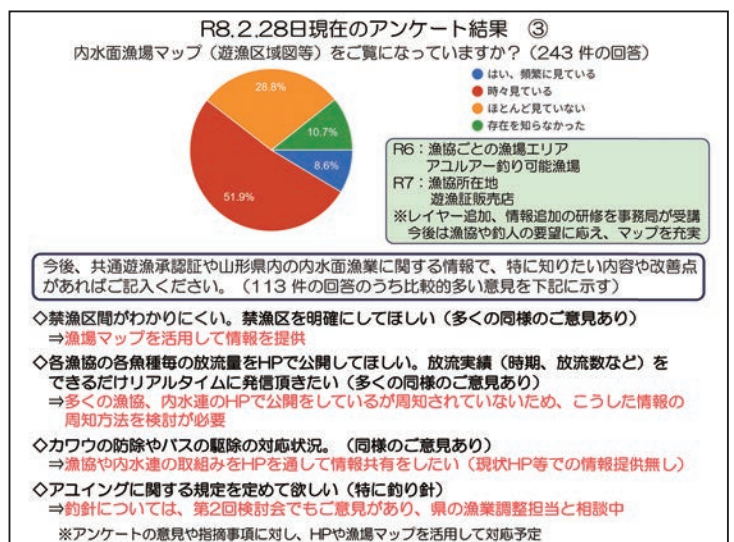


●どれぐらい使いますか？については、50%の方がほぼ21回以上。30回か40回かは分かりませんが、元を取るまで釣りに行くという感じですね。それから興味深いのが「まだ行ってません」という回答。この時点で2月28日です。3月31日で有効期限が切れるのですが、まだ釣りに行っていない。「俺はこれはプライドで買うんだ」と、毎年購入しても行かない方が結構いるのですね。それはそれで我々にとっては非常にありがたいのですが・・・。

対象魚種ごとの平均的な釣果は、アユの場合が一番右の11匹。アユの場合は数を釣るのが楽しみなので数釣りになります。こちらはサクラマスです。一番左、最も多いのが0匹です。20回来ても0匹の人もいるのですね。やはりサクラマスって釣れないんだろうと。次に多いのが1匹から3匹。それ以上は非常に少ないですが、11匹以上という方もおりました。

●最後の質問で、漁連の内水面漁場マップをちゃんと見てくれていますか？という設問です。「時々見ている」と「頻繁に見ている」を合わせると半分以上の方が見てくれています。28%は「ほとんど見ていません」という結果でした。

令和6年度は漁場のエリアと、アユルアー可能漁場の情報だけでしたが、今年度は漁協の所在地と遊漁証の販売店の場所も入れました。今後はレイヤーの追加と情報追加を我々自身もできるようにして、今後は漁協や釣り人の要望に答えながらマップを充実させていきたいと考えています。



アンケート最後の自由記載欄については、みんな書くのは面倒くさいかな？と思っていたのですが、意外にも240件中半数の方々を書いてくれました。やはりディープな釣り人が多いのだと思います。

記載内容については、「禁漁区間が分かりにくい」「禁漁区を明確にしてほしい」と、禁漁区について書かれてる方が結構多いです。実際、県が発行している「釣りのマナーとルールブック」という冊子には書いてあるんですが、意外とそれを見ていないようですね。トイレの位置や駐車場の位置は、なかなかマップに落としづらいつと思います。今後、禁漁区間については入れていきたいと思っています。

それから、各漁協の魚種ごとの放流量・時期・場所についてもホームページでリアルタイムで公開してほしいという要望もありました。これらの情報は、基本的に漁協や漁連のホームページで公開をしていますが、意外とホームページを見ていないのだろうなど。情報はきちんと公開してますよ！という周知を、何らかの方法で行っていかねばならないと思いました。

また、カワウやバス駆除の対応状況についても結構意見がありました。これについては我々も漁協も一生懸命取り組んでおりますが、やはりそれらの情報発信をしていなかったため、釣り人の方々にこういった活動もやっていますよという理解を得られるように、ホームページなどに提供していきたいと思っています。

さらに、アユルアーに関する規定を定めてほしいという意見がありました。山形県内に17漁協ある中でアユルアーができる場所はまだ4つの漁協しかありません。具体的にはアユルアーでの釣り針に関する意見で、要するに何の規定もなく、アユルアーさえついていれば何してもよいと誤解を招くということで、現在、釣り針の規定について県の漁業調整の方をお願いをしています。各漁協さんの遊漁規則にも定めて、質問が来てもきちっと答えられるように、県として統一的なものを出していただきたいと思っています。

●次に皆様のところでもやっておられるアユの遊漁者人口増大に向けたアユルアー講習会（AYUING 体験会）です。場所は鮭川の最上漁協さんをお願いをしました。講師にはダイワの前山さんに来ていただきました。開催の1週間前から、「8月30日にこの区域でアユルアーの講習会を行うので、友釣りの皆さんにはご迷惑をおかけしますがご協力ください」という立て看板を立てていただきました。

当日の午前中は漁協の組合員を対象に行いました。これはなぜかという、さっき言ったとおり山形県では4つの漁協さんしかアユルアーの漁場を開いておらず、さらに漁場を増やしたい。今後、漁協経営を助けていくためにはアユルアーというのが若い人を呼び込む一つの知恵であり方策であると思っています。保守的な考え方が非常に強いなかで、まずは理解を深めるために、午前中は漁協の組合員の対象に講習会を行いました。午後からは一般遊漁者を対象に行いました。その時に、飛び入り参加のアユイングガールということで、うちの事務局の2人参加しています。

持ち物	料金
ロッド・リール	13:00 - 受付開始
13:15 - 開会挨拶	
13:30 - 講習・体験開始	
14:00 - 体験終了	
16:00 - 閉会	

●実際に釣りに入る前に、前山さんに座学をしていただきました。この時に前山さんから「4つの極意」を教授いただきました。

この座学は、すべてビデオを撮っており、これからアユルアー釣りを始めようという漁協さんが、よく理解できるように貸し出す方向で考えています。当日は山形新聞も取材に来られました。真ん中でニコニコしているのが赤川漁協の組合長さん。1匹釣れてニコニコしてます。講習が午前中で終わっちゃったもんだから、すぐに自分の組合のアユルアーに漁場に戻って、また1匹釣ったよ！って喜びのLINEが届きました。この時に使ったルアーは一つずつ皆様に提供させていただきました。



★漁協関係者の講習会

①組合長：ボクは友釣りはへたくそなので、いつもオトリアユが弱ってかわいそうに思っていた。
アユルアーならいつまでも泳いでくれるので安心

②組合長：当組合の河川上流側は木がうっそうとしていて友釣りには向かないところがある。アユイングなら友釣りに向かない場所に遊漁者を、特に若い遊漁者を呼び込めると感じた。
アユイング漁場の設置を考えたい

③組合長：友釣りはするが、ルアー釣りは初めて。非常に楽しい。道具が安く若い人が取組み易いと思う。当漁協には3つの単独小河川があるので、**ルアー釣り漁場の設置を考えたい**

※そのほか、参加した漁協関係者からは・・・

- ・狭い区間でこれだけの人数が楽しめるのが良い
- ・一部区間だけルアー釣り漁場を設置したが、友釣り専用区以外は全域をアユイングに開放したい
- ・オトリ販売所が無くなってきているので、その心配がなくなる
- ・想像していたアユルアー釣りと違って、友釣りとの競合は避けられると感じた

★一般参加者の講習会

①一般参加者：アユイングを始め7回目。経験者から話を聞いたり、本で勉強するなど自学でしたが、今日、講師から直接指導を受け、疑問に思っていたことが分かったためになった

②一般参加者：持参したロッドを講師が見た瞬間に「ロッドはお貸しします」と言われた。先端部が非常に柔らかいのでびっくりしたが、実際に竿を出すとその理由が分かった。講師が言ったロッドで釣果が変わるとの話、なるほどでした

③一般参加者：まだまだ山形県にはアユのルアー釣りができる場所が少ないと感じている。
多くの漁場で開放してほしい

※そのほか、参加した一般参加者からは・・・

- ・友釣りに比べ経費が非常に安い。道具を揃えるのも簡単に私達のような若者でも取り組みやすい
- ・アユのルアー釣りに初めて挑戦。講師の言った「4つの極意」を頭に入れて再挑戦したい

●参加した皆様から色々なご意見をいただきました。赤川漁協の組合長からは、友釣りが下手くそで、いつもオトリが途中で弱ってかわいそうに思っていたけれども、このルアーならいつでも泳いでくれるのでとっても安心だ、というご意見。

それからもう一人の組合長は、うちの川では上流側にアユはいるんだけど、木が鬱蒼として友釣りには向かない場所がある。こういう所にぜひ若い遊漁者を呼び込みたいので、アユルアー漁場の設置を考えていきたいというご意見でした。

もう一人の方は、友釣りはするけれどもルアーは初めてやったが、非常に楽しい。道具も安くて若い人も取り組みやすいと思うので、あつみ温泉界限でこれをやってみたいと考えておられます。

そのほか、友釣り専用区以外は、全域をアユイングの開放したいという発想の漁協さんもおられました。全然普通のルアー釣りとは違って、自分でやってみたら友釣りとの競合は避けられると感じた組合長さんもおられました。

一般参加者の方には、すでに7回ぐらいアユイングやっておりますが、講師の前山さんから直接指導を受けて、疑問に思っていたことが分かって非常にためになった、というご意見もいただきました。

講習に先立ち、参加者にロッド持ってる方は持参してくださいとお願いしましたところ、講師の方が一人一人のロッドを見てまわり、見た瞬間に「はい、ロッドはお貸しします」と。このロッドはダメですよ、ということなんですね。竿を借りた参加者からは、専用竿は先端部が非常に柔らかいのでびっくりした、実際に竿を出すとその理由が分かったと言っておりました。講師の「ロッドで釣果が変わる」との話も納得したそうです。

それから一般参加者の方から、まだ山形県ではアユルアーができる場所が非常に少ないので、どんどん増やしてほしいというご意見や、経費が安く、道具を揃えるのが簡単だから我々若者でも取り組みやすいという話もありました。

《県の魚「サクラマス」の漁場管理と遊漁振興》

《実施するに至った背景》

- ・サクラマスは山形県の魚で、赤川をはじめ庄内一円の河川での釣りは、春の風物詩として有名
- ・内水連では資源造成と遊漁人口増大のため、平成18年から3漁協に回帰率の高いスマルト幼魚の放流を委託
- ・効果検証のため令和2年から鱗切標識を行い、回帰状況等の調査を開始
- ・調査手法は内水連HPに標識部位の記載と釣獲情報提供のお願い程度のため報告数は少なく効果は実質未検証

《目的》

スマルト幼魚及び秋幼魚放流の資源造成効果の検証のため、ICTの活用など遊漁者の協力を積極的に得られる手法の確立と、本県がサクラマス釣のメッカであるとの遊漁者への再認識と遊漁者人口の増大

《R6の取組み》

- ・スマルト幼魚への標識・4河川への放流
- ・情報収集のためのサクラマスバッジ進呈

《R7の取組み》

- ・新たに秋幼魚への標識・1河川への放流を追加
- ・この取組みを持続可能にするための方策の検討

●最後は県の魚のサクラマスの漁場管理と遊漁振興についてです。サクラマスは山形県の県魚です。赤川を中心に庄内一円では春の風物詩として、サクラマスのルアー釣りが有名です。その赤川では、2日前の3月1日に解禁したばかりです。うちの漁連では、サクラマスの資源造成をするために、平成18年からは稚魚放流ではなく、3つの漁協さんに回帰率の高いスマルトの放流を委託しています。実際のところ、1匹あたり稚魚の5～6倍の値段がするので結構お金がかかります。でも、回帰率が非常に高いと考えられていま

したので放流は行ってきたのですが、その効果を全然検証してなかったんですね。

令和6年の取り組みでは、今までスマルト幼魚に標識をしていなかったのを、「みんな標識付けに来てね！」と4河川の漁協さんに協力を願いまして、漁協できちっと標識を付けました。情報収集のためには、令和4年に県が「サクラマスバッジ」というものを作っていました。このバッジをうまく活用できないか考えて、バッジと交換で標識採捕の情報を得るということを実施しました。

令和7年の取り組みです。サクラマスのスマルトというのは、通常1年半飼育した後、3月に河川に放流します。実際は秋から3月まではほとんど餌与えないので、ならば秋幼魚の段階、20から30グラムの秋幼魚を放流してみようと考えました。従来のスマルト放流と同じような効果が出るんだったら、何も3月まで待たなくても秋に放流すれば、種苗を作ってるところも楽だし、漁協さんも3月のあの雪解けの危ない時に放流しなくて済むということで、これを7年度の新しい取り組みに追加しました。またこの取り組みを持続可能にするための方策も検討しました。

●令和6年度からの事業で、スマルト幼魚のヒレ切りをして放流し、採捕の情報をくれた方にはバッジをあげますよと。それから、海の定置網の方々もサクラマス獲っているので、定置からも情報を得ましよう。チラシを置いて、持ち込みした方にはオリジナルバッジを進呈します。ただし使い回しされないように、サクラマスの右胸びれは切らせてくださいということで、持ち込み先をずらーっと掲示して、取り組みを開始しました。

令和6年度事業の概要

①スマルト幼魚の資源増大効果の検証

- ・4漁協組合員とスマルト幼魚に標識
- ・日向川、鮭川、五十川、赤川に放流

②釣果報告数増大に向けたバッジ交換

- ・釣獲情報、全長測定、標識の有無を確認し、遊漁者がバッジを所望した場合、右胸鱗カットの魚体を撮影
- ・バッジを進呈し、名簿に住所・氏名を記入（個人情報：取扱注意）
- ・情報は内水連にメールで送付
- ・情報の提供、魚体の写真撮影、鱗切を拒否した場合、バッジは進呈しない（釣果の重複報告防止のため）
- ・記載拒否の場合でも、分かる範囲で情報を取得し、管轄漁協に送信

③海面漁業者の協体制構築

- ・定置網の総会で事業の目的、必要なデータ等を説明し協力を依頼
- ・水研、振興協会は市場でデータ回収

④R6.3～R7.6の取組み結果

- ・漁協、釣具店、定置組合からデータの回収、取り纏め

求ム！サクラマス

持ち込み者にはオリジナルバッジ進呈

遊漁条件

交換条件にて

1. 報告書の記入
2. 店舗スタッフが右胸鱗の一部をカット
3. 魚体の写真撮影

【山形県の河川でサクラマスを釣った遊漁者のみならずへ】
山形県内各河川で釣ったサクラマスは資源造成に使われます。バッジ交換を通じて魚種を明らかにし、おれも釣ったサクラマスバッジを進呈します。詳細は別紙または山形県内各漁協のホームページをご覧ください。

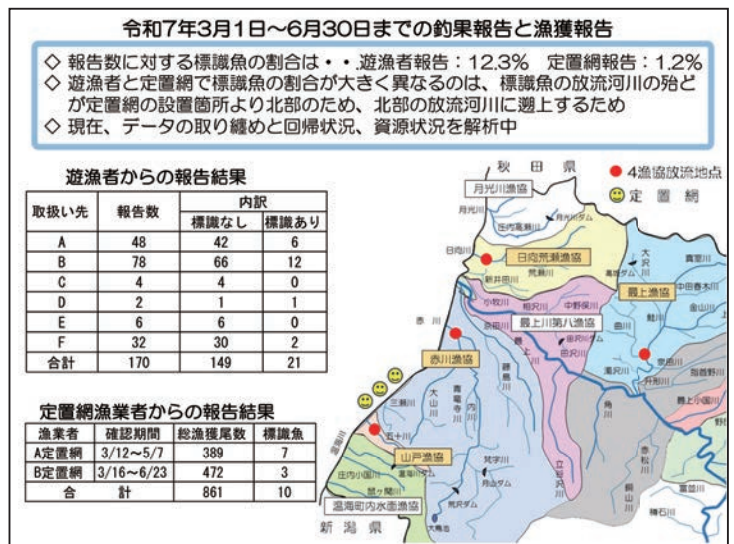
求ム！サクラマス

持ち込み先はコチラ

河川名称	住所	問い合わせ先
赤川	山形県山形市	山形県漁業振興センター
鮭川	山形県山形市	山形県漁業振興センター
五十川	山形県山形市	山形県漁業振興センター
日向川	山形県山形市	山形県漁業振興センター

山形県のサクラマス釣獲情報、お持ちしています！

●令和7年の3月1日から6月30日まで。遊漁者からのサクラマス（サクラマス）の報告数は全部で170尾でした。そのうち、標識なしが149尾で、21は脂鱭が切られてたということです。定置網漁業者からの報告については全部で861尾獲って、標識魚が10尾ということで。サクラマスが母川回帰を考えると考えれば、スモルトを放流している河川に帰ってくるので、河川で釣られた方が標識魚が多いのは理解できるものと考えているところです。



●新しい取り組みである秋幼魚の放流の時に、委員の佐藤さんややるぞ事業事務局の方々に来ていただいて、標識付けを手伝ってもらいました。

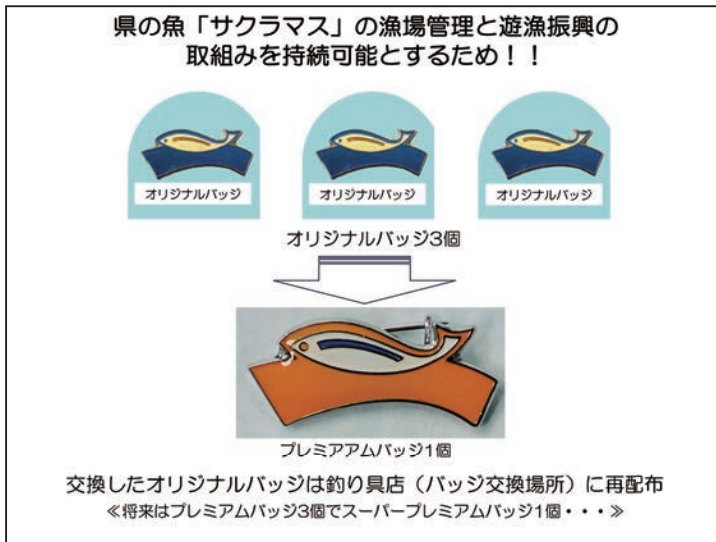
山形県の種苗生産施設は鳥海山の中程にあって、何日か前にクマが出たばかりで悩んだんですけど、大丈夫だよということで強行しました。

また、1月の下旬にもスモルト幼魚のヒレ切り、標識作業を河川漁協の皆さんに集まっていただいて、2日にかけて2万8000匹に標識をいたしました。

●2日目の3月1日には赤川と最上川の2河川でサクラマスが解禁となりました。

最上川は融雪増水で人が入れなかったの、ほとんどの人が赤川に集まってこられました。一番報告数が多い場所の3段の堰堤の下のポイントにサクラマスが止まるので、その河川管理道路にもずらっと車が並んでいるのと同じく、川には釣り人も等間隔に並んでおりました。釣果は全域で正午までに4匹だったそうで、去年と比べると少ないかな、という状況でした。





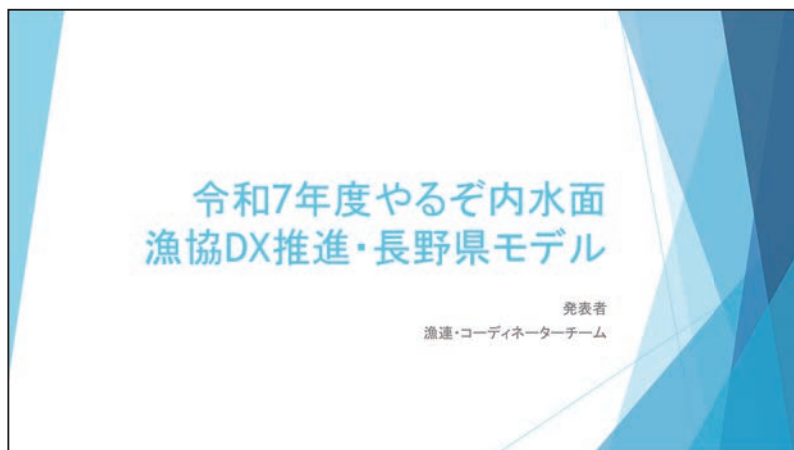
●この事業を持続可能とするために、現在は1匹釣れたらこのバッジ一つと交換しています。

これは、色を変えたプレミアムバッジです。通常のバッジ3つ（サクラマス3匹分）持ってきてくれたらプレミアムバッジ1個と交換します。交換して回収したバッジは、また釣具店や漁協さんに再配布をして使っていただく要領で、上手く循環させる予定です。それでも足りなくなってきたら将来的にはスーパープレミアムバッジということでもた色を変えて一個作ろうかと目論んでおります。

これで私のお話は終わりですが、私の頭の中には、この事業は来年が3年目で終わってしましますが、今後4年、5年も使いたいなど。非常に使い勝手が良くてですね。私は「みんなでやるぞ」じゃなくて、いつも思ってるのは「何でもできるぞ、内水面」と思ってるんです。いろんなことができ、とてもアイデアを考えるのも楽しいし、今後もアドバイスもいただきながら、この事業を進めていきたいと思っている次第です。以上です。

長野県漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 藤池 俊太



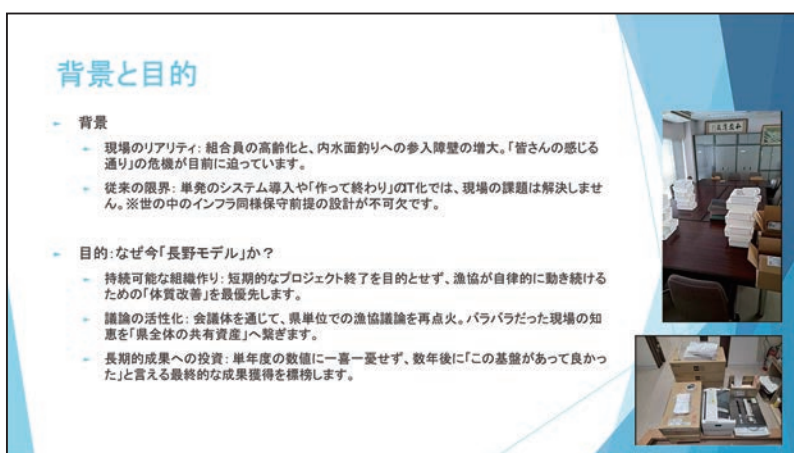
長野県漁業協同組合連合会のコーディネーターの藤池です。令和7年度の長野県の発表をいたします。



●これからお話しする内容は、背景と目的を説明した後に、このような体制でやりました。次に、河川工事の見える化プロジェクト、デジタル配信、LINEの導入。そして、組合員の意識調査とDX等を導入した内容。また、定量的効果としてどのような効果が得られたか、最後にまとめの括りといった構成になっております。

●まず背景と目的です。上は皆さんご承知の通り、高齢化となかなか釣りをやってくれる人もいないため収益がどんどん減っています。このままではダメなので、何かIT化を通じてしっかりと持続的なものを作っていけたらと考えております。

なぜ「長野モデル」かということで、長野県のことを書いています。長野では、このプロジェクトを単年度で終了すること



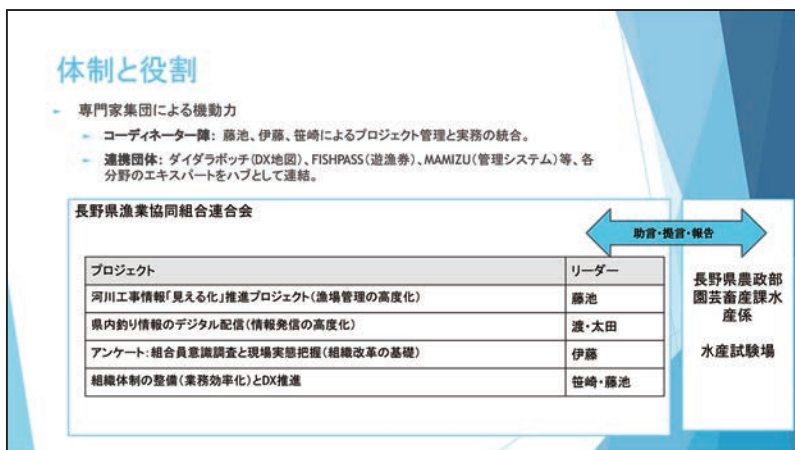
とは目的にしておらず、今後持続的に続けるための体質改善を最優先にして動いております。

もう一つは、漁協さん全体が持っている議論を再点火させて、例えば、共通遊漁券を発行するのはどうしたらいいんだろう？、現場の賦課金この金額で本当にいいのかな？といった話をしながら、実際にその議論を、各プロジェクトの目的はそれぞれ設定しておりますが、そういったことに縛られない自由な発言を

していった、その中で何か考えようといったことを、手探りしながら進めているような状況です。最終的には数年後、この基盤があって良かった！となるようなことをやりたいと思っています。

●体制と役割です。コーディネーターは私藤池と、組合長の伊藤と笹崎です。各プロジェクトの担当を割り振って、その担当がリーダーとして進めるようにしました。

それぞれその得意分野がありますので、藤池であれば例えばITやDX関係、フィッシュパスさんだったら遊漁券の解析、MAMIZUさんは管理システムが得意です。そうした様々なエキスパートが、自分たちの得意で入れそうなところを確認して、それぞれのプロジェクトを進めるようにしました。




主要プロジェクト① 河川工事「見える化」

内容: 国・県・市町村の工事情報をGISで一元化する「長野県方式」の構築。
成果: 監視業務のデータ補完により、環境トラブルの防止と「適正な協力金交渉」を可能に。
付加価値: 漁協の公共的役割を地域社会へ可視化

- スケジュール(目安)
 - 短期(半年~1年):協議体(河川工事見える化推進委員会(仮称))の立ち上げ、試行設計
長野県保持の河川工事情報(建設[建設事務所統合]+林業+農政)の集約
→ 国交省情報の集約 → 市区町村の集約を目的にする
 - 中期(1~2年):システム試行運用開始上記をEXCELでまとめて
3か月~半年までの保持情報をまとめるための仕組み作り
 - 長期(3~5年):制度化

ツール検討: GoogleMyMAP, QGIS, immich, tile-map生成

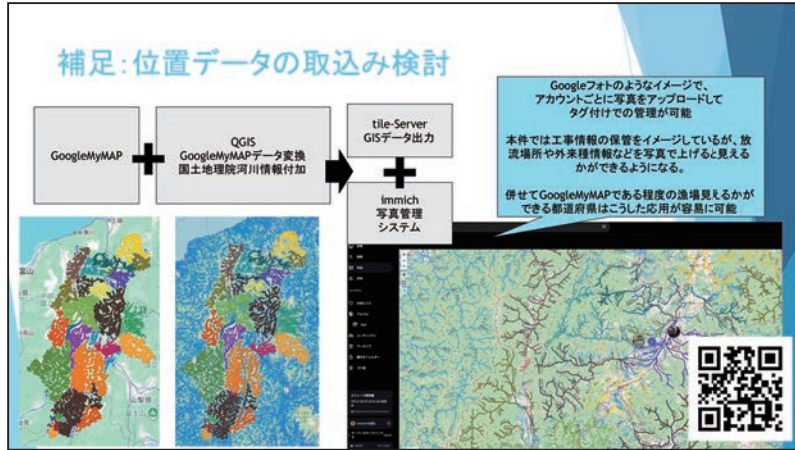


● 1つ目のプロジェクト。「河川工事の見える化プロジェクト」についてご説明します。

長野県内では砂防工事や災害復旧の工事があちこちで行われております。行政のホームページなどを見れば、どこで工事行っているのか載っているのですが、なかなか釣り人の方々はそこまで調べることもないので、実際に川に行って、あ！ここ工事やってて濁ってる！といったことが多々あります。

そこで今回、県の建設部さんの工事のオープンデータと、過去開発をしたデジタルマップを連携させて、今現在、どこで工事を行っているのかをマップ上に表示する試みを行いました。これにより釣り人は、あ！今日ここは工事やってるから別の支流に行こう！といった判断が事前にできるようになります。

これ実は全国でも非常に珍しい、全国

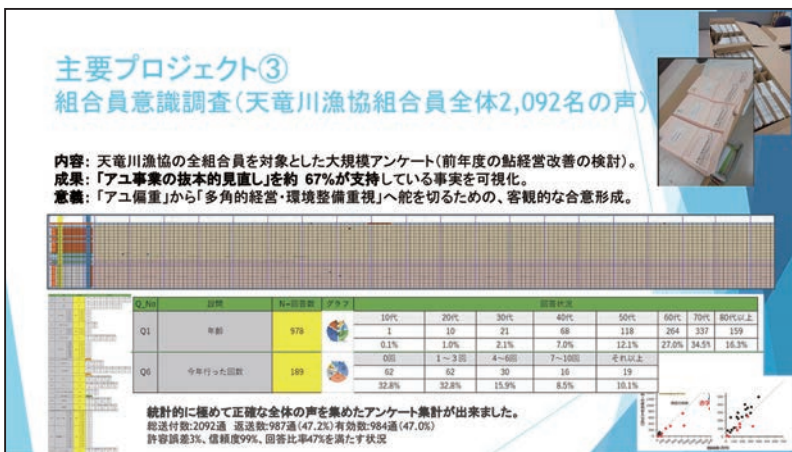
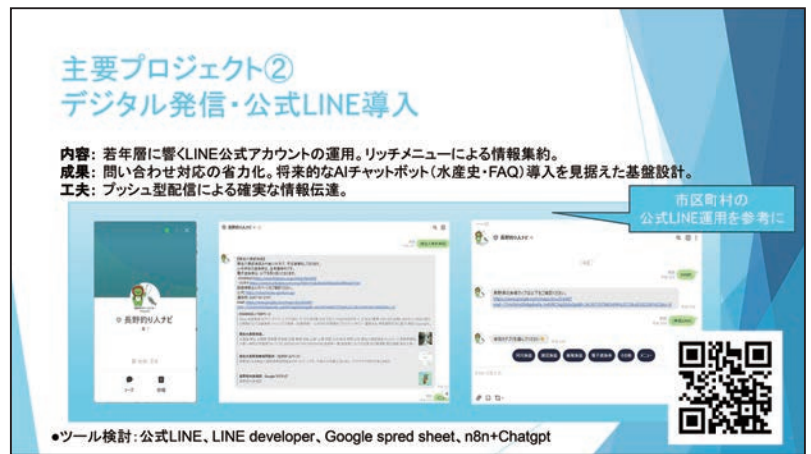


初の試みでして、建設会社さんの方からも、釣り人が入ってこなくなって安全に作業ができるようになることや、放流された魚を傷つけずに済むなど肯定的なご意見もいただいております。

●次にデジタル配信です。

皆さんと話す中で、何か SNS で情報配信をしようという話の流れで問題になったのが「SNS やると疲れる」「情報配信を1個1個別々で出していくの大変」といった意見がありました。ならばこちらから一方的に出したらいいんじゃないか？って話をした際に出てきたのが LINE という考え方です。

皆さん、市区町村が LINE を持ってたりするのご存知ですか？。県で持ってる LINE や何々市で持ってる LINE。そういった LINE を同じように県漁連が持ってしまえば、例えば「くまちゃんアイコン」で何々漁協を調べたら、その漁協のマップ情報や、遊漁券が電子でも販売しているなどの情報が一覧化される、といったものを作りました。これはまだ活用はしてないんですけども、今後、SNS での情報配信を県内で継続的にコントロールしていく労力確保が難そうなので、こうした一方的な配信による運用方法もいいのではないかと考えています。



●次に組合員意識調査としてアンケートを実施しました。

長野県の天竜川漁業協同組合という全国的にもトップクラスの組合員数を誇る漁協さんで、全組合員 2092 名に紙のアンケートを送付しました。はたして、どのくらい回答を回収できるのか？。なんとこのアンケートの設問は 20 問！。相当な分量のものを送ってしまいました。その結果どうなったかと言いますと、なんと

50% 近くの回答が来ました！。組合員の皆さんは非常に関心が強く、漁協の運営に関しても興味があることがよく分かりました。本当に熱いメッセージやありがたいお言葉をいただきました。組合長さんが凹んでしまうようなショックな意見もいただきました。

このアンケートの具体的な内容ですが、長野県はアユの天然遡上がないため、アユの事業はやるだけ赤字になってしまいます。その「赤字の根本的な見直しが必要だ」という意見が 67%。具体的な数字が出ております。また、67%が「経営を変えるべき」とはっきり回答いただきました。さらにこのアンケート 20 問の中で興味深いものとして「アユの事業を止めたら組合員を辞めますか？」という質問では、「辞めます」といった回答が 25%程度もあり、もしもアユ事業をやめた場合は具体的にどのくらいのダメージが出るか、ということにまで落とし込めたアンケートを実施できました。

これは回答データのエクセル表の一部です。この表のおよそ倍ぐらいの長さのデータを集計し、これが集計結果になります。送付数が 2092 名、返送数が 987 名という、ほとんど全体の意見として 99%の信頼度かつ許容誤差 3%で、統計的にも信憑性が高い、良いデータが得られました。現在、天竜川漁協さんではこの結果を活かして、今後のアユ事業の運用の経営改善を検討し、実施に向かっております。

主要プロジェクト④ 課題管理、DX基盤と組織体制の整備

【組織の体質改善(ソフト面)】

適正な受益負担の検討：現場課金の適正化や協力金の活用方針を整理

外向きの営業姿勢：地域関係組織への積極的な営業を奨励し、漁協の収益構造を多角化を検討

事務負担の軽減と教育：現場が本来に必要な機能を精査し、IT研修を通じて導入ハードルを低下させ、主要なIT利用ツールを抽出予定

DXツールの導入検討：MAMZUやコーディネータのOSS(Open Source Software)検討を利用し、漁協のDX化を加速させる

【自前DX基盤の構築(ハード面)】

プロジェクト管理の高度化：Redmineによるタスクの可視化と進捗管理の徹底

セキュアな情報共有基盤：NextcloudやGoogleアカウントの最適化による、セキュアなファイル共有環境

次世代技術の先行試行：

- AI(LLM)連携：NotebookLMや議事録自動生成による事務作業の自動化試行
- WEB監査：Uptime-kumaによる外部公開ページの死活監視
- 業務のデジタル化：Paperless-ngxを用いた「永年史」等の漁業資料のOCR化と資産化、Immichによる写真からのGPS情報集約体制の構築



● DX 基盤とは非常に難しい話なのですが、長野県ではシステム基盤に関わるおよそ 20 種類ほどのシステムやサービスを全て試しました。その中で使いそうなものを簡単に紹介させていただきますと、「Redmine (レッドマイン)」というプロジェクト管理システムや、皆さんご存知かもしれませんが「Google NotebookLM (ノートブックエルエム)」は、音声のデータなどをアップロードする

と議事録にしてくれるようなもので、活用すればとても作業が楽になります。これは「immich (イミッチ)」。写真を撮ってアップロードすると、GPS 情報を保持したままマップに投影されます。そのマップは、漁場図と連動するものを作りました。こちらは「Paperless-ngx (ペーパーレスエヌジーエックス)」という文書管理システムで、実際に紙の書類や書籍等をアップロードすると、文字列を解析してアーカイブ化するものです。

なぜこのようなことしているかという、今後、AI にこういった県の情報や漁協さんの情報を伝えられるよう、文字列表化をして保管しておく「アーカイブ化」の必要性を感じているからです。

これは「Uptime Kuma (アップタイムクマ)」という Web サイトなどのモニタリングシステムです。これで各漁協のホームページを定期的に監視して、ダウンしているところや、例えば SSL の暗号化通信を行っていないところに対しては暗号化通信を行うように、といったことを漁連からお願いをしております。こちらは組合員の管理システムです。これは継続して作り続けているものになります。

● 定量的な結果では、遊漁券販売実績はいいとして、リピーターが増えてきているという状況ははっきり分かりました。

また、Web サイトで情報を公開すると徐々にアクセス数が増えている。これはおそらく AI 等の影響もあったりするかとは思いますが、やはり一次情報、漁協さんが懐に抱えている情報を表に出していくことで、関心を広げたりこのような固定ファンを作ることが、非常に大事だなって感じました。

定量的成果: 遊漁券販売とアクセス数

遊漁券販売実績:

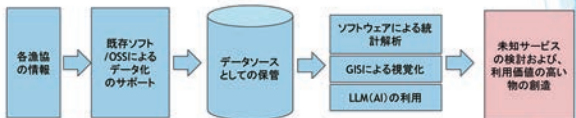
- 一般魚(日券): 101% (前年比)
- 一般魚(年券): 117% (前年比) → 「リピーター・固定ファン」の獲得に成功。

長野釣り人ナビ:

- アクセス数: 232% (目標比) (実績669,957回) → 圧倒的な情報需要を証明。

最後に

- 本質的な問い: ITは何のためにあるのか?
 - ITは目的ではなく、「現場の人間が川や魚、そして釣り人と向き合う時間」を取り戻すための手段です。煩雑な事務やアナログな情報管理をデジタルに委ね、漁協が本来持つ「地域資源の守り手」としての機能を再定義します。



- 「長野モデル」が残すもの
 - 仕組みの共有：一つの漁協の成功に留めず、県下8漁協が連携できる「共通のデジタル基盤」を構築し、何に役立ててもよい使い方を限定しない横断的検討こそが特徴的である
 - 意思決定の変革: 「慣例」ではなく「データ(アンケート・GIS・販売実績)」に基づき、自信を持って次の一手を打てる組織へと進化しつつあると感じております。

●最後に、長野県では IT 関係がとても進んでいますが、IT そのものを目的とするのではなく、先ほどのツールの如く、その使い方を限定することなく、色々と皆さんに使って活用してほしいと考えております。様々な情報をデータソースに溜めて、数値的に解析して GIS に落とし込んだり、AI を利用して未知のサービスや今後展開できることを、どんどん大きくしていく活

動を継続して行っております。

今まで行ったことやアンケートも含めて、データで可視化できなかったところどんどん見える化して
いって、漁協の組合長さんが意思決定する際にも、はっきりとした判断ができるようになったらいいな
と考えております。以上です。

栃木県漁業協同組合連合会

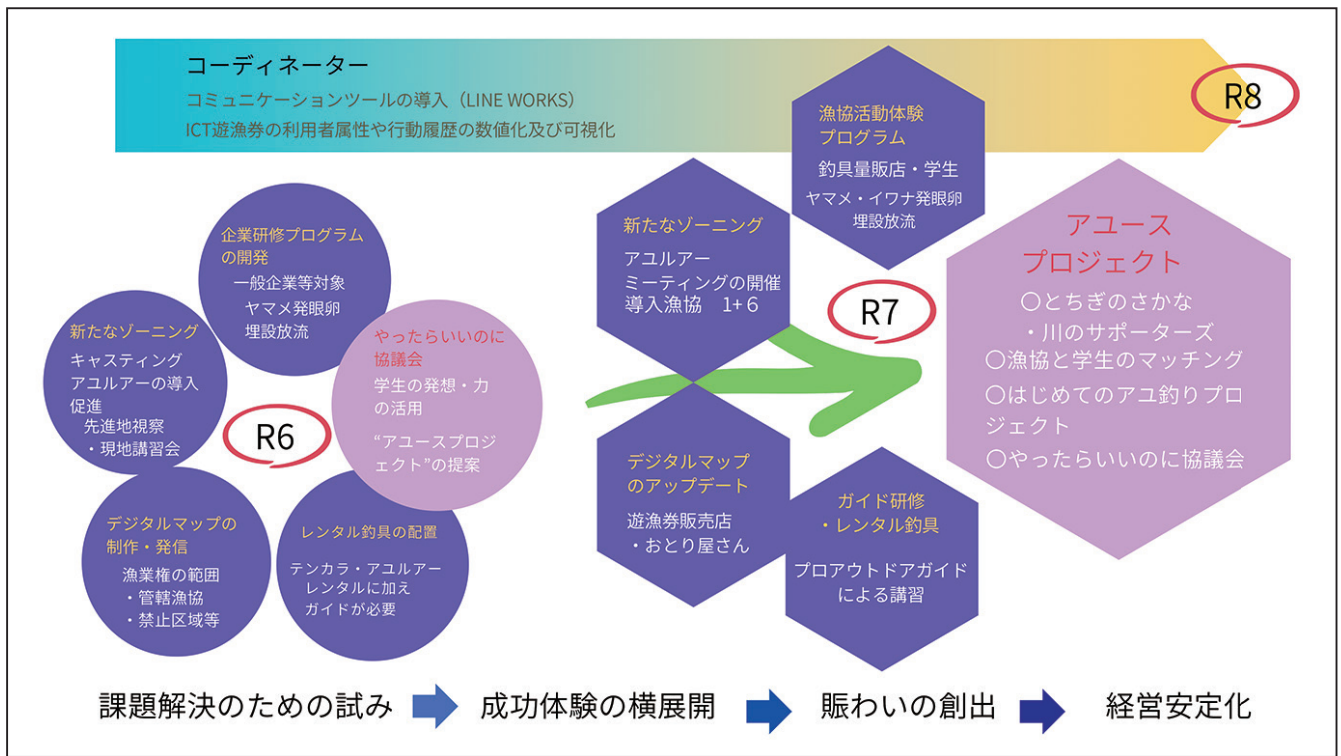
発表者：コーディネーター 田邊 宜久



栃木県漁連のコーディネーターの田邊と申します。今日はよろしくお願ひします。栃木県漁連の2年目の挑戦である今年の結果を報告させていただきます。



●昨年度、この事業に手を挙げた理由は、この図にあるとおり、組合員や遊漁者数がどんどん減少していることを復興し、漁協の経営安定化に繋がたいと考え、新たな利用者の確保、おとり、振興、DX 導入拡大、漁協管理の高度化でのデジタルマップに取り組みました。



●昨年度はコーディネーターの設置、これ私です。業務効率化ツールのLINE WORKSの導入、ICT遊漁券の利用者属性や行動履歴の数値化や可視化について取り組みました。また、企業研修プログラムの開発。これは一般企業の方々に漁協の活動の中身、例えば河川清掃等を体験させること。また、アユルアーの導入では、キャストイングルアーの導入促進として釣り教室などを行いました。デジタルマップの作成ではGoogleマイマップを作成しました。

レンタル釣具の配置では、釣り工房ですね、漁協さんにレンタル釣具を置きました。今回アユルアーのレンタルを置きましたが、やはりレンタルだけじゃダメだということで、結果としてガイドが必要という考えが出てきました。

次に学生や若者について。やはり人材が少ないと人手も少ない。そこで若い人が必要ということで、学生さんを巻き込んで、漁協の皆さんと学生さんが一緒にワークショップのプログラムを通じて漁協の活性化について話し合いを行いました。

昨年度の結果を踏まえて、これらをさらに拡大して、漁業活動の体験プログラムとして組み込むべく、メーカーさん学生さんと一緒に山女魚・岩魚の発眼卵放流の体験をやりました。

次に、ゾーニング、アユルアーについては導入漁協が7箇所増えて、栃木県では8箇所あります。

次に、デジタルマップのアップグレードを行いました。あとガイド研修、伝達ツール、で昨年度の教訓から釣りのガイドが必要ということで、プロのアウトドアガイドによる講習も行いました。

一番力を入れたのはここです。この「アユスプロジェクト」と「栃木の魚、川のサポーターズ」で、後ほど説明しますが、ボランティアさんを登録するシステムです。>次は漁協と学生のマッチングをいたしました。また、今まで釣りをしていなかったアユ釣り師を増やすために、初めてのアユ釣り体験プログラムやりました。「やっただいいのに協議会」も継続してやっております。

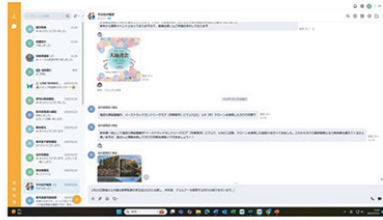
【事業の実施内容】

コーディネーター
コミュニケーションツールの導入 (LINE WORKS)
ICT遊漁券の利用者属性や行動履歴の数値化及び可視化

1 コーディネーターの設置
R6に引続き田邊宜久



(コミュニケーションツールの運用)



	在宅ワーク (時間)	出張 (回数)		主な取り組み
		管内	管外	
6月	104	5	2	事業準備・打合せ・調整
7月	110	2	6	アユルアミーティング
8月	101	0	6	はじめてのアユ釣りプロジェクト
9月	106	1	4	やっぴらしいのに協議会・アユスプロ
10月	85	7	3	漁協活動体験プログラム
11月	114	3	5	漁協活動体験プログラム、デジタルマップ
12月	53	0	4	デジタルマップ、とちぎのさかなと川の
1月	22	1	2	とちぎのさかなと川のサポーターズ
合計	695	19	32	

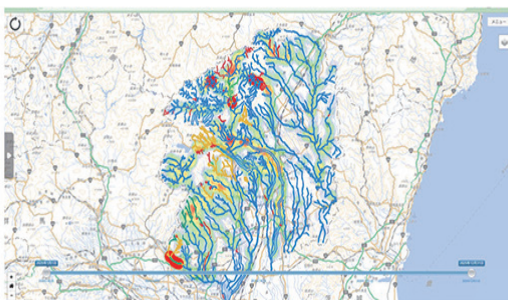
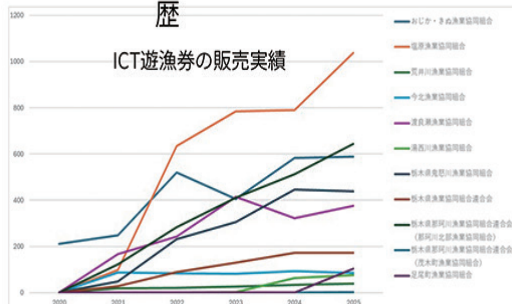
1 漁連、漁協間での利用				
一送利用	発信者	受信者	回数	
個別利用	県漁連	全会員	22	
	渡良瀬		31	
	鬼怒川		23	
	那珂川北部		10	
	荒井川		10	
	那珂川南部		7	
	足尾町	県漁連	7	
	茂木		5	
	黒川		5	
	下都賀		4	
グループ利用	塩原		3	
	船尾、小倉山、おじか・きぬ、今北、栗山、中野寺湖、川俣湖、西大沢、瀧西川		0	
	雑談		14	
	その他		20	
	はじめてのアユ釣りの体験グループ		19	
	合計		180	
	2 みんなやる事業ほか県漁連事務での利用			
	相互利用	利用者	2対1対1	回数
	相互利用	県漁連	2対1対1	145
			アユ釣り制作委託業者	13
		FISHPASS	44	

●アドバイザーは引き続き私、田邊です。この写真は10年前で今はだいぶ体重増えてしまい、まったく別人ですね。9月から1月まで私はこのように仕事をしております。

コミュニケーションツールとしてLINE WORKSを全漁協19漁協に入れましたけど、実は、使ってる漁協さんは半分の9漁協です。使ってる漁協さんは渡良瀬さん、鬼怒川さんとかは上位の方ですね、こういったところは事務局があって若い人がやっています。全然使ってないところでは、これはやはり、おじいちゃんが多い、事務局がない。事務局がない所ではなかなか使ってもらえなくて、このあたりのツールの導入については課題かと思っています。

(ICT遊漁券の利用者属性や行動履歴の数値化及び可視化)

ICT遊漁券の普及・行動履歴



インスタはじめたら
徐々に指標が上向き

栃木県漁連HPによる広報宣伝



	サイト訪問者数 (PV)			サイトセッション数			ユニーク訪問者数 (UU)		
	2023	2024	2025	2023	2024	2025	2023	2024	2025
1月	3,268	3,578	3,038	1,789	1,982	1,507	1,680	1,858	1,393
2月	6,531	6,131	4,886	3,394	3,479	2,375	3,076	3,266	4,886
3月	8,984	6,465	5,232	5,353	3,996	3,726	4,781	3,726	2,792
4月	5,345	4,362	3,659	3,139	2,514	2,017	2,879	2,371	1,920
5月	6,438	4,778	4,078	3,595	2,759	2,260	3,379	2,642	2,105
6月	4,716	3,766	3,734	2,663	2,201	2,159	2,497	2,092	2,042
7月	3,357	2,837	3,113	1,921	1,576	1,895	1,810	1,502	1,772
8月	3,150	2,400	2,795	1,830	1,438	1,750	1,710	1,353	1,604
9月	3,306	2,673	2,393	2,002	1,459	1,498	1,879	1,371	1,418
10月	2,262	1,797	1,900	1,335	1,078	1,162	1,266	1,015	1,037
11月	1,555	1,387	1,341	934	717	811	861	672	743
12月	1,609	1,093	1,679	874	589	960	808	562	871
合計	50,521	41,267	37,848	28,829	23,788	22,120	26,626	22,430	22,583

PV: サイト内のページごとの閲覧者の総数。1ページ閲覧ごとに加算。
セッション数: サイトを訪問した閲覧者数。
UU: 一定期間内の閲覧者の絶対数。

● ICT 遊漁券の方の普及はどんどん上がってます。釣り人の行動履歴も活用も出来るのですが、これについてはデータの活用できておらず、来年以降の取り組みとして課題として挙げていきたいと思っています。

また、栃木漁連のホームページをリニューアルして、とてもよくなったのですが、前年と比較すると来訪者数が下がっており、ホームページの告知不足と考えて、1月にInstagramを開始して連携したら1月から徐々に上がってきました。今後、SNSも活用して、ホームページの告知もしていきたいと思っています。




新たなゾーニング
アユルアー
ミーティングの開催
導入漁協 1+6

2 ゾーニングや釣り人と連携した漁場管理（新たなゾーニングの展開）

(1) とちぎアユルアーミーティング

【目標】参加者30名/3回

キャストイングアユルアー解禁河川




	令和6年度	令和7年度	令和8年度
漁協数	1	8	8
河川数	1	12	19

アユルアーミーティング実施状況




河川名	実施日	参加者	講師	備考
黒川	2026年7月19日	5	がまかつテストター	
荒川	2026年7月26日	7	グローブライト、ティムコ	
荒井川	2026年8月2日	7	ティムコ	
箒川	2026年8月28日	15	ティムコ	漁協役員対象

ロッド、リール、ルアー、タビ等、無料レンタル
遊漁料無料（組合の理解）




黒川

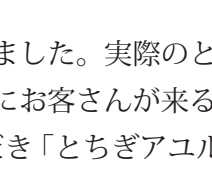
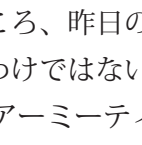
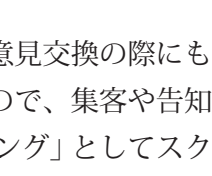
荒川

荒井川

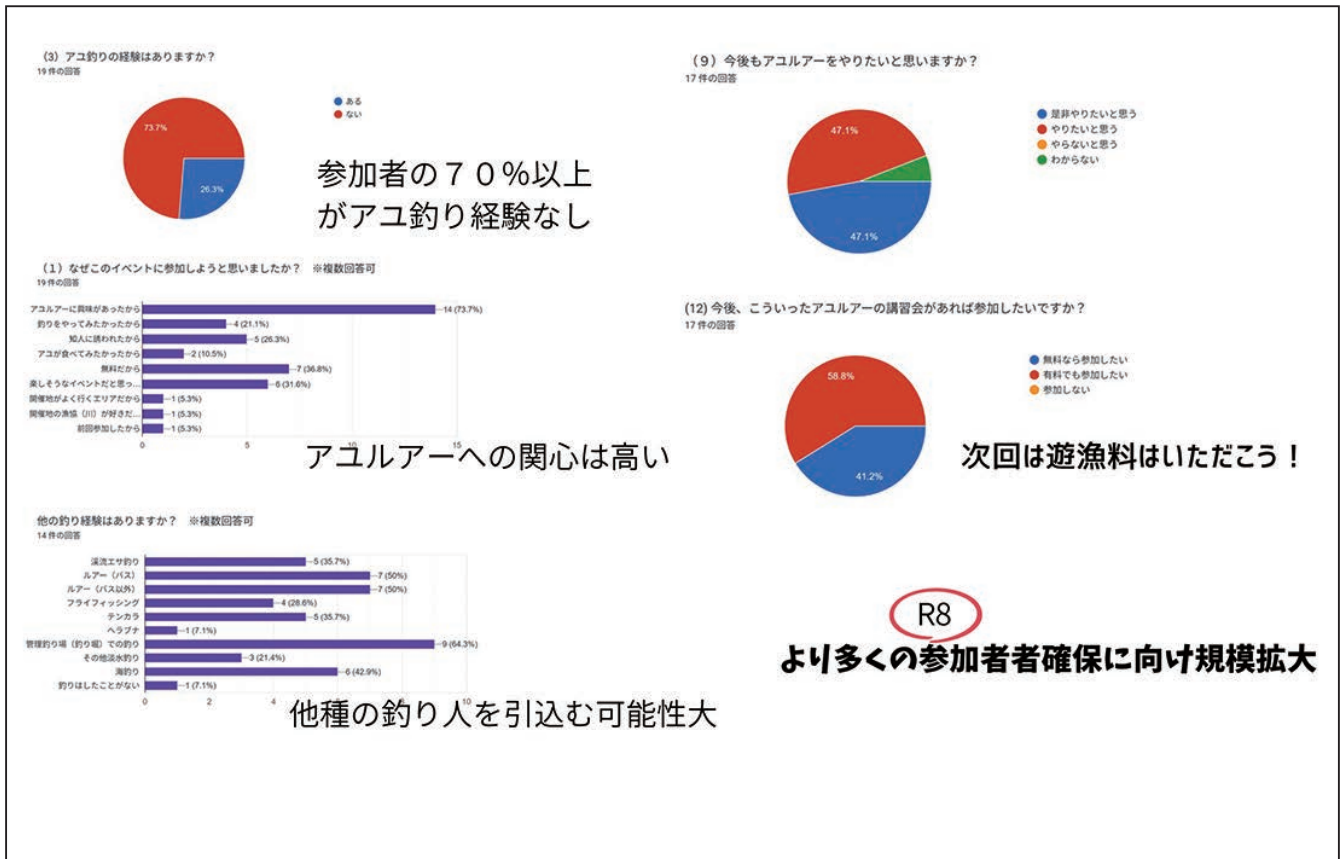




箒川

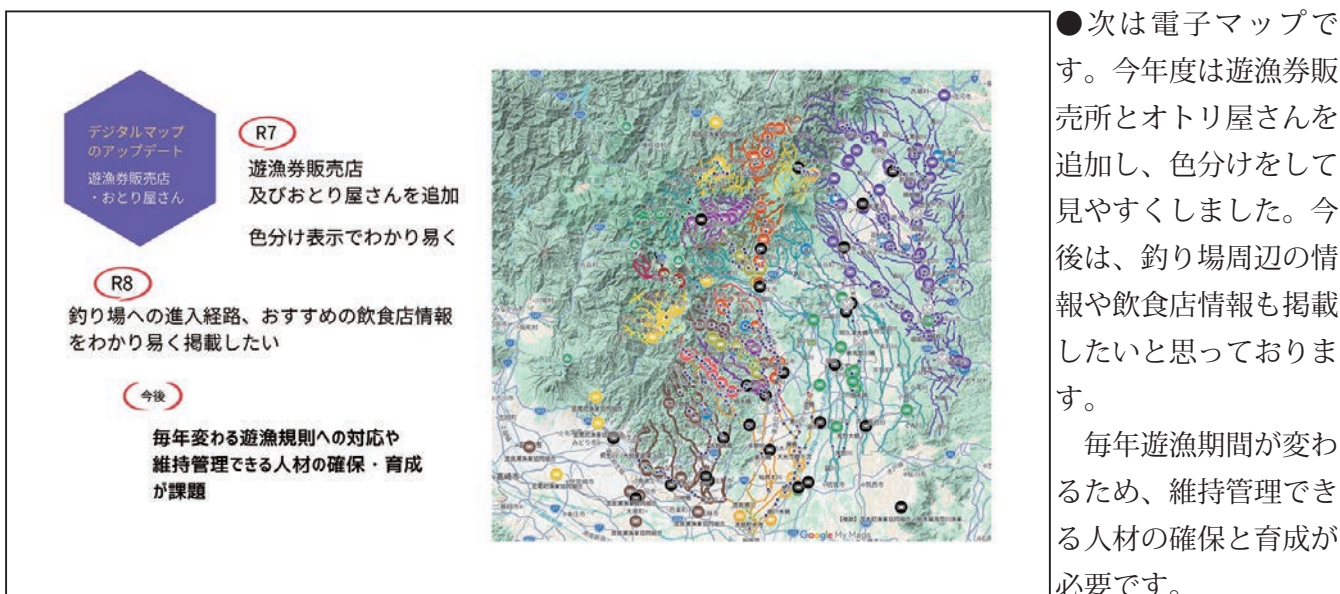




●新たなゾーニング等では、アユルアーがかなり増えました。実際のところ、昨日の意見交換の際にも話が上がったように、アユルアーエリアを作ってもすぐにお客さんが来るわけではないので、集客や告知のために、がまかつ・ダイワ・ティムコの各社に協力いただき「とちぎアユルアーミーティング」としてスクールを開催しました。1回目が黒川、2回目は荒川、3回目は新井川で開催し、それぞれ5名、7名、7名が参加いたしました。黒川の回では前日の大増水の影響で全然釣れなかったのですが、ダイワさんが一生懸命やってくれたおかげで、釣れなくてもすごい楽しかった！、またやりたいって！といった声が多かったです。ちなみに、道具類も丸ごとレンタル込みで参加費無料で行いました。また、箒川でも漁協の役員さん対象のスクールを開催しております。

53



●アンケートの結果、参加者の70%はアユ釣り経験なし。また、他の地域から来てます、アユへの興味あってこのイベントに参加した、アユへの関心が非常に高かったとありました。他の釣り経験ありますか？には、参加者19人のうち14人が他の釣りの経験がある。今後もアユルアーやりたいと思いますか？には、約9割がぜひやりたいと思う、でした。こういった講習会があれば参加してみたいですか？には、有料でも参加したい、という意見もあり、次回は参加費をいただいてもいいかなと思っております。ただ、人数が少なかったなので、来年以降は参加者をさらに増やして、規模を拡大して実施したいと思っております。



●次は電子マップです。今年度は遊漁券販売所とおとり屋さんを追加し、色分けをして見やすくしました。今後は、釣り場周辺の情報や飲食店情報も掲載したいと思っております。毎年遊漁期間が変わるため、維持管理できる人材の確保と育成が必要です。

また、多くの人にこのデジタルマップを見ていただきたいので、その周知も重要と思っております。

ガイド研修
・レンタル釣具

レンタル釣具

【釣具レンタル】

アユルアーレンタル実績ゼロ

テンカラレンタル実績 6件

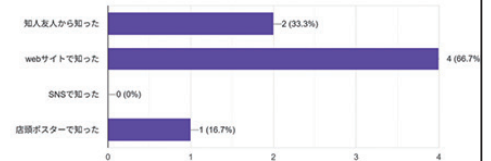


違いは、「情報発信」と「ガイド」

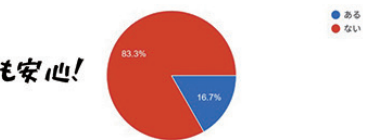


ガイドがいればはじめてでも安心!

このレンタルサービスをどこで知りましたか？
6件の回答



テンカラの経験はありますか？
6件の回答



適切だと思う価格（税込）を回答お願いします。
3件の回答

意外と渋い



●釣具のレンタルは2箇所に置かせていただきました。一つはアユルアーレンタル。年間のレンタル件数は10件でした。1箇所のおとり屋さんにもアユルアーレンタルを置いていただきましたが、目印はこのぼりだけ。正直これでは分かりづらかったですね。もう一つはマスの管理釣り場に置いていただき、ウェブやチラシでも告知したのに6件でした。ちょっと少ないですね。この6件は、ほぼ私がガイドした機会でした。今回、このことをウェブで知った方が一番多く、やはりウェブでレンタルを周知しないといけないかなと思っております。また、釣り経験がない人であれば、ガイドがいれば安心だよってこともあります。レンタル料は大体いくらならよいか？については、1000円でした。意外と渋いです・・・。

ガイド研修
・レンタル釣具

プロアウトドアガイド
による講習

R7

2月25日・足利市毛野公民館
講師：ネイチャー・プラネット坂内剛至 氏
参加者：渡良瀬漁協組合員等12名
NPO 1名 全釣協2名
県水産試験場1名

釣具レンタルの結果やはじめての Ayu 釣りプロジェクトの状況から、“ガイド”の存在が新たな釣り人を呼び込む際に不可欠と感じた。

参加者の同意を得て栃木県漁連釣りガイドとして登録
HPで紹介していきたい



R8

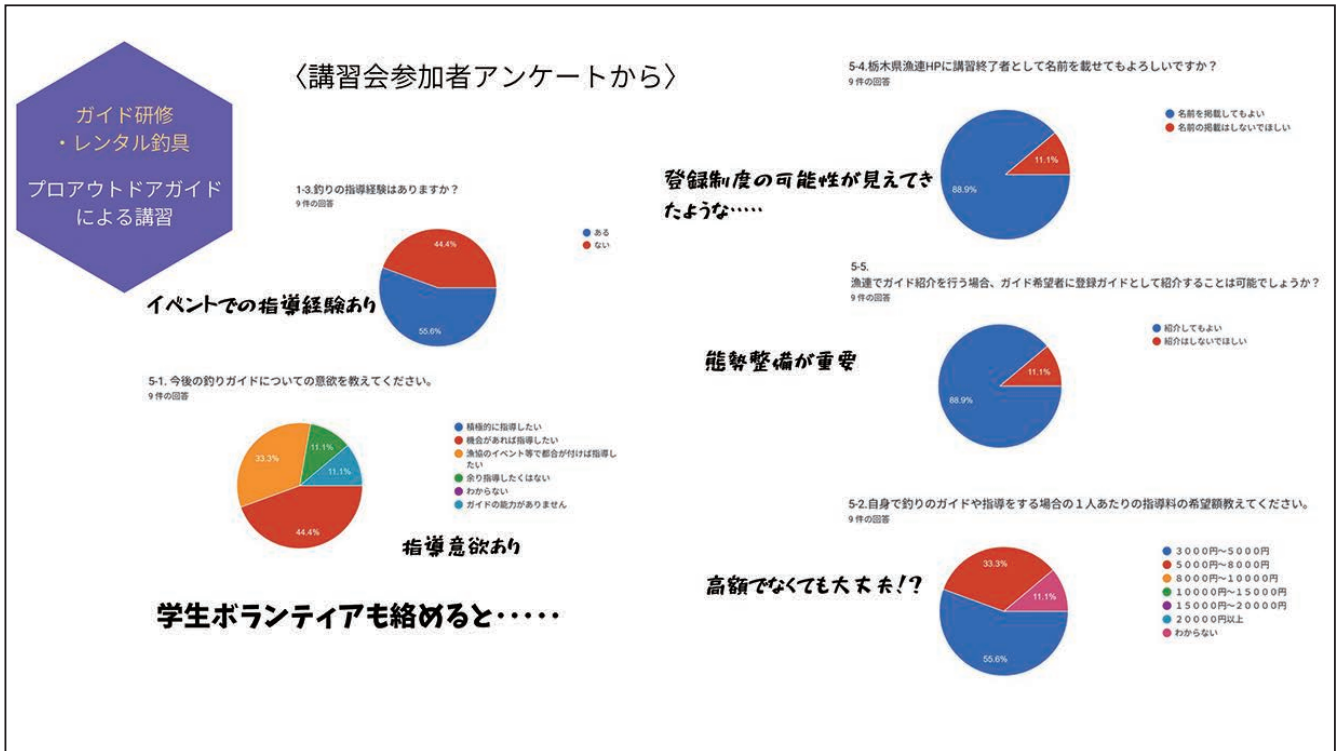
より広く呼びかけ参加者を増やしたい

ガイドを希望するお客様とガイドのマッチングを試行

将来

ガイド紹介の態勢づくり

●やはりガイドは必要だとなりましたが、それを教える人が必要です。教える人には何が必要なのか。釣りが上手い人は沢山おりますが、釣りが上手＝教えるのが上手い、わけじゃないのですね。「ちょっと竿貸してみろ」とかって、そういう人もいますから。やはり釣りを教える人を育てるために、先月2月25日にプロのアウトドアガイドによる講習を行いました。講師はネイチャープラネットの加賀さんという方で、アウトドアショップを営んで、なおかつ組合員でもあります。こちらのテキストも加賀さんの監修のもとに作りました。講習では渡良瀬漁協さん、鬼怒川漁協さんの協力により、12名の方が参加しました。その他、NPOや水試、全釣りの方も参加されました。最も力をいれていただいたことは、釣りを教えることよりも安全管理や言葉遣いとかマナーとか、そういったものを教えてもらいました。



●アンケート結果です。

まず、今まで釣りの指導経験がありますか？については、イベントでの経験がある。特にアユルアースクルをやった時の指導員の人たちもこれ含まれていると思います。

次に、釣りのガイドへ意欲については、やってみいたいという方が多いです。ホームページで紹介して、おすすめガイド、ここを紹介してもいいですかってアンケート取ったんですけど、ほぼみんな9割ぐらいOKです。非常に意欲が高い。

料金はいくらぐらいが妥当か？は、多いのが3000から5000円。5000から6000円でした。結構安いです。私もガイドをしているのですが、1日やるのなら2万くらいは欲しいです。それに、ガイドさんだけでなく学生ボランティアも絡めたいと思っており、そうすればいいガイドシステムできるんじゃないかと思っています。

漁協活動体験
プログラム
釣具量販店
ヤマメ発眼卵
埋設放流

開催日：令和7年10月28日（火） 時間：10時～14時30分
開催場所：三依テンカラ専用C&R区間（日光市三依見通沢）

参加総数：13名（WILD-1・上州屋・つり具おおつか
・栃木PRアンバサダー）

・近隣の溪流の増殖活動について理解を深めることが出来、
また宮本様の15センチ以下の魚をリリースすることによる
資源維持の効果など、改めて遊漁者に周知すべきことを学びました

・発眼卵放流の重要性を知れ、溪流魚に対する理解が深まった。

【次年度以降の改善点】・貴重な体験でした。

・お客様参加方

・経過の観察もしたいです

・目的をもう少しはっきりさせたい。

・SNS等で事後報告等で活動報告をし、興味を持って頂きつつ、そういったお客様
に河川清掃等の協力等にも興味を持って頂いて、そういったイベント等企画し協力し
てもらう流れを作れるようにすると良いかな?と思われる



R8 量販店との交流強化、お客様対象の体験会

（将来） 量販店主導の体験会

●次は漁業活動体験プログラムです。昨年度行った企業研修プログラムの拡大版です。今回はアウトドアショップのWild-1さん、釣具の上州屋さんと大塚さんといった企業の方々。さらに栃木県の「栃木のさかなアンバサダー」も参加して一緒にヤマメの発眼卵放流を行いました。

放流作業を行った後、午後の部として、水産技術研究所の宮本先生に溪流のルールなど釣りと魚の講習会を行いました。参加者のアンケートでは、参加方法について目的をもう少しはっきりしたいこと。SNSなどで、事後報告だけでなく活動を可視化し興味を持っていただき、そういったお客さんに河川清掃の協力など、そういったイベントに協力してもらえる流れを作るとよいのではないかとといった意見がありました。今後も行政と協力を強化して、このようなイベントを開催したいと思っております。

漁協活動体験
プログラム
学生
イワナ発眼卵
埋設放流

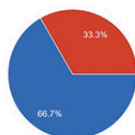
開催日：令和7年11月29日（土） 時間：10時～14時30分
開催場所：三依テンカラ専用C&R区間（日光市三依見通沢）

①参加者：大学生：4名（白鷗大学2名・文星芸術大学1名
・帝京大学1名）
大学教員1名（帝京大学）



常に釣りができる環境があるのが当たり前ではないと思より水産資源を大切にしていきたいと思いました。
発眼卵放流のみでなく、未来に向けて川魚を守るための講義をお聞きできたこと。

5. 今後の参加意欲
3件の回答



●是非参加したい
●機会があれば参加したい
●どちらともいえない
●あまり参加したくない
●参加したくない



●もうひとつ、今度は11月に行った学生達との岩魚の発眼卵放流です。これは三依のテンカラスクールでやりました。参加者は大学生が4名と教員が1名参加され、この時も宮本先生に指導いただきました。この時の模様は下野新聞さんにも紹介いただきました。

参加者の感想ですが、常に釣りができる環境があるのは当たり前じゃないと思った、水産資源を大切にしたいと思ったとか、発眼卵の放流も何気なく、未来に向けて河川環境を守るための講義を受けられた、こういった声がありました。で今後の参加意欲ということで、次回もあれば参加したいという声が多かったです。

アユースプロジェクト

- とちぎのさかな
- ・川のサポーターズ
- 漁協と学生のマッチング
- はじめてのアユ釣りプロジェクト
- やったらいいのに協議会

**アユと若者を結びつける
「アユ+Youth
アユースプロジェクト」**

東京海洋大学
沿岸域資源論研究室
(伊藤美俊・川村幸介・三輪廣仁)

R6 やったらいいのに協議会での提案

●今回、この学生さんと若者とで「アユースプロジェクト」を立ち上げました。令和6年度に東京海洋大学の工藤先生の学生さんや、栃木県の大学生の方にいろいろと提案うけて行ったのが「アユースプロジェクト」です。

アユースプロジェクト

- とちぎのさかな
- ・川のサポーターズ

登録人数	地域別人数			
	県北	県央	県南	茨城県
大学生	14	6	5	3
社会人	8	1	3	3
合計	22	7	8	6

- 釣り好きだから
- 川や魚、自然が好き
- 漁協（漁業に興味がある）
- ボランティア活動に興味
- 社会や地域に貢献したい
- 楽しそう
- 新たな学びや自身の成長
- その他

協力大学等：宇都宮大学、白鷗大学、帝京大学、
国際医療福祉大学、NPOとちぎユースサポーターズネットワーク

●その一つが「とちぎのさかな・川のサポーターズ」。これは、まず、ボランティアをしたい方に登録してもらいます。今度は漁協さんから、こういう活動をしたいという要望があった時に、うちの漁連の方から登録したサポーターの方に配信して、その方が手を挙げるとマッチング成立となって、ボランティアに参加できるというシステムです。現在、22人が登録しております。釣りや自然が好きなおことで参加する人が多いです。

アユースプロジェクト

〇とちぎのさかな・川のサポーターズ

宇都宮大学コラボフェアに出展
とちぎのさかな・川のサポーターズの募集、
内水面や「みんなの事業」をPR



大学コンソーシアムとちぎ主催
「とちぎ学生アイデアピッチバトル」
で、サポーターズ登録の白鷗大学生グループ
「アユース」が3位入賞



●また大学コンソーシアムとちぎ主催の
栃木学生アイデアピッチというイベントでは、サポーター登録いただいた学生さんが3名参加して、ボードゲームによるアユ釣りや漁協の活性化のアイデアを発表し、3位入賞を果たしました。

アユースプロジェクト

〇漁協と学生のマッチング

漁協の要望により、とちぎのさかな・川のサポーターズ登録者から参加者を募集

漁協と学生のマッチング実施状況				
月日	場所	募集人数	参加者数	実施内容
2026年8月9日	足利市	4	4	はじめてのアユ釣りプロジェクト
2026年8月10日	足利市	4	4	はじめてのアユ釣りプロジェクト
2026年10月26日	足利市	4	0	ニジマス放流
2026年11月9日	足利市	4	2	ニジマス放流
2026年11月22日	宇都宮市	2	0	とちぎコープフェア
2026年11月23日	足利市	4	1	ニジマス放流・魚道清掃
2026年2月15日	日光市	6	3	カワウテグス張り



8月10日はじめてのアユ釣りプロジェクト



11月9日渡良瀬川ニジマス放流



11月23日渡良瀬川ニジマス放流・魚道清掃



2月15日男鹿川 カワウテグス張り

●さて、漁協の要望によって、サポーター登録者から参加者を募集しました。

今回7回募集を行い、そのうちで5回でボランティアが来てくれました。内容はアユ釣り補助とかの運営、渡良瀬川の稚魚放流、草刈り等いろいろやってきました。正直22人登録してる割には、一回の参加者数が1~4名と少ないことは課題ですね。

アユースプロジェクト

○はじめてのアユ釣りプロジェクト

場所	実施日	募集数	参加者	備考
足利市 渡良瀬川中橋緑地河川敷	2026年8月9日	AM	20	5 小学生対象
		PM	20	17 一般対象
	2026年8月10日	AM	20	8 小学生対象
		PM	20	21 一般対象

●アユースプロジェクトでの「はじめてのアユ釣りプロジェクト」です。これは、8月9日10日に実施しました。各回、20名の定員で、1日40名の合計80名を募集しました。午前中は小学生で午後が一般です。小学生はあまり集まらなかったですが一般は多かったです。渡良瀬漁協さんでは、小学生は無料なので、このような渡良瀬漁協の小学生用のチケットを作って、皆さんに配布しました。

アユースプロジェクト

○はじめてのアユ釣りプロジェクト

小学生はじめてのアユ釣りプロジェクトinわたらせ

(1) なぜこのイベントに参加しようと思えましたか？

アユ釣りに興味があったから	4 (50%)
釣りをやってみたいから	4 (50%)
友達に誘われたから	0 (0%)
家族にすすめられたから	3 (37.5%)
先生や知り合いにすすめられたから	0 (0%)
チラシを見て楽しそうなので	5 (62.5%)
魚が好きだから	2 (25%)
渡良瀬川が好きだから	0 (0%)
夏休みの思い出づくり	1 (12.5%)

(3) 釣りをしたことがありますか？

ある	25%
ない	75%

(5) 渡良瀬漁協を知っていますか？

知っていた	25%
知らなかった	75%

ちょっとショック

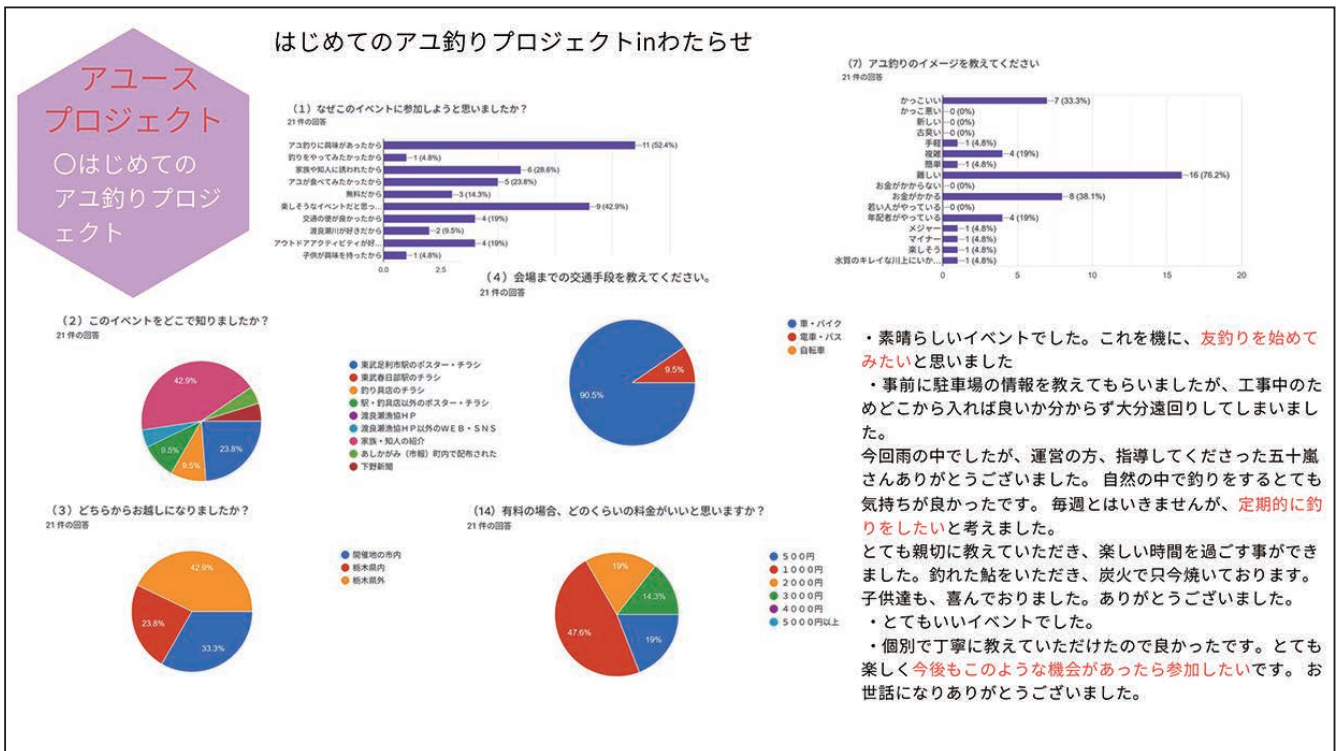
(8) 今後も釣りをやりたいと思いますか？

やりたいと思う	100%
やりたくないと思う	0%
わからない	0%

- ・アユ釣りの歴史やあゆの友釣りなど、初めて知ったことがたくさんありました。足利のじまんの川のあゆ釣り、これからもずっとつづけてほしいと思います。川の中など、初めて入れて、すごく色々な経験ができました。また来年もあゆ釣りしたいです。
- ・ていねいに教えてもらいたくさん釣れて楽しかったです。またぜひ参加したいです。
- ・初めての釣りでとても楽しくできました。五十嵐先生にもとても優しく教えてもらい良かったです。夏休みのとても良い思い出になりました。雨の中ありがとうございました。
- ・丁寧に教えていただき、ありがとうございました。とても楽しく釣りの魅力にハマりました。ありがとうございました！
- ・初めての経験で夏休みの楽しい思い出になりました。先生がたくさんいてくれるので、子供が体験出来て良かったです。ありがとうございました。また、1匹でも釣れたら良いと思っていたので、たくさん釣れて子供も喜んでいました。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。(親の感想)

●小学生へのアンケートの結果です。釣りをしたことがありますか？は、初めての人も1/4ほどおりました。渡良瀬漁協を知っていますか？については3/4が知らなかった結果で、ちょっとショックですね。実際に漁協の活動を知る人はあまりなかったのですが、今後も釣りに興味あって、やりたいという意見も

多かったです。このイベントのときは、初めてアユ釣りをした人でも友釣りを体験させましたが、かなりの密度で放流したので、釣れた人では30匹も釣っていました。ちょっと釣れすぎて、これがアユ釣りだと思ってしまうと、若干困ってしまう気持ちもあります。



●一般へのアンケートについて、参加者の動機は、ポスターやチラシとか見て楽しそうだったとありました。今回、東武鉄道さんとのコラボで、駅にポスターを貼っていただき、そのポスター見て来たという人も多くいらっしゃいました。会場への交通手段は車が多いですけど、電車を使った人もおりました。有料イベントの場合の料金については、1000円以下にしてほしいというのが多かったです。実際1000円ですかね、もう少しお金をいただきたいかなと思っています。

アユ釣りのイメージについては、難しいが最も多く、やはりお金がかかるイメージという回答も4割程度ありました。カッコいいが3割あり、おじさんの釣りでカッコ悪いと言われている割にはカッコいいイメージがあるようです。友釣りを初めてみたい意見も結構多かったです。



●これがその時の写真です。

アユースプロジェクト

○はじめてのアユ釣りプロジェクト

事業に新たな展開が！

足利市、東武鉄道・東武トップツアーズとの連携により事業化に向け検討中

親子アユ釣り体験・アユ塩焼き体験
川の生き物観察

インバウンドも提案中



漁協と地域の一層の連携に期待大

釣りガイド養成講座で学んだ成果が発揮できるといいな

とちぎのさかな川のサポーターズの手も借りよう!

●このアユースプロジェクトの時に、東武トップツアーズさんの「子ども体験プログラム」というのに関わっておられる足利市の職員さんにもお越しいただきました。このような魚のつかみ取り体験などを組み込んだ電車のツアーです。こういったものと連携できれば、みんなでやるぞ事業が終了しても事業として残っていけるかなと思って、来年以降の事業化を検討中です。

アユースプロジェクト


○やったらしいのに協議会

第1回やったらしいのに協議会

令和7年9月20日（土）
宇都宮市 パルティとちぎ男女共同参画センター

参加者：白鷗大学3年生4名、帝京大学教員1名
漁協2名
県漁連2名
栃木県2名
水産庁丸茂班長
「みんなやる事業」検討委員2名（工藤先生、佐藤氏）
事務局 3名

はじめのアユ釣りプロジェクト
ボランティアに参加しての感想



若者が釣りをしない理由として、どこで釣りをしたらいいかわからない、周りにやっている人がいない、楽しみ方がわからない、の3点がある。学生は、スマホを見ている時間が多いので、若者の利用時間が多いSNS (Instagram、YouTube、TikTok) で、イベントの様子を短い動画にまとめるなどして発信することがいいのではないかと。

小さい頃に釣りをしていたが、久しぶりに体験し、改めて楽しかったと感じた。漁協の皆さんと一緒に、おとり付けから魚を針から外すまで、一連の流れを学ぶ機会を設けることが、初心者の不安緩和に重要ではないか。アンケート結果（「とても楽しかった」という数値）はイベント成果の証拠となるため、これをホームページなどで発信し、「こんなに盛り上がったなら参加してみよう」というきっかけにすべき。

多くの参加者が高齢者であった。女性は少ないと感じた。親子参加者の中には、釣りは初めてでも「掴み取りはしたことがある」という人がおり、こうした身近な体験が釣りへの関心につながると感じた。ボランティアを依頼する際は、その内容やイメージが伝わるよう、詳しく説明することで、人手不足への協力を得やすくなるのではないかと。

釣りの経験がなく、釣りの楽しさを知らなかった。水産業への興味を持つためには、体験という「きっかけづくり」が、最も大切。小学生たちが、体験後には「美味しかった」と笑顔で帰る姿を見て、「参加しなければわからない」とこの重要性を再認識した。今後の情報発信のあり方について、さらに深く考える必要性を感じている。

●今年も「やったらしいのに協議会」を開催しました。9月20日に第1回を開催し、ここに書いてあるとおり参加した若者たちから様々な意見をいただきました。第2回目を2月21日に開催しました。学生さんの意見として、アユが中心だったので溪流もプラスしてバランスを考えているという意見がありました。どうしてもアユは大きな存在ですが、アユ以外の釣りもやっていきたいというものがあります。あ

アユースプロジェクト 〇やっただいいのに協議会

第2回やっただいいのに協議会

令和8年2月21日(土)

宇都宮市 栃木県総合文化センター

参加者：白鷗大学3年生3名、帝京大学1年2名
国際医療福祉大学3年1名
東京海洋大・帝京大教員各1名
漁協3名
県漁連2名
栃木県2名

〇レクチャー

- ・やっただいいのに協議会の趣旨と経緯
- ・内水面漁業の仕組みと現状
- ・とちぎのさかな・川のサポーターズについて

【内水面漁業活性化の提言】

「ボードゲームからリアルアユ釣りへ」

白鷗大学3年 アユース
とちぎ大学コンソーシアム主催ピッチバトル3位

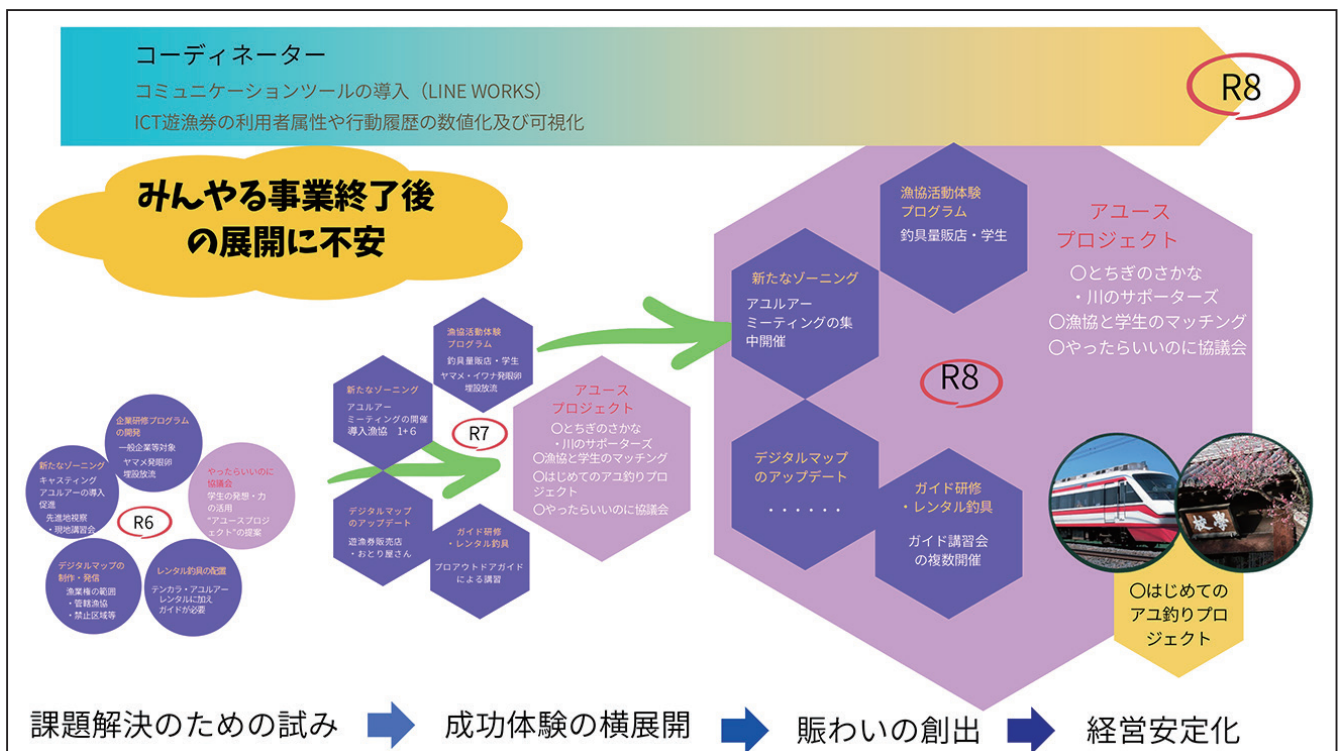
- ・アメリカ人を対象にアユ釣り、アユの食文化を広めるための取り組み

【参加学生からの意見】

- ・アユ中心になっている感想
 溪流とのバランスも考えている
- ・釣り具量販店とのコラボ
- ・ボランティアに参加して、若い力が必要と感じる場面が多かった。
- ・若者が集まるような仕掛けを考える必要がある。
- ・外来魚も排除しないでほしい。



とは、釣具の量販店とのコラボとか、若手が集まるような仕掛けを作る必要があったり、外来魚を排除しないでほしいという声もありました。



●まとめです。

令和7年は1年目の活動を拡大して実施しました。来年以降はアユースプロジェクトを拡大して、アユースプロジェクトの中で学生さんも巻き込みながら、これらの事業をさらにやっていきたいと思っております。ただ、令和9年で事業が終わってしまうので、そのあとの展開に不安もあります。今後、地域環境協力金等の活用も検討して、3年目を挑戦させてもらおうと思っております。4、5年目もブラッシュアップ

プを考えていきたいので、昨日も意見がありました。ぜひとも4、5年目も事業を実施できればと思います。



●ご清聴ありがとうございました。

～質疑応答～

岡本（インターン生）：

ありがとうございました。水産庁栽培養殖課にインターンとして学ばせていただいております、宮崎大学農学部から参りました大学3年生の岡本と申します。今回の事業報告会に参加させていただくのに先んじて栃木県漁連さんのホームページを拝見したのですが、デジタルマップが非常に見やすく、チェックボックスで情報の取捨選択ができる点が素晴らしいと感じました。

一点質問させていただきたいのですが、ICT遊漁券についてです。2026年はアユと溪流の共通遊漁券を「栃木県外の方」を対象に販売されるとのことですが、栃木県内在住の方に向けてはICT遊漁券を販売する予定はないのでしょうか。そのあたりをお聞かせください。

田邊（栃木県漁連）：

ご質問ありがとうございます。この回答については加賀さんからお願いします。

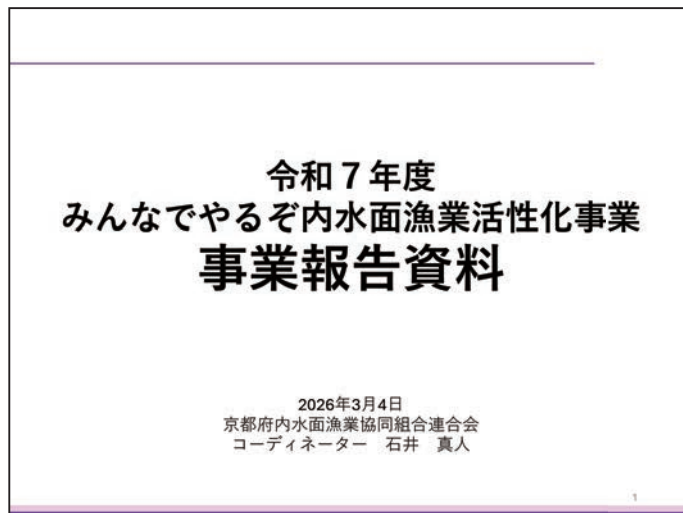
加賀（栃木県漁連）：

ご質問ありがとうございます。理由としては「県外のお客様にぜひお越しいただきたい」「遊漁者を少しでも増やしたい」という狙いがあり、県外の方限定でアユと溪流それぞれの共通遊漁券を販売させていただいております。

一方で県内向けについては、各単協さんがそれぞれICTを活用されています。フィッシュパスさんやつりチケさん、あるいはその両方、またJTBさんなど、様々なプラットフォームを利用して個別に販売を行っております。県内にお住まいの方には、そうした形で各漁協から直接購入していただく仕組みとなっています。

京都府内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 石井 真人



京都府の報告を始めます。コーディネーターを務めさせていただいております石井と申します。普段は、京都と奈良の県境の木津川漁協というところで事務局をしております。

1. 解決したい課題

①遊漁者の減少

- ・アユルアーのトレンドを活かせていない
- ・魅力ある釣り場の情報発信ができていない
- ・無鑑札で魚釣りをする人への対策

②内水面漁業振興に係る関係人口の増加

- ・内水面漁業の存在や活動を周知できていない
- ・内水面漁業と連携した地域の事業者が減少
- ・組合員数の減少

●解決したい課題は、皆様と同じと思いますが、遊漁者の減少と内水面漁業振興にかかる関係人口の増加という課題がありまして、例えばアユルアーのトレンドを生かせていない、魅力ある釣り場の情報発信ができていない、無鑑札で魚釣りをする人への対策、といったことを挙げております。

●これらの課題を解決するために、大きく三つの取り組みをいたしました。まず、アユルアーがさらに普及する釣り場環境の創造。次に、漁場管理の高度化を目指す施策。三つ目に、内水面漁業の活性化を目指す施策、この三つです。

2. 課題解決の方法

①アユルアーがさらに普及する釣り場環境の創造

- i. 7漁協を訪問してのアユルアー実態調査
- ii. 友釣り・アユルアーの風景を動画撮影
- iii. アユルアーの体験会開催（京都産業大学 鈴木ゼミ）
- iv. 鈴木ゼミ生と「鮎」をテーマにワークショップを開催

②漁場管理の高度化を目指す施策

- i. 京都府内水面漁連HPのリニューアル
- ii. YouTubeチャンネルの開設
- iii. デジタルマップの構築

③内水面漁業の活性化を目指す施策

- i. オシャレな遊漁券デザイン制作、運用システムの仕組化を推進
- ii. 鴨川納涼出展、鮎の美味しさを伝える
- iii. 鈴木ゼミ生とあゆの魅力をテーマに三条ラジオカフェ出演
- iv. フィッシングショー-OSAKA2026出展

①-i. 7漁協を訪問してのアユルアー実態調査

<調査の目的>

今回の調査では、各漁協がアユルアーを許可した経緯や宣伝方法、現状の許可範囲、トラブル等の有無について、その実態を把握することを目的とした。

<ヒアリング調査した漁協>

京都府では14漁協中の10漁協がアユルアーを許可。その内、上桂川漁協、保津川漁協、京淀川漁協、賀茂川漁協、美山漁協、保津川漁協、木津川漁協の7漁協で実施。

<ヒアリング結果の要点>

- ・アユルアーを通じて、友釣り師が増えて欲しい思いはどの漁協も同じ
- ・アユルアーを許可した経緯は、友釣り師の比率、オトリ店の数、歴史や環境に基づく考え方によって大きく異なる
- ・地元の釣具店が、アユルアーのオススメスポットを紹介してくれるケースが多い

<気付いた点>

- ・実施可能区域の拡大よりも『遊漁者に案内できるスポットの数を増やす』イメージが良い
- ・アユルアー普及によって京都府内では『友釣り専用区』が統一的な意味でなくなりつつある

<ヒアリング項目>

- ① アユルアーをする組合員の割合
- ② 一般遊漁者の釣法別比率
- ③ アユルアー許可区域について
- ④ アユルアーを許可した時期
- ⑤ アユルアーを許可した理由、背景
- ⑥ アユルアー解禁によるトラブル
- ⑦ アユルアーに対する意見
- ⑧ 案内しているアユルアーのスポット
- ⑨ アユルアーの宣伝方法
- ⑩ 仕掛け等に対する独自のルール

●一つ目のアユルアー普及のための取り組みとして、7つの漁協を訪問して、アユルアーの実態の調査をいたしました。京都府には14の漁協があって、そのうちの10漁協がアユルアーを許可している状態です。ただ、各漁協さんがアユルアーを許可した経緯や、どのように宣伝しているのか、現状の許可範囲やトラブルの有無といった実態が分かっていない状態だったので、今回はその実態把握を主な目的として、各漁協を訪問してヒアリングを行っております。

各組合長からヒアリングした結果、ポイントとして「アユルアーを通じて友釣り師が増えて

ほしい」という思いは、どの漁協も同じである。アユルアーを許可したことでトラブルがあったという話は漁協さんの方には届いていない。そのほか、アユルアーを許可した経緯は、友釣り師の比率であるとか、オトリ店の数、その漁協さんの歴史や環境に基づいた考え方で、実に様々だということはお分かりました。宣伝方法について、多くの組合長さんがおっしゃっていたのが、地元の釣具店さんがアユルアーのおすすめスポットを紹介してくださり、宣伝として大きな媒体になってることが分かりました。

これ以外に、このヒアリングを通じて気づいた点として二つ挙げております。一つは遊漁者に案内できるスポットの数を増やすというイメージの方が分かりやすいんじゃないか？という気がしました。案内できるスポットを増やすという過程の中で、実施できるエリアであるとか、期間を増やしていくという考え方をした方がいいような印象を持ちました。

もう一つは、アユルアーの普及によって京都府内では「友釣り専用区」という言葉が、統一的な意味を持たなくなりつつあるなど感じております。漁協さんによっては、オトリとアユルアーを同じ扱いという考え方をされる場所もあって、その場合の「友釣り専用区」という場合は、アユルアーもOKの場所になります。一方、オトリとアユルアーを別のものであるという考え方をされる場合には、「友釣り専用区」ではアユルアーはダメという考え方になっています。今後アユルアーやアユ釣りを始める人にとって、「友釣り専用区」という言葉が、もしかしたら誤解を生む種になるんじゃないかという危惧と言いますか、そういった気づきがありました。

●次に、友釣り・アユルアーの風景を動画撮影として、各河川の紹介動画を撮影しております。その際、アドバイザーとして参加してもらっている京都出身の谷口舞さんにご出演いただきました。谷口舞さんは、がまかつのフィールドテスター、タックルインジャパンのフィールドテスター、サンライン・フィールドスタッフをされている方です。

①-ii. 友釣り・アユルアーの風景を動画撮影



アユルアー実態調査の際、各漁協が遊漁者に案内しているスポットの動画撮影。

【動画の良さ】

- ・川の波立ちや周辺環境の臨場感が伝わる
- ・実際に釣っている様子を動画で見せることで「その場所で釣ること」をイメージしやすい
- ・釣りテスター出演でイメージアップ



上桂川漁協、賀茂川漁協、美山漁協では、本事業にアドバイザーとして参加している、京都出身の谷口舞さんが出演。

谷口舞（やぐちまい）
がまかつフィールドプレイヤー
TACKLE in JAPANフィールドテスター
サンラインフィールドスタッフ



木津川漁協では「木津川アユイング教室」で撮影した素材を主に活用。

木森直樹（きもりなおき）
ダイワフィールドテスター

●三つ目に、アユルアーの体験会を開催しております。京都産業大学の鈴木ゼミの生徒さんたちに参加いただき、京都賀茂川漁協の鴨川デルタというエリアでアユルアーの体験をしていただきました。鈴木ゼミの生徒さんたちは、アユを通じて地域活性化することをテーマにした取り組みをされているゼミで、実際にアユ釣りを体験することで、さらにアユに対する理解を深めていく機会を作っています。その際、生徒さんたちが釣ったアユをおとりにして谷口舞さんに友釣りの実演をしていただきました。

①-iii. アユルアーの体験会開催（京都産業大学 鈴木ゼミ）



アユを通じて地域活性化することをテーマにしてきた京都産業大学現代社会学部鈴木ゼミ生が、アユのルアー釣りを体験。

開催日 : 2025年8月27日 (水)
 場所 : 鴨川デルタ (賀茂川漁協管内)
 鈴木ゼミ生 : 10名
 講師 : 賀茂川漁協 澤組会長
 アドバイザー : 谷口舞
 運営 : アドバイザー 齊藤宏和
 取材 : KBS京都テレビ「きょうとDays」

鈴木ゼミ生がアユルアーで釣り上げたアユをおとりにして、谷口舞さんが友釣りの実演。

アユ釣り体験を通じて、アユに対する理解をさらに深めてもらう機会となりました。

①-iv. 鈴木ゼミ生と「鮎」をテーマにワークショップを開催



鴨川デルタでのアユルアー体験会を経て、京都産業大学社会学部鈴木ゼミ生と漁協の若手組合員等がワークショップスタイルで意見交換。

開催日 : 2025年11月20日 (木)
 場所 : 京都産業大学
 鈴木ゼミ生 : 17名
 漁協関係者 : 10名
 アドバイザー : 2名

【鈴木ゼミ生の声】
川を楽しむために必要なこと
 「川を楽しむやすい、浅瀬で安全な場所を伝える」
 「どんな魚がいるのか？川の違いを知ること」
 「川の歴史を伝えるガイドが必要」

釣り人や鮎を食べる人を増やすために必要なこと
 「子どもの時に体験が必要」
 「鮎釣りのハードルを低くする」
 「学園祭での販売」
 「SNSでの発信」

●次に、鈴木ゼミ生たちとアユをテーマにワークショップを開催しました。

アユルアーの体験会を経て、京都の漁協の若手組合員等とワークショップスタイルで意見交換を行いました。生徒さんたちからいただいた声としては、川を楽しむために必要なこととして、川を楽しみやすい浅瀬で安全な場所を伝える、どんな魚がいるのか川の違いを知ること、川の歴史を伝えるガイドが必要、そういったご意見や、釣り人やアユを食べる人を増やすために必要なこととして、子どもの時の体験が必要ではないか、アユ釣りのハードルを低くする、学園祭での販売、SNS

での発信といったことが必要なのではないか、というご意見をいただいております。

●ここからは漁場管理の高度化を目指す取り組みです。

まず京都府内水面漁連のホームページをリニューアルしました。古いホームページはスマホで見るととても小さくなって見づらかったのですが、これを現場でも見やすい形のホームページにリニューアルしました。

古いホームページは月間PVが1500程度だったのですが、リニューアル後は月間PV2700くらいになって閲覧数は1.8倍ということで、いい数字になっていると思います。それに合わせて、各河川の紹介動画を編集したものを京都府内水面漁連のYouTubeチャンネルにアップロードしております。これにより内

水面漁連のホームページで各漁協の情報を見て、その川がどんな川かということ動画を視聴してもらえる

②-ii. YouTubeチャンネルの開設



アユルアー実態調査の際に撮影した動画は、京都府内水面漁業協同組合連合会のYouTubeチャンネルを開設して公開。

●これまでの説明は令和7年度に木津川漁協が単体で行った取り組みですが、今回のやるぞプロジェクトの中では、この遊漁券の仕組みを京都府内の他の漁協さんに横展開できないかということで、その仕組み作りを行いました。

具体的にはリニューアルしたホームページで券面のデザインを公募し、応募を受け付けてまして、そこから採用したデザインで令和8年度の遊漁券を製作するというプロセスをとっております。

ここに出しています4種類の遊漁券は実際に採用した遊漁券のデザインを掲載しております。

▼令和8年度の日券4種で、遊漁券デザインコンテスト開催

▼アユ日券
▼雑魚日券
▼アマゴ日券
▼雑魚ダム日券

<仕組みづくりのポイント>

- ・応募しやすく、採用後の処理を効率化するため、応募用のテンプレートを作成
- ・参加条件を、京都府内の作家さんに限定
- ・リニューアルした京都府内水面漁連HPで『遊漁券デザインコンテスト』を開催
- ・作品の応募フォームは、京都府内水面漁連HP内に設置
- ・採用した作家さんを京都府内水面漁連HPにて紹介し、その作家さんを応援する姿勢

13

③-ii. 鴨川納涼出展、鮎の美味しさを伝える

京都府内水面漁業協同組合と賀茂川漁業協同組合で鴨川納涼に出展。

天然アユの塩焼きの美味しさを多くの人に知ってもらい、同時に内水面漁連の活動について広報。

開催日 : 2025年8月2日・8月3日の2日間
来場者数 : 32,700人
応援スタッフ : 京都産業大学鈴木ゼミ生4名
アユの塩焼き : 585尾が完売

14

●二つ目に、鴨川納涼への出展です。アユの美味しさを伝えました。京都鴨川の三条大橋と四条大橋の間で、鴨川納涼というイベントが開催されており、京都府内水面漁連と賀茂川漁協さんとで出展し、天然アユの塩焼きを提供しました。それと同時に、内水面漁連の活動についての広報も行っております。天然のアユ美味しさを知ってもらう人を増やすことは、ひいてはアユ釣りの人口を増やしていくことに繋がると考えて取り組みました。

●三つ目として、地域FM局の京都三条ラジオカフェに出演しました。

アユの魅力をテーマに京都産業大学の鈴木ゼミ生の方々とのワークショップを経て、賀茂川漁協の澤組合長、谷口舞さん、鈴木ゼミ生の方々の対談を一般公開するという取り組みをしております。

③-iii. 鈴木ゼミ生とあゆの魅力をテーマに三条ラジオカフェ出演

ワークショップを経て、京都産業大学現代社会学部鈴木ゼミ生達が、ラジオ出演にてアユの魅力をテーマに賀茂川漁協澤組合長と谷口舞さんと対談。

企画の目的は、アユに関する対談を一般公開することと、フィッシングショー-OSAKA2025への出展のお知らせをすること。

アユに関する対談では、友釣りやアユルアーについて初心者にもわかりやすい説明を澤組合長がしています。

ラジオ局 : 三条ラジオカフェ
放送日 : 2026年1月8日

◀【ほっこりあゆ語り】
YouTubeで動画公開中

ほっこりあゆ語り

15

③-iv. フィッシングショー-OSAKA2026出展



フィッシングショー-OSAKA2026に初出展。昨年出展された三重県内水面漁業協同組合連合会様の事例を参考にして、今年度の取り組みを集大成するような企画内容にしました。

<テーマ>
京都府内におけるアユルアーの普及

<企画会議>
実施回数 : 3回

<開催概要>
開催日: 2月6日 業者商談日
2月7日・8日 一般公開日
会場 : インテックス大阪

※一般公開日の来場者数 36,390名

<成果>
アンケートの回答数 1,220件
パンフレットの配布数 1,300枚以上



16

●最後の取り組みでフィッシングショー大阪2026に出展しました。

昨年出展された三重県内水面漁連さんの事例を参考にさせていただき、三重県の齊藤さんにアドバイザーとして入っていただいて、今年度の京都府の取り組みを集大成するような形で企画をいたしました。

テーマは京都府内におけるアユルアーの普及。成果は、アンケートの回答数が1220件、パンフレットの配布数が1300枚以上ということで、いい結果になったと思います。

●展示のメインはこの垂れ幕です。京都府の地図を大きく出して、どこの河川をどの漁協が管理してるのか、どこの漁協がアユルアーOKにしてるのかというマークも付けて広報活動をしました。

その隣にある沢山のルアーのディスプレイは、各メーカー様にお声掛けさせていただいて、展示用のサンプルをお預かりして並べました。自由に触ってもらうことで、アユルアーがどんなものを体験してもらえる場として展示しました。

アンケートは抽選会と合わせて実施しており、アンケートに回答するとオリジナル京アユステッカーをプレゼントしました。抽選くじの景品はメーカーさんから提供していただいた分と、京都の各漁協さんに遊漁券の優待券を景品として出させていただきました。

▼フィッシングショーの展示内容



<展示内容>
・漁協マップの壁掛け
・漁協マップのパンフレット配布
・各種パンフレット配布(漁協パンフなど)
・河川紹介動画をリピート再生
・多種多様なアユルアーを一堂に展示
・アユルアー向けライトスタイルのマネキン
・谷口舞の紹介パネル
・各漁業協同組合の活動パネル



17

▼アンケートと抽選会



▲アンケート、抽選会の様子



▲抽選会の景品



▲京アユステッカー

<スマホ対応のアンケートを実施>
・QRコードを読み込んでアンケート画面を表示
・アンケートのテーマは『アユルアー』

回答者には
・京アユステッカーをプレゼント
・遊漁券やアユルアー等が当たる抽選会参加

18

参考：アンケート集計結果①

『アユルアー未経験者で、アユのルアー釣りをしてみたい人』の傾向

年齢層	男性		女性		回答しない	総計
	人数	世代別構成比	人数	世代別構成比		
10代以下	44	70%	17	27%	2	63
20代	73	67%	35	32%	1	109
30代	125	70%	50	28%	3	178
40代	168	72%	64	28%		232
50代	165	84%	31	16%	1	197
60代	27	87%	4	13%		31
70代以上	3	100%	0	0%		3
総計	605	74%	201	25%	7	813

全体的には40代を中心とした30代～50代の人が多い傾向だが、40代以下になると、アユルアー興味を持っている女性の比率が高くなる

19

参考：アンケート集計結果②

質問：今までアユルアー釣りをしなかった理由を教えてください。複数選択可
※アユルアー未経験者且つアユのルアー釣りをしてみたい方のみ回答

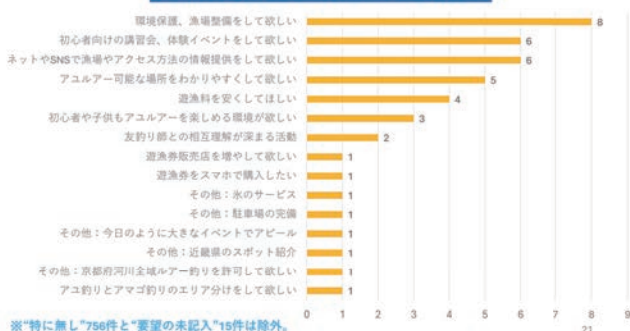
(興味はあるが) 今までアユのルアー釣りをしなかった理由



参考：アンケート集計結果③

質問：アユのルアー釣りについて、京都府の漁協に希望することはありますか？
※アユルアー未経験者且つアユのルアー釣りをしてみたい方のみ回答

アユのルアー釣りに関して、京都府の漁協に希望すること



※“特になし”756件と“要望の未記入”15件は除外。

21

参考：アンケート集計結果④

質問：アユのルアー釣りについて、京都府の漁協に希望することはありますか？
※アユルアーの経験がある方のみ回答

アユのルアー釣りに関して、京都府の漁協に要望すること



※“特になし”262件と“要望の未記入”9件は除外。

22

●アンケートの集計結果です。

年齢層は、40代を中心とした30代から50代に年齢層が固まっていますが、40代以下になるとアユルアーに興味を持つ女性の比率が高くなるという参考になるデータが出ております。

これまでアユルアー釣りをしなかった理由については、釣り方や必要な道具が分からないというのが圧倒的に一番多く、次にアユルアーを使える漁場が分からないという回答が大半でした。鼻カン仕掛けのことや基本的なところが分からなくて、つまずいてる人はかなり多いんじゃないかなという気付きとなりました。

アユルアー経験者に対してアユルアーをする時に重視することを質問したところ、アユの引きの強さやゲーム性を楽しみたいという回答が圧倒的に多くて、アユ釣りそのものの楽しさを求めている傾向が見て取れました。

漁協への希望としては、アユルアーができる釣り場をもっとアピールしてほしい、アユルアーができるエリアを拡大してほしいという声が多いです。これを見て、漁協側の情報発信が足りてないんだなという印象を持ちました。

3. 今後の展望

- ①遊漁者に案内できるスポットの数を増やす
- ②河川紹介動画の撮影（今回撮影していない漁協）
- ③デジタルマップの情報充実
- ④AI対策を視野に入れた内水面漁連HPのSEO対策
- ⑤フィッシングショーOSAKA2027出展

23

●今後の展望として、遊漁者に案内できるスポットの数を増やす、河川紹介の動画を撮影、デジタルマップの情報充実、AI対策を視野に入れた内水面漁連ホームページのSEO対策などを挙げています。SEO対策については、ChatGPTなどのAIに質問を投げかけた際、情報が載っていないとかなりデタラメな回答をされるというのを目の当たりにしました。今後、AIの回答を信じる人が増えることを見据え、一次情報としてアユルアーに関する情報を明示するというのは、かなり大事なことになるんじゃないかなと考え、京都府

では今後の取り組みとして挙げていきたいなと思っております。

以上、ありがとうございました。

～質疑応答～

藤池（長野県漁連）：

長野県の藤池です。現在の京都府内漁連さんのウェブページは結構テキストベースでしっかり作られているなという印象を持ちましたので、基本的にこちらのページからの情報抽出というのは、だんだん安定してくるんだろうと印象を持ちました。また、現在、ドメイン名に kyoto-naisuimen.jp というドメインが使われていると思いますが、これは確か漁協さんでも一般企業用の登録ドメインの or.jp を使えると思うので、このドメインを取得して企業ドメインとして登録すると、サイトの信頼性が上がってAIが読み込みやすくなるんじゃないかなと思います。

石井（京都府内漁連）：

なるほど。一次情報、それが正しいというか、確かなる一次情報としてAIの方が認識してくれやすいという話ですか？

藤池：

評価がしやすくなるかなっていう感覚です。

石井：

ありがとうございます。そこまでちょっと、その時点では視野が及んでおりませんでした。

青森県内水面漁業協同組合連合会

発表者：事務局 古内 由美子

令和8年3月4日
青森県内水面漁業協同組合連合会

**令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業
報告会**

**岩木川における特設釣り場（C&R区）の開設に向けて
～漁協活性化を目指したモデルプランの創出～**

1

●青森県内水面漁連の古内です。よろしくお願ひします。

今年度、みんなでやるぞ内水面事業を活用し、岩木川の支流である相馬川を舞台に、県内初となるキャッチ・アンド・リリースの特設釣り場の開設に向けて準備を行いましたので、報告いたします。

**はじめに
青森県における内水面漁協の現状について**

- ・高齢化による組合員の減少
- ・釣り人減少による収入減
- ・マンパワー不足

↓

漁協経営が年々困難に・・・
元気な漁協が減少し、漁場管理・環境保全の活動が衰退・・・

★でも、魅力的な手つかずの自然が多く残されている！！

年度	組合員数 (人)	共通遊漁券売上金額 (万円)
H28	3,750	480
H29	3,750	480
H30	3,750	480
R1	3,750	480
R2	3,750	480
R3	3,750	480
R4	3,750	480
R5	3,750	480
R6	3,750	480
R7	3,750	480

2

●まず初めに、青森県における内水面漁業の現状についてお話ししたいと思います。

こちらのグラフは、当会で把握している会員漁協の組合員数の推移と、県内共通遊漁券の売上金額の推移を示しております。組合員数は、コロナウイルスや高齢化の影響で令和2年から徐々に減少傾向にあるほか、遊漁券の売上は、大雨の多発や、クマの出現の影響もあって、

ここ数年は著しく減少しています。全国共通の状況だとは思いますが、組合員や釣り人の減少による収入の減少は、漁協の経営を年々厳しいものにしていきます。

●また、県内の多くの漁協は、事務局として職員を置くことがありません。新たな取り組みもできません。

マンパワー不足で漁場管理などの組合活動が困難になってきているような状況です。そのような状況ではありますけれども、青森県には、人の手が入っていない自然豊かな川が多く残されておりますので、それを観光資源としてのポテンシャルを十分持っていると感じまして、

みんなやる事業の活用について

背景・目的：・組織運営上のマンパワーが限られており、事務職員や外部支援人材を十分確保できていない漁協が多く、**新たな取組が進みにくい。**
→川釣り環境を資源として活かし、**釣り人口の拡大**と**組合活動の再活性化**を図る。

方 法：・県内初のC&R特設釣り場を設置
・コーディネーターの設置、協力者の発掘
・効果的な情報発信を検討
→プレミアムな釣り体験を与える**完全予約制・区間貸切型**の釣り場。手つかずの自然環境。
→**モデルプランを創出**し、県内漁協へ**波及**。

3

川釣りを軸とした漁協の活性化はできないかと検討してきました。

モデル地区として、まずは岩木川

岩木川：青森県西部の日本海側に位置し、その源は青森・秋田県境の白神山地に発し、平川、十川、旧十川等の支川を合わせて津軽平野を貫流し、十三湖に至り日本海に注ぐ一級河川。
 ※流域面積：2,540km²
 ※幹川流路延長：102km

組合員：153名（令和8年2月末現在）

ヤマメ稚魚放流 岩木川漁協より サクラマス産卵床造成 岩木川漁協より 岩木川流域図 国土交通省HPより

●次に、事業のモデル地区として、岩木川を選んだ経緯を説明します。

岩木川を管理している岩木川漁協は、県内でも遊漁券売上高の高い漁協の一つです。稚魚放流や産卵床造成などの漁場管理だけではなく、岩木川の歴史や組合活動を次世代に継承していきたいと、様々な取り組みをしています。

しかし、ここ数年は遊漁期間中に災害級の大雨が続いたり、大雨が過ぎても、

本流ではダムの影響で、遊漁期間中濁りが取れないことがあり、遊漁ができない日が続きました。そんな状況で遊漁者減少がますます拍車がかかりまして、漁協の経営は今、危機的状況になっています。

そんな中、村上組合長の方から、岩木川で人工物に影響を受けない場所で特別な釣り場を作ることではできないだろうか、とご相談を受けまして、事業のモデル地区とすることを理事会で決定し、事業を開催することとなりました。

次に、背景と目的です。当会を含め、漁協のマンパワーが限られており、新たな取り組みに挑戦できる状態ではありません。そこで釣り人口の拡大と組合活動の再活性化を目指すために事業を活用させていただきました。

方法として、県内初のキャッチ・アンド・リリースの特設釣り場を開設すること。で、その開設に向けてコーディネーターを設置。協力者の発掘をしながら準備を進めました。効果的な情報発信として、ホームページ、SNSの活用、自治体、観光協会への協力要請を計画しました。

この特設釣り場では、手付かずの自然の中で、自分だけの特別な時間を過ごせる空間を提供したいと考えております。そのために、完全予約制で、区画貸切型の釣り場とすることにしました。今回の事業を通して、漁協活性化のモデルプランとなる成功事例を作り、県内の漁協へ波及することを目指しております。

●これは参考ですが、少し古いのですが漁協さんの漁場マップです。

ヤマメ、イワナ、アユなどの魚種を主体に遊漁を行っております。令和6年からはサクラマスの遊漁も可能となっております。

岩木川漁場マップ

岩木川漁協HPより

●次に事業スケジュールについてです。

事業スケジュールはこのようになっております。主に検討会を開催しております。今年は特設釣り場の開設に向けた準備の年と位置づけました。オープンは今和8年5月の中旬を予定し、着々と準備を進めております。

R7年度事業スケジュールについて

- 7月 ・第1回検討会
- 8月 ・漁協、釣具店等への聴き取り調査（実態把握調査）
- 10月 ・特設釣り場設置委員の立ち上げ、協力者の掘り起こし
- ・第2回検討会
- ・放流魚の手配確認
- ・駐車場、看板設置場所等の検討
- 11月 ・打合せ
- ・漁協組合員向け説明会
- ・収益試算
- ・情報発信検討
- 3月 ・行使規則、遊漁規則の変更
- ・看板、ポスターの検討
- ・HP作成
- ・第3回検討会


※特設釣り場オープンはR8年5月を予定

6

1. 特設釣り場設置準備委員会の設置


メンバーについて

【コーディネーター】




内水試OB
フィッシングガイド

【準備委員】※漁協組合員




組合長 漁協事務員 再生に向けて再度組合員 全国釣り歩き 釣り大好き 自然学校経営 18歳ホープ

【支援員】



県内水面漁連



7

●特設釣り場を設置するにあたって方向性を協議するためにも、まずは準備委員会を設置しました。

メンバーはコーディネーター2名、この方々は内水面研究所の所長も務められた内水試OBの方と、県内でフィッシングガイドを務めている方です。

準備委員には漁協組合員7名。若い世代の組合員が積極的に参加して、最年少は18歳となります。支援員は6名。

今後、運営スタッフとして支援いただく委員外の釣り人の皆さんです。そして、県水産振興課の小泉さん、内水面漁連の古内となります。そのほかに、県の方や関係各所の協力を得ながら、より良い釣り場を作るために協議を進めております。

●準備委員全員による検討会を開催して、スケジュール、担当、運営方法などを決定してきました。

委員の皆さんは多忙な方が多くて、検討会までは県の担当者の小泉さんと古内とコーディネーターによるメールでの情報共有。そのメールの中で、また担当者の方によって色々な提案をしていただき、電話やメールで意見交換をして、仮の決定案を持って検討会に臨んで決定していくという形を取ってきました。

対面での全員集合という会議は多くありませんでしたが、集まった時には熱い議論を机上や現場で重ねてきました。

2. 検討会

- R7. 7.23 第1回
- R7.10.25 第2回
- R7.11.21 打合せ
- R8. 3.7 第3回予定




8

3. 漁協組合員向け説明会



岩木川漁協
『特設釣り場設置に係る説明会』

日時: 令和7年11月22日(土)
13:00~

場所: 藤崎町文化センター
3階多目的ホール

【組合員からの主な意見】

- ・ 収支に不安がある。
→ 遊漁料金を見直し
- ・ エリアを下流に拡大したらどうか。
→ 次年度以降検討

●特設釣り場の概要がある程度まとまった段階となった11月に、岩木川漁協の組合員さんを対象にした説明会を開催いたしました。

そこで出された主な意見としましては、釣り場の収支に不安があるのか、補助金終了後も漁協でちゃんと運営しているような収支のシミュレーションをしてほしいとか、エリアを下流にも拡大したらどうなるのか、という発言がありました。

した。

今回の取り組みに対する期待の声も多く、漁協の活性化を心に秘めている組合員の方もいらっしゃるということを感じることができました。

●次に、準備員会で議論を重ね、検討した特設釣り場の概要について報告いたします。

今こちらに出ているのは今作成中のパンフレットの一部分となっております。

令和8年春のオープンを目指しており、期間は5月中旬から9月末を予定しています。県の漁業調整規則は4月1日から9月30日までとなっておりますが、4月はまだ雪も多く、雪解けの影響もあるため、5月中旬からの予定をしております。

4. 特設釣り場について (予定)



- ・ 期間は、5月中旬～9月末
- ・ 完全予約制・区間貸切型のキャッチ&リリース区間
- ・ 全長1.5kmを3区画に分け、各区画1組限定
- ・ 午前と午後の二部制で料金3,000円/人
- ・ 姿の美しいイワナやヤマメの大型魚を集中放流
- ・ ルアー、フライ及びテンカラによる釣りに限る
- ・ 針はシングル、バーブレスフックに限る
- ・ トレーラー、フロントフック、餌釣りは禁止

設定場所は岩木川支流の相馬川の相内(あいない)地区というところに、全長1.5kmの完全予約制・区間貸し切り型のキャッチ・アンド・リリース区を設けるといふものです。釣り場のルールは今後確定次第、ポスターやチラシ、ホームページ等で周知していく予定です。

4. 特設釣り場について (予定)

- 【遊漁券の販売方法】**
- ・ オンライン販売 (事前予約・決済システム)
 - ・ 漁協事務所での販売
- 【各区画の特徴】**
- A区画: アクセス良好で釣りやすいエリア
 - B区画: 地形変化にとんだエリア
 - C区画: 最上流部に堰堤、大型魚を狙えるエリア
- 【管理体制】**
- ・ 監視員によるパトロール、環境維持管理
 - ・ 監視カメラの設置を検討
 - ・ クマ対策→クマスプレーの貸し出しを検討
- 【組合員への配慮】**
- ・ 組合活動への参加等による割引制度を検討



●遊漁券の販売方法については、事前予約制として決済システムでのオンライン販売を予定しているほか、漁協事務所での紙による販売も想定しています。予約の管理方法については今後検討会で協議して、利用者に不利益が出ないようにしていきたいと思ひます。

3区画に分けた釣り場の特徴ですが、下流側からA、B、Cと区画して、様々な釣り人のニーズに対応できるよう配慮

した設定としております。

釣り場の管理体制は、監視員による巡回のほか、監視カメラの設置やドローンによる監視なども議論されている最中です。この地区はクマが出ることから、クマスプレーを有料で貸し出すことも検討中です。

5. C&R区、禁漁区の設定について



- 設定した特設釣り場の上流域は、**種川**として利用
→C&R区と禁漁区の設定により、溪流魚資源を増やし、放流魚に頼らない釣り場の造成と**川全体の溪流魚資源を造成**
- **河川環境の持続的な保護**
→自生エリアの負担軽減、乱獲・密漁・不法投棄・外来種の侵入を抑制

12

アに釣り人を集めることができ、源流域など貴重な自生エリアへの負担を軽減することにつながることもできます。また、キャッチ・アンド・リリースの徹底により、乱獲を防ぎ、豊かな魚影の維持につながる効果を見込んでおります。そのほか、監視作業に伴う密漁や不法投棄の抑制効果、放流魚の厳格な管理によって、外来種の進入を遮断する効果も期待できます。このような点からも、今回の取り組みは、持続的な環境保護の観点においても、重要な取り組みだと考えております。

●行使規則、遊漁規則の変更手続きについて。キャッチ・アンド・リリース区の設定や、禁漁区の設定には、事務手続きも必要となることから、県の指導を受けながら、コーディネーターと古内が漁協の事務支援をして、漁協の行使規則と遊漁規則、遊漁規則の変更手続きをいたしました。

6. 行使規則、遊漁規則の変更手続き

県の指導により
事務手続きを実施



13

7. その他

【県内遊漁に係る聴き取り調査】

遊漁者の満足度向上に向けた、遊漁券販売実態調査

- 課題：現地調査が必要。
調査結果の**見える化が必要**。



- 対応方針：次年度以降、デジタルマップ作成のための情報収集を進める。

【情報発信強化に向けて】

- ・ホームページ、SNSの作成・活用
- ・県観光情報サイトへの掲載に向けた調整

14

●そのほか、以前から当会に釣り人から「ネットで公表している遊漁券販売店を訪れたが店がわからず遊漁券が買えない。どこで買えばいいのか？」といったお問い合わせが度々ありまして、県内釣り人の客離れにもつながるのではないかと懸念されましたので、まずは県内の実態調査をしようということで、電話による聞き取り調査を行っております。実態調査の結果は現在取りまとめ中なんです

が、やはり現地調査が必要であるということ、実態の見える化が必要だと感じております。

そこで次年度以降も、デジタルマップの作成に向けた情報収集を継続する予定としております。また、開設する特設釣り場の情報発信は非常に重要なことと考えています。そこでホームページの作成やSNSによる積極的な情報発信をする準備を進めています。また年間500万アクセスがある県観光情報サイトへの掲載に向けた関係者との調整も行っているところです。

●まとめです。

令和7年度の結果として、令和8年の春にオープン予定の特設釣り場の設置に向けて、着々と準備は進んでおります。また、議論を重ねていく中で、準備委員の自発的な提案も生まれ、チームの結束が深まってきました。事業に取り組んだ結果、あ、効果として、良くも悪くも漁協の活動体制の弱さが浮き彫りとなり、事業の趣旨である『みんなでやるぞ』の精神が芽生え、良い方向に進んでいるという印象です。

また、若い世代の組合員の組合活動に対する関心が高まっている印象もあります。新しい風が吹いているな、そんな状況となっております。

課題として監視体制の決定や、どのように漁協で運営していくのか検討する必要がありますが、今まで通り詳細をみんなで検討し、決定していきます。反省としては漁協内部の情報共有体制が甘く、当初計画していたスケジュール通りに物事が進みませんでした。計画、担当、担当を決めた後は漁協にお任せしていたんですけども、何もやっていないことが判明し、ひたすらお尻を叩いて事業を進める形となってしまいました。

まとめ

【結果】


- ・特設釣り場オープンに向け、着々と準備が進んでいる。
- ・特設釣り場設置準備委員の結束が深まった。

【効果】

- ・漁協の活動体制の弱さが浮き彫りとなり、“みんなでやるぞ！”の精神が芽生えた。
- ・若い世代の組合員の、組合活動に対する関心が高まってきた。

【課題】

- ・監視体制
- ・漁協の自走支援



【反省点】

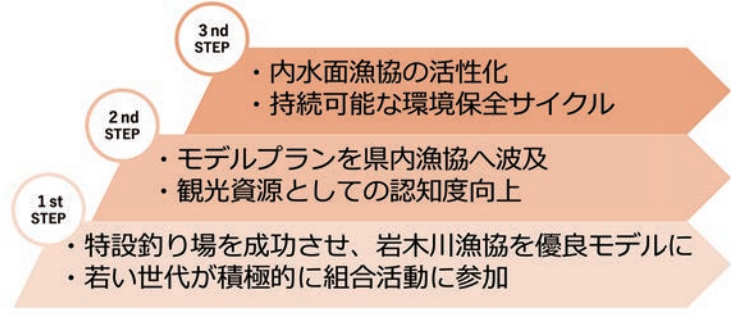
- ・スケジュールの後ろ倒し

15

●最後になりますが、事業実施後の将来像についてです。

まずファーストステップとして、今回の特設釣り場を成功させる。赤字にならない釣り場運営をみんなで検討し続けます。積極的に組合活動に参加する若い世代へ声掛けをとにかく継続して行って、支援員を増やしていきます。次のステップとして、成功例として会員漁協に周知し、希望する漁協には事業支援をします。

今後の展望



16

併せて県内の自然豊かな川での遊漁を観光資源としてアピールしながら、内水面漁業を盛り上げていきたいと思えます。

そして、最終ステップとして、青森県の内水面漁協の活性化と、遊漁などによる収益を環境整備や監視にかかる費用に回し、在来魚の保護と再生につなげる保全サイクルが確立されることを期待しております。今後も関係者が一丸となって、計画、実行、評価、改善のサイクルを繰り返しながら、目指す将来像の実現に向けて頑張っていきたいと思えます。

以上になります。ご清聴ありがとうございました。

～質疑応答～

齋藤（三重県内漁連）：

三重県の齋藤です。質問させていただきます。今の発表の取り組みは、多分全国的にやってみたい漁協さんがかなり多い取り組みじゃないかと思えました。ただその皆さんが、あまりこれを実際にやれてない

理由というのが、河川の占有にあたって、要は占有になるという判断をされるのがちょっとおっかなくて、それで、結構皆さん手を出していない部分が多いんじゃないかと思うのですね。この河川の中の特定の場所を、特定の人だけに貸し出すような形をとることを進めるにあたり、県や漁場管理委員会がどのような判断をしてOKを出してくれたのか興味あるところの1つです。

もう1つは、こういう形で先ほどの綺麗な感じの瀬を開くと、その瀬を使っていた方からクレームが出そうな話であって。その場所は、現状で釣りをされている方が多いところから選んだのか、それとも釣りの区間として未利用だったので、未利用のところに魚を放してより価値を高めたいという方針なのか？場所を選んだ方針について、その2点、お聞きしたいと思います。

古内（青森県内漁連）：

まず、さっきの漁場管理委員会や県の規則変更に関しての件ですが、3年前から、こういう風にしたい！ということを通い詰めて説明させていただいて、たまたまで多分運がよかったのかかもしれませんが、担当者の方が、その漁協の経営状況が悪いことをよく理解されている方で、何かやるんだったらやってみようってということで、許可をいただきました。その方が今、漁場管理委員会に事務局長やられてますので、その方にきちんとこういう計画でやっていきたいんだ！ということの説明したところ承認をいただける、3月10日に最終承認が下りるんですけども、容認いただきました。これまでの3年間、きちんとして説明してここまでやっと来ました。次に、川を選んだ理由は、もともとはそんなに利用者がいない場所でした。でも、地元の人なら釣れる川ということで知られています。割と民家も周りに少ないですし、町内会の人や知り合いもいるので、使う場合には春の雪解けのあたりで事前に近隣住民に説明に歩くということはお話ししておりました。今まで使われていない良い川を大事に使ってください、という意味で解放するといった結論になりました。よろしかったでしょうか？

齋藤：

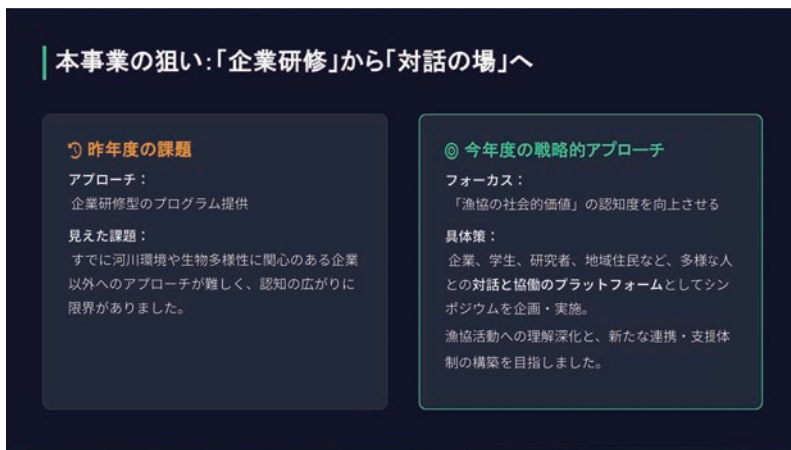
ありがとうございました。実際、先ほどお話ししたように、占有にされそうで怖いということを考えて動けない漁協さんが多い中で、こういう事例で実際にOKが出ていることを考えると、場合によっては、法令の部分で引っかかりそうなところを、今後は極力改正していってもらったほうが、各地の漁協さんの取り組みの幅が広がるのかと思うので、そうした点は水産庁さんのほうでもいろいろとこういった形の取り組みを有効に使えるように動いていただけたらありがたいと感じました。以上です。

宮城県内水面漁業協同組合連合会

発表者：コーディネーター 高山 遼輝



宮城県内水面漁連のコーディネーターの高山と申します。よろしくお願いいたします。



●令和6年度の宮城県内水面漁連の事業では、企業型研修プログラムについて実施いたしました。

これは、今までの漁協さんの活動であったり、そういったところを河川環境の維持や生物多様性というところに焦点を当てて、それを企業さんにプログラムとして提供し、それがまた新たな収益を生む形を作ればという目的で提案いたしました。

結果として、企業としてそういった活動に熱心なところにはすごく話がまとまって提案ができるのですが、それ以外の企業さんでは、なかなか漁協ってそもそも何やってるの？どういった活動してるの？、といった形で、なかなか漁協組合がどういうことをやってるかっていうのが分からない方々が非常に多かったことを課題と感じました。

そこで今年度は、漁協の価値や漁業協同組合というところがどういった活動をしているのか？ということ、地域住民や釣り人、企業の方々に知っていただく機会を創出するシンポジウムといった形を提案させていただきました。それで今回はシンポジウムを企画いたしました。

今年度事業の「当初計画」と「実績」

88
名の参加者

【当初計画】

シンポジウム2回(計30名) / フィールドワーク実施

【実績】

シンポジウム1回に集約 / フィールドワーク未実施

当初の計画からは変更が生じましたが、リソースを1回に集中させた結果、会場68名(満員御礼) + オンライン20名の爆発的な反響を獲得。

●当初、シンポジウムは2回計画し、それぞれ1回ずつが15名程度のプログラムを2回と、あとはその後に少人数のフィールドワークを計画しておりましたが、いろいろとスケジュールの都合であったりとかこちらの運営の問題がありまして、1回に集約する形になりました。結果です。会場で72名、オンラインで30名に参加いただいた会にすることができました。

会場での一般来場は55名の方に来場していただき、20代から60代の幅広い年齢層の方々に、かつ釣りのジャンルも溪流やアユであったり、河川には興味があるけど釣りはしたことがないといった方々に幅広く参加していただきました。

●漁協さん側も、県内17漁協のうちの5漁協の組合長さんにご出席いただき、実際に組合がどういった活動をしているのかお示ししていただきました。

県内5漁協の集結:現場との強力な連携

歴史的な対話の場へ

今回のシンポジウムの最大の成果の一つは、現場の最前線を知る 県内5つの漁協(計13名)が一堂に会したことです。釣り人や有識者、と直接対話し、漁協の現状紹介や未来のビジョンを共有する、これまでにない貴重な連携の場となりました。

ご参加いただいた漁業協同組合様

広瀬名取川 漁協

白石川 漁協

鳴瀬吉田川 漁協

花山 漁協

蔵王非出賣 漁協

当日の様子:白熱した3つのプログラム



第1部:漁協のリアル

担い手不足や環境変化など、各河川が直面する現場の厳しい課題を全体で共有。



第2部:新しい知見

「釣り人を客ではなく、パートナーに」研究者・NPO・発信者からの解決の糸口。



第3部:総合討論

会場全体を巻き込んだ意見交換。JTB様からは「観光連携」という新たな武器も。

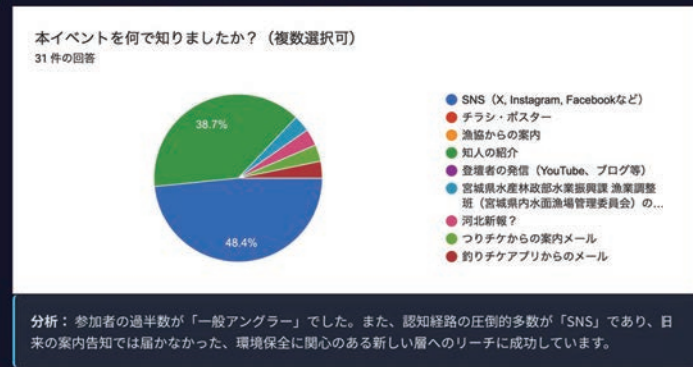
●第1部では漁協の組合長さんに登壇いただいて、現状についてであったりとか、どういった取り組みや活動をしているのかといったことを紹介いただきました。

第2部では、釣り人の代表といった形で、東北で活動されている釣り師で釣り系のSNSでフォロワーが3.5万人くらいいる方や、地域と漁協を繋ぐNPOで活動されている方、研究者の方をお招きして、実際に釣り人と地域・漁協ががどのように関わっていければいいのか?の問題のヒントとなるようなお話をいただきました。

第3部では、今までお話しいただいた方々全員登壇していただきながら、会場との質疑応答の形でいろいろとディスカッションをさせていただきながら進行させていただきました。第3部の冒頭では、(株)JTB様が取り組まれている地域と漁協の活動みを連携させる取り組みについてお話もいただきました。

第3部では、今までお話しいただいた方々全員登壇していただきながら、会場との質疑応答の形でいろいろとディスカッションをさせていただきながら進行させていただきました。第3部の冒頭では、(株)JTB様が取り組まれている地域と漁協の活動みを連携させる取り組みについてお話もいただきました。

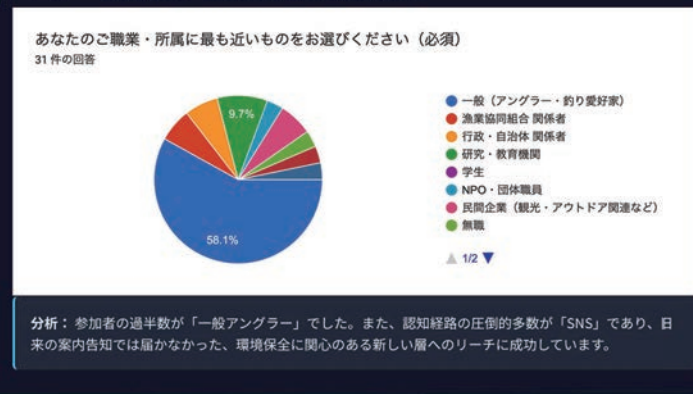
アンケート分析① 参加属性と認知経路



●これは来場者のアンケート結果です。意外だったのが、SNS 経由でこのイベントを知って来場された方が48%と非常に多く、ほぼ半数近い方々がSNS 経由で来られました。これに関しては、今まで漁業協同組合には関心があったけれども、なかなかポスターや漁協だけの広告ではなかなかアプローチできない層に繋がったのかと思っております。

参加いただいた方々の属性では、基本的にアングラーの方々が過半数を占めておりましたが、ほかにも様々な方面の方々に参加いただいたのかと思います。

アンケート分析① 参加属性と認知経路



●それぞれのパートに関する満足度では、皆様第2部の今後じゃあどういふうに漁協と関わっていけるのか？といった話のパートについて非常に高い満足度をいただいた結果になりました。

アンケート分析② 各プログラムの満足度（高評価率）



分析：「第2部（NPOや研究者の知見）」への評価が特に高く、参加した釣り人たちが単なる「遊漁」としてだけでなく、環境保全や持続可能な新しい川の関わり方に強い関心を持っていることが証明されました。

アンケート分析③ 漁協に対する意識変化の「二極化」

肯定と期待（重要だと感じた）

「現場の生の声を聞き、漁協活動の重要性を再認識した」「釣り客とのセッションができる場ができた」といった声が多数寄せられました。釣り人たちは、漁協との直接的な対話の場を強く求めていることが分かります。

厳しい指摘（変わらない）

一方で、「旧態然としている」「もっと釣り人目線が必要」と回答する層も一定数存在しました。しかし、これは単なる批判ではなく、「もっと漁協が変わってほしい、一緒に活動したい」という期待の裏返し（エール）であると捉えています。

●実際にアンケートでいろいろなお声掛けがありまして、漁協に対する認識がこのシンポジウムで変わったか？といったこともアンケートさせていただいたんですが、その結果としては、気づきや漁協の活動が重要だと感じられたといった意見があった一方で、漁協は何してんねん？みたいな激しいコメントもありました。ただ、それはやはりそれだけ川に対しての思い入れがあるので、そこをどう

にかしてほしい！というエールという形で捉えようという風に考えております。

●「現場のこと一番よく理解されている方の意向を伺うことができ、漁協の活動の重要性を感じられた」という声もありました。また、「こういうシンポジウムがあったことによって釣り人と漁協がセッションできる場になったことは大きな一歩だ」といろいろとお声がけをいただきました。

アンケート分析④ 参加者の「生の声」



現場のことを一番よく把握されている方のご意見を伺い、漁協の活動の重要性を感じました。

釣り客とのセッションができる場ができたこと

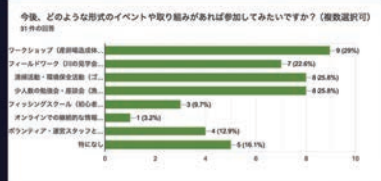
は大きな一歩です。

—アンケート自由記述より抜粋

アンケート分析⑤ 次のアクションへの高いモチベーション

アンケート結果から、参加者の行動意欲が非常に高いことが判明しました。

- ▶ 「清掃活動」や「産卵場造成ワークショップ」、「勉強会」への参加意欲が極めて高い。
- ▶ 多くのアングラーが「漁協と連携・情報交換したい」と回答。
- ▶ 彼らは単なる「お客様」ではなく、共に川を作る「プレイヤー」になりがっています。



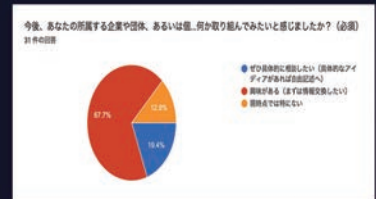
●では、この後どのような形で次のアクションをしていきたいですか？というアンケートをしました。それには、清掃活動や産卵床造成だったり、そういった漁協活動の何かお困りごとをちょっと手伝いたいって、という思いがある釣り人の方、参加者の方が非常に多かったところもあるので、これは単なる遊漁者を超えて、漁協への協力者となりうる可能性があると考えております。

●今後、イベント等があった場合に参加したいですか？といった質問についても、80%以上の方々が「前向きに参加したい」「連絡ください」といった形で声掛けいただきました。今年度当初は2回シンポジウムを実施して1回フィールドワークの計画でした、結果的にフィールドワークができなかった形になりました。来年度以降は今回の失敗を踏まえてしっかりと次なるアクションとして、フィールドワークの実施について落とし込んでいければと思っております。以上です。ありがとうございました。

今年度の総括と次年度への提案

計画変更を最大のチャンスに

今年度は「広く熱を集め、課題と仲間を可視化すること」に大成功しました。未実施となったフィールドワークは、むしろ次年度の強力な武器になります。今回獲得した「漁協と連携したい80名超の熱意ある名簿」をフル活用し、次年度こそ具体的なフィールドワーク（産卵場造成や清掃活動）を実施します。



NEXT ACTION

「語り合うフェーズ」から、産卵場造成や清掃活動など「行動するフェーズ（フィールドワーク）」へ。

次年度の具体的なアクションに向け、引き続きのご支援をお願いいたします。

～質疑応答～

岩下（事務局）：

私もシンポジウムに伺ってびっくりしたことは、宮城県には熱意のある釣り人の方々が沢山いる、これは大きな力だなと思いました。その力が今後どのように漁協さんと組んでいくべきかなんですけど、実際、漁協さん側の方はそれらの方々の手助けを望んでいるのか、もしくは、いや俺らだけでやるよとか、釣り人と漁協さんの温度差のようなものはありますか。

高山（宮城県内漁連）：

ありがとうございます。これは漁協さんによるのかと思います。もう何でもいいから手伝ってほしいという漁協さんもあれば、いや俺たちだけでやるからそんなにいらんよっていう漁協さんもあるので、そのうまく何をどのように手伝えるのか？ってところを引き出しながら、釣り人や地域外の方々をうまくマッチングできるような何かを作れたらと思っております。

岩下：

ありがとうございます。それぞれの漁協さんの個性っていうものをリサーチされるのもどうなのかと思ったところです。

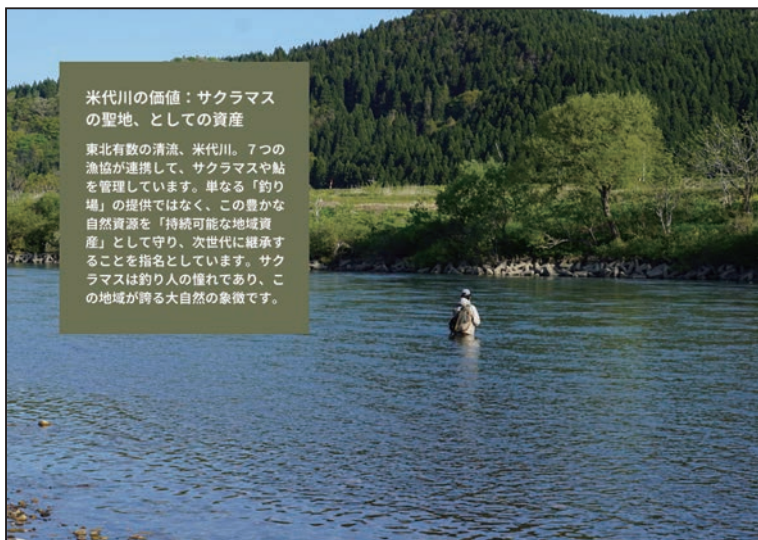
米代川水系サクラマス協議会

発表者：会長 湊屋 啓二●

コーディネーター 野宮 幸博○ 田中 俊生▲



私どもは秋田県米代川のサクラマス推進会でございます。今日はコーディネーター二人と私、会長の湊屋と申します。よろしくお願いいたします。

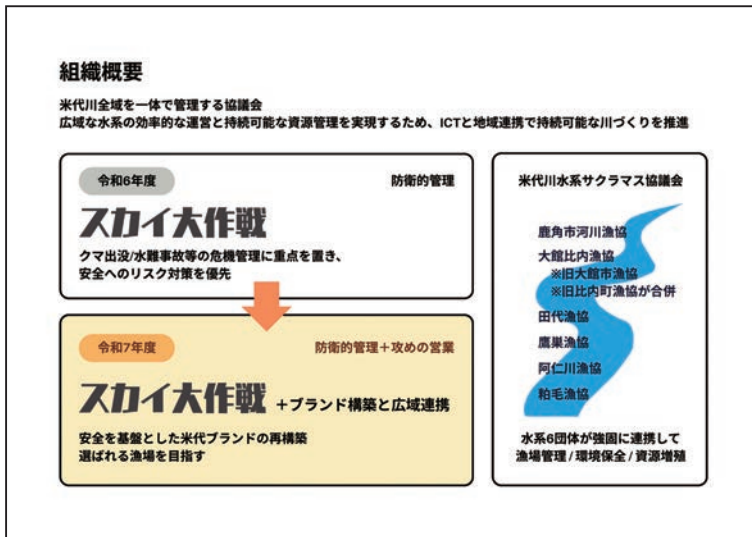


●米代川という川は、非常に全国から見ても魚の量、あるいはこの釣り人の憧れの川として、非常に私どもは価値が高い川ではないかなと思ってます。

そこで、このポスター作らせていただきました。「サクラマスに一番近い川、秋田 米代」。これを私どもキャッチコピーにして、秋田県の米代川に来るとサクラマスを釣れる確率はぐんと上がりますよと、「んだよね！」と秋田弁も入れて、「おもしろよねしろ」と。米代川に来ると面白い、楽しい釣りができますということで、今回こう

いったキャッチコピーも入れさせていただきました。

またこの米代川は、奥羽山脈からもうズドンと西に向かって日本海へ流れ出す。当然白神山地からの水も支流から入って、水質も非常にいいと、自慢のできる川ではないかなと思っております。これ見てもわかる通り、何かこれ絵だけ見ると、もうカナダかどこかで釣りしてるんじゃないか、本当に写真や映像で見ると素晴らしく映るんですよ。



●組織概要です。

私たちは米代川水系を一体で管理する協議会です。

スカイ大作戦では、これは私自身がクマに襲われた経験を生かして、スピーカー付きのドローンによって釣り人の皆様に注意喚起を促すのと、遊漁券を持たない遊漁者の漁業監視を行うという二つの目的で昨年の事業で実施したのですが、それに加えて今年度は、先ほどから青森さんの発表や他のところからもあったと思いますけど、やはり釣りというのは観光の意味合いが非常

にあるんじゃないかと考えました。

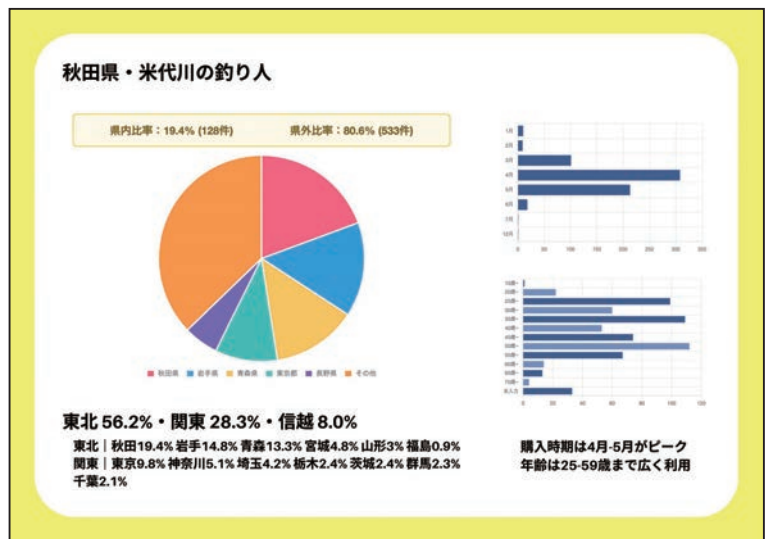
観光業と連携して、単に釣りを楽しむだけでなく、その地域そのもの、あるいはその川自体も楽しんでいただきたい。コアな釣り人だけでなく、例えばそこに奥様やお子様も連れてきて、自然の中での釣りとその川での自然体験を楽しんでいただきたい。そういったことで、今年は観光をキーテーマとして、入れさせていただきました。

昨年まで米代川水系サクラマス協議会7漁協あったんですけど、比内町漁協と大館市漁協が合併して、今年の1月1日からは6つの漁協になりました。消滅したわけではなく、体質改善とさらなる経営基盤の安定を狙って比内漁協と大館市漁協が合併しました。

●米代川っていうのは県外のお客様が多いのですね。

これを見ていただくとわかる通り、県内が約20%、県外が80%強ということで、私が漁業監視していた時には沖縄から来た方もおりましたね。

昨年直接私に電話がきまして、四国からサクラマス釣るまで帰りません、という方が車でやってきまして、何時間かかったって？、20時間かかったっていう。そういう強者が米代川に全国各地からおいでいただいております。



そういったことを分析してみますと、東北が5割強、関東が3割弱、去年は新潟や信越地方の方が約10%弱。そんな具合で、多くの皆様においでいただいていることが、このデータからもわかります。

●これは先ほど申しました昨年からやってくる「スカイ大作戦」です。後で出てまいります。今回はまた味付けを変えました。

ドローンによる密漁対策と漁業監視ですが、実は昨年春先の4月1日サクラマス解禁日に、東京町田市と埼玉県所沢市からサクラマス釣りにおいでになった方が流されて、残念ながら未だにお二人とも見つかっておりません。どちらの方も増水して危険な時に流されたようなんです。この事業が4月1日からスタートできれば、ドローンを飛ばして、そういったことも防げたんじゃないかと非常に残念に思っております。



●これは委員の皆様ですね、観光みたい感じで楽しんでいただいているお姿が写っています。

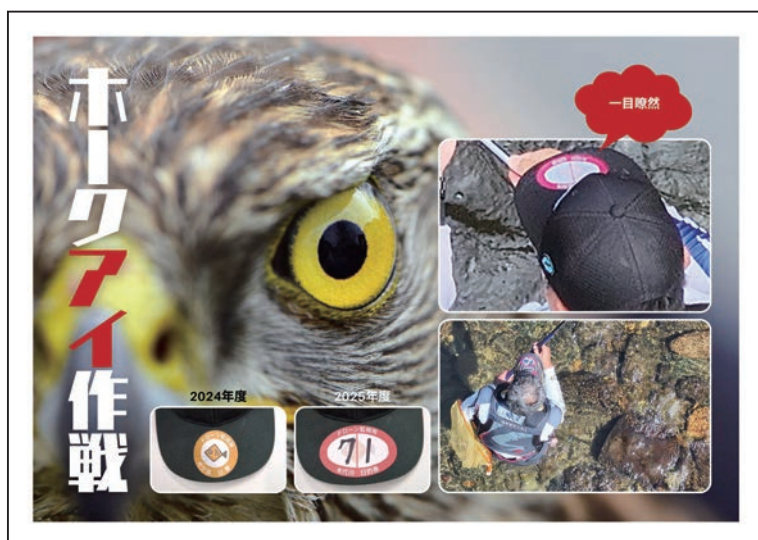
で、ドローンでこうして上空から写せば遊漁券もちゃんと写ります。昨年からのドローンではっきり見える遊漁券として、帽子のツバにつけるタイプを開発しました。今年度はなんと「スカイ大作戦」の中に「ホークアイ作戦」という特別ミッションが入りました。

●「ホークアイ」で、「鵜の目鷹の目」っていう、あ、鵜を入れちゃうと具合が悪いので、鵜は入れないで「鷹の目」だけを入れました。

この鷹の目って、ただ名前が変わっただけじゃないのです。100万円超えのドローンをレンタルで用意して、カメラ映像の解像度とスピーカーの音質を上げて、取り組みました。

これは一昨年の24年のシールですが、前回の発表の時に、日釣券はどうやって判別するんですか？と確か、そういったご質問・ご指摘がありました。

それに即対応するのが米代川です。もう昨年からの2025年度のタイプですね。サイズも大きくして、日釣券はここに何月何日と、お店の方に書いていただくようにして、はっきりこのドローンで確認した日釣権が何日のものかが分かるようになってます。



私もかなり頭、クマにやられてから頭薄くなったんですけど、ドローンで見えますんでね、ぜひ薄くなってきた方は帽子を被ることをお勧めいたします。

スカイ大作戦の進化

「遊ばれる漁場」の絶対条件は安全性
ネガティブ要因（クマや事故）を解消して、付加価値へ

自然の脅威に備える

<p>クマ対策・情報周知</p> <p>リアルタイムクマ出没マップ 秋田県オープンデータ連携</p> <p>X (旧twitter) 自動発信 出没情報を通知</p> <p>行動変容の促進 危険エリアの回避を促して リスクを未然に防止</p>	<p>視認性改善</p> <p>視認性の高い識別シール 現場確認の効率化</p> <p>デザイン刷新 フォント拡大</p> <p>ホークアイ作戦</p>	<p>ドローン遠隔監視</p> <p>スピーカー付きドローン 遠隔からの指導や監視</p> <p>遠隔監視体制 監視員の安全を確保しつつ 広範囲をカバー</p> <p>音声指導 不審者や危険行為への警告</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

釣りの間でドローン監視の情報が拡散。心理的抑止力が発生している。
体感では無券割合が50%→20%程度に低減。鹿角市・比内町では前期比3倍の遊漁券収入に。

●今申し上げたこの「ホークアイ作戦」。ドローンによる監視システムのシールのデザインを一新し、フォントも拡大してドローンからさらに見やすくして、地上の監視員が見た場合でも確認できるようなシールに改良しました。また、ドローンのレンタル業者さんに性能がいい機種を用意していただけないかお願いして、我々の要望にきっちり答えていただき、現在はスピーカー付きの高性能のドローンを使って監視をしております。

その結果、ドローンがやってくるぞと、釣り人の間でドローンの監視のことが広まって、我々の狙い通りの感じになってます。今日、せっかくコーディネーター来てますので、地元の監視員と一緒にドローン持ったコーディネーターも回っており、コーディネーターにそういった現場の声を紹介していただきます。

○皆さんこんにちは。サクラマス協議会のコーディネーターの野宮と申します。

まずは米代川の最上流部の鹿角魚協というところでドローンを飛ばしておりました。そこでは、1つの遊漁券売り場で24年度のワンシーズンで約600枚の券を売ったそうです。私が1年間分のシールですよって持っていったら、なんと昨年は一月足らずでその券が全部なくなっちゃいました。鹿角と比内の地域では例年の3倍くらいの売り上げが、ちょっと大袈裟かもしれないですけど、それくらい昨年は盛り上がり売れたそうです。

例えば、川の合流点とか監視員の方も川を渡って行けないんですね。合流点のあたりは深くて、お年寄りの監視員ばかりなんで危ないんです。川を横切っていかなきゃならない対岸に釣り人がいると、「ドローンでちょっと見てくれない？」「はいはい！」ってピョーッと飛ばしてくと、ものの数秒で券を持ってるか持ってないかを判別できる。

そして、そこにいたんですよ、やっぱり。堤防の下に車をヒュッと隠せるようなところがありまして、そこに車を隠し、釣り人もこっちから見えないところにいるんですよ。で、その釣り人をドローンで確認したら、背中に貼ってる日釣券を持ってたんですけど、日付ごまかしてたんですよ。それをバッチリ、ドローンで見つけて「あ、これ違いますよね？」ということで、そこから対岸まで何十分もかけてぐるーっと迂回しなきゃならないんで、橋から戻って、ぐるーっと別の道路に行ってまた別の支流入ってって、その無券者達3人に買ってもらったとか。

さらに、このドローンには赤外線機能がついていて、上空から赤外線で撮影すると動物や人が白く映るんですよ。なので、それこそ問題のクマ。上空からから見て、「あ、クマいないよ、大丈夫ですよ」と言うと、皆もそれだけで安心して釣りができる。やはり鹿角・比内でも沢山のクマが出てるエリアで皆が釣りをするんですよ。そういう所ってやはりいい漁場で釣れるんですね。皆そこに入りたいたいですよ。そんな形で現場ではとても喜ばれていて、本当にもう助かってますって話を沢山言われます。さっき会長が言った通り、やはり「ドローン飛んでくる！」って駆け込んで、券を買いに来るらしいですね。なので、飛ばされるとやめて逃げる人もいますよ。そういう抑止力にはなってるので、無券の釣り人に対して

は効果があると思っております。はい、現場からは以上です。

●はい、ご報告ありがとうございます。

いずれにしても地域の漁業監視員と遊漁券販売してるところからは大変に感謝されて実情が浮き彫りになっております。遊漁券の売り上げも、去年は鮎の天然遡上がすごかったんですよ。そういったことも当然売り上げが3倍に寄与していますが、一番大きな要因として、無券でやる人がかなりいなくなって、少なくなってきたと。「ドローンが飛んできてドロンした」という人もいたというご報告ありました。

●冒頭に、やはり川の漁協はそれだけでは役目果たしていると我々は言えないんじゃないか？米代っていうブランドを武器に、観光面と地域資源として、全国の皆さんに今後訴えていきたいところです。




それにはやはり地域のいろんな観光関係の、例えば観光協議会や観光連盟、様々なツーリズム、いろいろな団体さんがあって、今回はそれら全てにコーディネーターの皆さんが回らせていただきました。なんとか釣りとは観光で連携できないかの模索が今年度から始まったんです。



漁協としてそういった形でこの地域の価値の創出にも寄与していきたいという考えで取り組みました。

米代川の価値の再発掘を行いました

地元にとって米代川は、あることが当たり前になっているが
じつは「当たり前ではない」稀有な存在

 <p>東北では珍しい東西の流れ</p> <ul style="list-style-type: none">岩手県境の奥羽山脈に源を発し、ほぼ東から西へと秋田県を横断し、日本海に注ぎますこの流れ方によって、広い流域と豊かな支流をもち、多様な生態系と水量につながっています	 <p>天然鮎の遡上が東北随一</p> <ul style="list-style-type: none">広い流域面積と良好な川相により日本海から遡上する天然鮎の量と質が圧倒的全国の河川の天然アユの味・姿を審査する「清流めぐり利き鮎会」で、過去に準グランプリを獲得するなど、全国トップクラスの評価	 <p>幻の魚「サクラマス」釣りの聖地</p> <ul style="list-style-type: none">サクラマスの良質な遡上地として全国的に非常に有名です春先の解禁時には、大型を狙う熱心な釣り人が日本各地から集まる、まさに「聖地」となっています
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

●それで、先ほど言ったことがまた出てくるのですが、我々のように地元にいるとね、米代川って魚がすごい釣れていい川だね、くらいしか思っていないんですが、他県の方からは素晴らしい川だと称賛されております。解禁日一日だけで100本ものサクラマスが必ず上がるんですよ。多い年だと年間1500本ぐらい釣り上げられております。

一昨年、悲しい事故があったんです。河口から60~70キロ地点に比内町の連合堰堤というところで、土地改良区が堰堤を改修することを、こうやりますと漁協に通告をせず、川の水を半分止めちゃったんです。そうしたらその堰堤の下に魚が沢山溜まるところで、死骸の数だけでもアユは1000匹は超えてたし、サクラマスだけでも100匹は死んでいたんです。それで、これは県の仕事でやったのだから、いや、これは事件じゃないですか？と申し入れをしました。ただ、たとえそのくらい死んでしまったとしても、影響がないぐらい魚が濃い川なんです。

天然アユについては、なんで米代のアユこんなに釣れるんだ？って水産研究所の坪井さんも言っていて、昨年秋田にお招きして講演いただいたんです。そうしたら、やはり遺伝的に非常に追いがいいアユなんだそうです。いわゆる目印が飛ぶっていう、かかった瞬間にバーンと2メートルも3メートルも目印が飛

んでいくような、そういった遺伝的な特性を持つてるアユ。これが米代のアユなんですっていう。坪井さんは全国各地の川のアユがどんな感じで友釣りで釣れてくるのかを研究されているそうで、そうした中でやはり米代のアユはダントツの特性を持つてることが判明して、我々も、なるほどやはりそういった科学的な根拠があったんだと初めてわかりました。



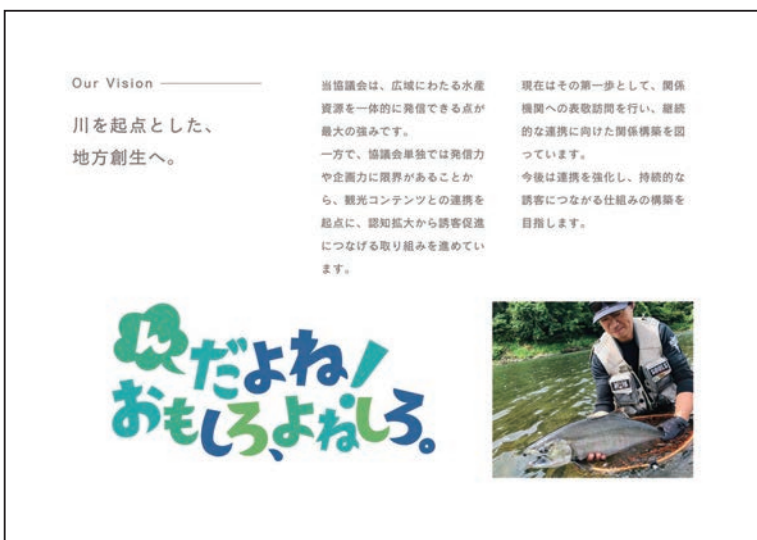
▲今会長が持っているこのポスター。こちらを各地の観光事務所、名前は後で出てきますが、皆さんの目に付くところに全部これを貼っていただきたい。あるいは道の駅ですね。道の駅も何箇所もありますから、道の駅さんにもお願いしています。我々は今日は秋田に帰るんですけど、帰りがけに有楽町の交通会館にある秋田県のアンテナショップにこのポスターの掲示をお願いしよう。そして、秋田の米代をもっともっと皆さんに楽しんでいただけるよう、お願いしていきたくと思っています。

●川を起点として、単に釣りを楽しむだけではなく、観光の一つとして、少々コンセプトと視点、枠組みを変えて取り組んでいきたいですね。

私自身も毎年、子供の対象の魚のつかみ取りを、もう28年、30年近くやっているのですよ。そうすると、子どもたちはめちゃくちゃ喜ぶ。だから漁協は単に自分の組合だけあるいは遊漁者だけ相手にすればいいということではなく、そういった地域貢献として、子供たちが魚に親しむ機会をどんどん作っていくと。

昨年も、秋田県で進んでいる洋上風力の会社から補助をいただいて、二ツ井の道の駅というところで、魚のつかみ取りイベントを開いたのですが、親子が合わせて1500人ぐらい集まって大変なことになりましたね。最初は1人5匹は絶対に掴んでいただきます！ってやってたんだけど、人があまりにも来すぎて、1人1匹にさせていただいた。だから釣り離れとか魚離れって言われているけれど、企画によっては、淡水魚にも興味を持って子供たちが親しんでくれる。まずそこから始まらないと将来の釣り人も増えないし組合員も増えない。

子供の健全育成といった教育的な側面も含めて、そういった取り組みを漁協は今後やっていくべき事業の一つに組み込んでいかなきゃいけないんじゃないかって、ずっと私は個人的に思っていますし、そうあるべきなんじゃないかと思っています。



●観光業について色々と言及しましたが、具体にはこういうことですね。

秋田県観光連盟、かづの観光物産公社、それからあきた白神ツーリズム、私ども北秋田まちづくり観光協会、そのほかに旅行代理店などとの協力関係の構築です。

かつて今から20年近く前に、大館能代空港という小さな空港が北秋田市にあるんですけど、そこに就航しているANAの方が釣りとツーリズムをかけて、「釣リズム」というのをやって、お客様を羽田から大館能代空港まで乗せて、うちの組合がガイドするというのを20年前から実はやってたんですよ。ただそれは継続的ではなく、航空会社の単発的な事業として2年か3年続いたものでした。

ぜひ、またそういったものも航空会社さんや旅行、観光業のJTBさんとか色々ありますから、そういったところとタッグを組んででもう一回やってみたいなと強く思っています。

サクラマス協議会では、かつて大館能代空港経由で秋田に来た方にタダで年券を差し上げることを2年くらいやったんです。ただ、実は飛行機で来る方ってあまりいない。皆さん車に釣り竿からウェーダーからベストから一式を積み込んで来るので、飛行機で釣りにくる人はそんなに思ったほど増えず、実際は車で来られる人が大多数ですが、旅行会社とも組んでいくためにはそういう取り組みも今後やっていきたいと思っています。

観光の本質である「非日常の体験」に着目し、釣りを観光コンテンツとしてPR。新規顧客の獲得に向け、観光関係機関への営業を展開しました。

協力機関の発掘

- 一般社団法人秋田県観光連盟
- 秋田県観光文化スポーツ部 誘客推進課
- 株式会社かづの観光物産公社
- 一般社団法人秋田犬ツーリズム
- 一般社団法人あきた白神ツーリズム
- 北秋田まちづくり観光協会
- 一般社団法人大館市観光協会
- 能代観光協会
- 公益社団法人秋田観光コンベンション協会
- 秋田市観光文化スポーツ部 観光振興課
- 一般社団法人ドチャベンジャーズ
- 秋田県旅館ホテル生活衛生同業組合
- 公益財団法人秋田観光コンベンション協会
- 近畿日本ツーリスト株式会社 秋田支店
- 株式会社JTB 秋田支店
- 名鉄観光サービス株式会社 秋田支店
- 株式会社日本旅行東北 秋田支店
- 株式会社農協観光

そのほか、ポスター掲出では、道の駅や釣具店など多くの関係者に協力いただきました。引き続き、2026年度も「選ばれる川」を目指し、スカイ大作戦と河川ブランド構築を継続的に推進してまいります。

今後の展望

釣り人が減少していく中で「選ばれる漁場」になるには「自然体験のレジャー」へのリフレームが必要。

今後、積極的な施策でみんなから選ばれる川へ。漁協から地域の魅力をつなぐプラットフォームへと進化させなくてはならない。

●今後の展望としては、ここに書いてある通り、釣り人や組合員が減少していく中において、自然体験型のレジャーというコンセプトで枠組みを突破らって、今までの釣りだけの枠組みから、自然体験のレジャー型の観光という側面を前面に出すような枠組みを変えていかなければいけないんじゃないか思います。

誰からも親しまれ、みんなで楽しめる川作り、そういったものを今後、米代川水系サクラマス協議会として取り組んでまいりたいと思っています。

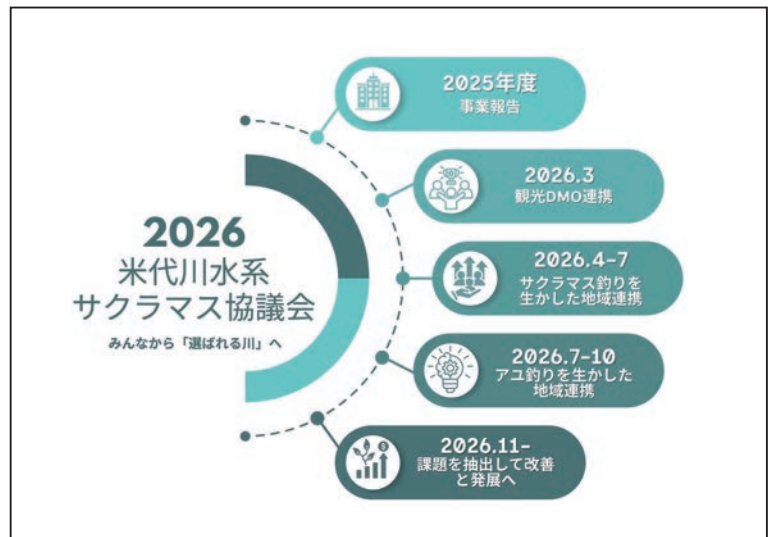


● 2026年、協議会としては、こんなことをやりますよと。具体的話ですね。

このDMOとの連携というのは今回の目玉となっていますし、アユ・サクラマスという二大有力魚種を持って、もっともっと多くの皆様に秋田へ米代へ来ていただきたい、こういう思いで取り組んでまいりたいと思います。

●最後に、今年の4月1日はサクラマスの解禁日になりますが、これまだ事業は始まる前ですけども、コーディネーターの方で個人的にドローンを借りて、解禁日の様子を撮影して、来年はそれを皆様にお見せできるように考えております。

以上、大変貴重な時間、拙い話を聞いていただきまして、ありがとうございました。



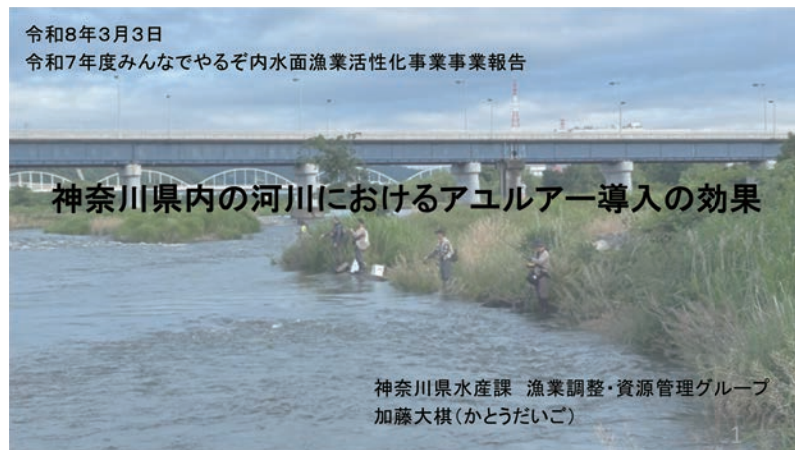
意見交換会

岩下（事務局）：

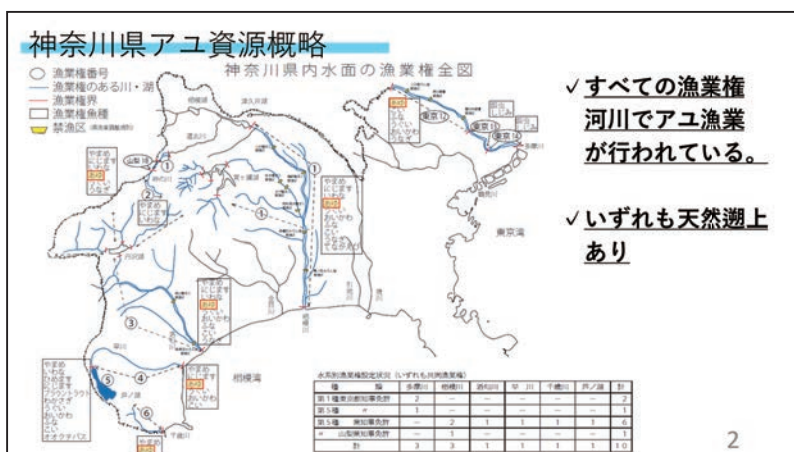
本日は「みんなでやるぞ内水面事業」の報告会ではありますが、広域の内水面関係者が集まる機会はなかなかないと思います。せっかくの機会ですので、皆様に共通して興味のあるテーマとして、アユルアー（アユイング）に関する意見交換を行ってみたいと考えました。

昨年6月、「漁業経済学会」の内水面に関わるミニシンポジウムにおいて、神奈川県庁の方が、こちらのタイトルにある「神奈川県内の河川におけるアユルアー導入の効果」について発表されており、是非今回、ここに参集の皆様にもぜひ聞いていただきたく、神奈川県へお願い申し上げたところ、学会で発表された方は海面の部署に異動されたそうで、ご後任の加藤さんにお越しいただいて発表を聞く機会を設けることができた次第です。

それでは加藤さん、よろしくお願いいたします。



ご紹介ありがとうございます。神奈川県水産課の加藤大棋と申します。本日は「神奈川県内の河川におけるアユルアー導入の効果」というタイトルで発表いたします。よろしくお願いいたします。私自身は山岳溪流でのルアーやフライは嗜むのですが、アユルアーについてはほぼ初心者ですので、至らぬ点はあるかと思いますが、ご容赦いただければと思います。



●では、まず神奈川県のアユ資源の概略からお話いたします。

神奈川県は全国の中でも小さい方の県かと思いますが、右上に東京都、左上に山梨県、左に静岡県と接しております。神奈川県内の河川は、東京都との県境に多摩川が、県央には相模川が流れており、上流は山梨県と接続しています。さらに西に行きますと酒匂川がございます。こちらは一級河川ではありませんが、

●では、まず神奈川県のアユ資源の概略からお話いたします。

神奈川県は全国の中でも小さい方の県かと思いますが、右上に東京都、左上に山梨県、左に静岡県と接しております。神奈川県内の河川は、東京都との県境に多摩川が、県央には相模川が流れており、上流は山梨県と接続しています。

さらに西に行きますと酒匂川がございます。こちらは一級河川ではありませんが、それなりの規模がある川でございます。さらに南西方向には早川。こちらは有名な箱根温泉があるエリアの川で、上流には芦ノ湖がございます。さらに南には、静岡県との県境になっている千歳川がございます。これらが神奈川県内にある漁業権河川と、芦ノ湖という湖でございます。

これらすべての河川で、アユの漁業・遊漁が行われております。いずれも天然遡上があり、少なくとも神奈川県内では天然アユがメインの資源となっております。


●アユの利活用については、すべての漁業権河川で、主に竿釣りによってアユの漁業・遊漁が営まれております。主な漁法は「友釣り」で、ほか「ころがし釣り」や「毛針釣り」もございます。

ただ、アユ釣りはお金がかかりハードルが高いということで、なかなか初心者が参入しにくいという状況がございます。本日は他県の方の発表でも同様の指摘がございましたので、重複する内容もあるかと思いますが、その点もご容赦いただきたいと思います。

専用竿は、友釣りの場合、安くても5万円、高いと80万円ほどするものもございます。加えて、引舟（ひきふね）や、おとり缶といったアユ専用の道具も必要です。総額は、安く見積もっても10万円を超えるという状況でございます。

アユの利活用

漁業・遊漁
 全ての漁業権河川で竿釣りにより行われる(一部では投網も)
 主な漁法は友釣り(メイン)、コロガシ釣り、毛鉤釣り



しかし…アユ釣りはお金がかかりハードル高!


(友釣りの例)

専用竿…5～80万円	鮎タイツ…2万円	仕掛け…1万円
タモ網…5千円	鮎ベスト…1万円	おとり…1.2千円(2匹)
曳き船…1万円	おとり缶…1万円	釣り券…2千円

総額118,200円～ 3

アユの利活用

アユルアー(アユのルアー釣り)の解禁
 友釣りのおとりの代わりにルアーを用いる漁法で、**入門ハードル低い。**
 相模川、酒匂川、多摩川、早川(R7～)で一部区間でアユルアーを解禁



必ずしも専用の竿・リールである必要なし
既に持っている人も多く、購入不要の場合も

(アユルアーの例)

釣り竿…1～5万円	曳き船…1万円	仕掛け…1万円
リール…1～5万円	鮎タイツ…2万円	釣り券…2千円
タモ網…5千円	鮎ベスト…1万円	

総額77,000円～ 4

●そこで近年人気になってきている「アユルアー（アユイング）」の解禁を、本県でも近年実施いたしました。

こちらは友釣りの「おとりアユ」の代わりにルアーを用いる漁法で、入門ハードルは低いものです。

県内でも相模川、酒匂川、多摩川、そして早川の一部区間でアユルアーを解禁いたしました。

アユルアーの例を下に記載しておりますが、釣り竿・リールがそれぞれ1万円から5万円程度となっております。必ずしも専用の竿やリールである必要はございません。釣り竿であれば溪流のトラウトロッドやバスロッド、シーバスロッドの少し短いような竿でも代用できるかと思います。リールも小型の溪流用リールなどで代用可能ですので、すでにお持ちの方は購入不要となります。これらを購入する場合でも、安価なものであれば総額7,700円程度からという試算もあり、非常に入門しやすい釣りでございます。



●こちらに神奈川県相模川の釣り場案内図を載せております。

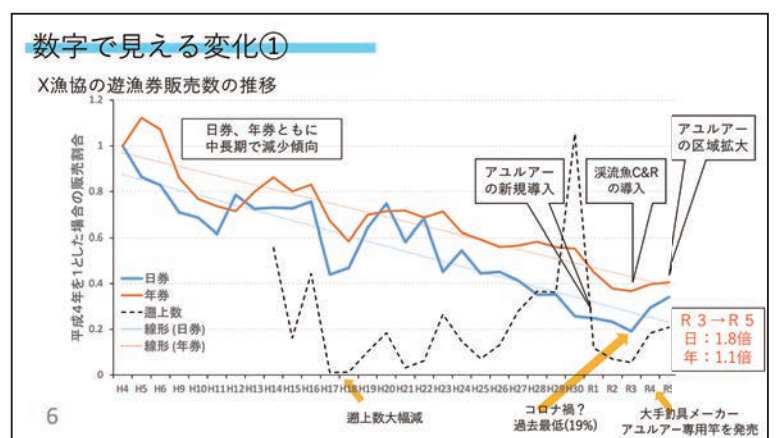
左側が河口で、中流部のこのあたりで中津川と本流に分かれます。

河口から相模川本流はこのあたりまで、支流の中津川はこのあたりまでをアユの釣り場として解禁しており、うっすらとオレンジ色で囲った部分がアユのエリアとなります。

こうした案内図を配布・公開し、釣り人に周知しているところです。

●次に、数字で見える変化として、県内の「ある X 漁協」における遊漁券販売数の推移を載せております。

横軸は平成4年から令和5年までの和暦を示し、縦軸は平成4年を「1」とした場合の各年の販売割合を示しています。折れ線グラフについて説明します。オレンジが年券、青が日券、そして点線がアユの遡上数（そじょうすう）を示しています。遡上数については縦軸を用意しておりませ



んが、傾向を示すものとして捉えていただければと思います。また、薄い点線は日券と年券それぞれの直線、つまりトレンドを示しています。

グラフをご覧いただければわかる通り、日券・年券ともに減少傾向が続いていました。アユの遡上数を見ると、年変動が非常に激しい魚種ではありますが、資源量や遡上数が極端に減っている状況ではありません。したがって、魚がいないために釣り人が減っているというわけではないと考えられます。

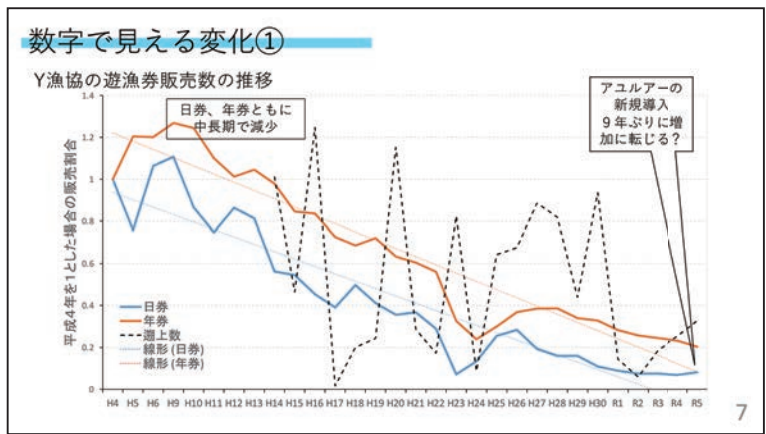
ずっと減少傾向が続いていたのですが、令和元年頃にアユルアーを新規導入しました。その時期はコロナ禍とも重なっていました。釣りはコロナ禍で需要が増えた側面もあるため一概には言えませんが、背景としてそうした状況もありました。また、この漁協ではアユルアーの導入に加えて、溪流魚のキャッチ・アンド・リリースも導入しています。

アユルアーを導入してから数年が経過したこのあたりで、年券と日券がともに増加に転じています。ここでは令和5年までのデータですが、令和6年、7年も比較的調子が良かったと聞いております。さらに令和5年には、アユルアーの可能区域を拡大しました。

令和4年頃からは大手釣具メーカーがアユルアー専用竿を発売したり、SNS や釣り番組等でも取り上げられたりと、非常に盛り上がりを見せてきました。その結果、令和3年から5年までの間で、日券は1.8倍、年券は1.1倍に売り上げが伸びたようです。

●こちらは別の漁協のデータですが、傾向は同じです。

この漁協では令和5年にアユルアーを新規導入しました。このグラフでは導入後の推移までは示せていませんが、お話を伺う限りでは非常に好調で、アユルアーによって釣り人が増えたとのことでした。



7

数字で見える変化②

漁場でのアユルアー利用者の割合

あゆの遊漁券(竿釣)は漁法別に分かれていないためアユルアーの利用者だけを把握するのは困難…

→漁場監視員の監視日報からアユルアーの割合を調査・算出

内訳/地区	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	合計
アユ遊漁客数	154	5,281	1,661	852	154	8,102
うちアユルアー	6	353	1,189	19	21	1,588
アユルアー割合	4%	7%	72%	2%	14%	20%

表 Y漁協の調査期間内でのアユ遊漁者数(漁協調べ)

8

●次に、アユルアーの利用者の割合についてお話しします。

アユの遊漁券は技法別に分かれていないため、遊漁券の販売データだけではアユルアーの釣り人を正確に把握することができませんでした。そこで今回は、漁場監視員の監視日誌からアユルアー利用者の割合を調査・算出いたしました。

こちらの表は、各河川の地区ごとに、アユの遊漁者全体に対してアユルアーで釣っ

ている人が何人いたか、その割合を示したものです。

表を見ると、C地区だけが72%と突出しており、他の地区は数%程度に留まっています。この特定の地区の割合が非常に高いため、全体の合計で見ても、アユルアーの割合は20%という結果になりました。

この結果から考察すると、アユルアーを楽しめる場所は今のところまだ限られており、特定の漁場に集中しやすい状況にあるのではないかと思います。

私個人の意見としては、アユルアーは比較的、水深がそれほど深くなく、流れも緩やかな場所、そして新規参加者が多い釣りであるため、橋のすぐ下などのエントリーしやすい場所に集中しているのではないかと考えています。

●次に、数字に表れない効果についてです。こちらは漁協や釣具店からヒアリングした内容になります。

まず「遊漁者層の変化」として、若年層や女性が増加したという点が挙げられます。また、アユルアーから入って友釣りにシフトする、いわゆる「ステップアップ」をする方もいらっしゃいます。逆に、高齢になって川の中まで入るのが難しくなった友釣り師の方が、アユルアーを始めて護岸から釣りを楽しむようになった、という事例も聞かれました。

ルアーは見た目も綺麗で、ファッション性や「おしゃれな感覚」で始められる方も多く、若い世代にとってもとっつきやすい釣りなのだと個人的に感じております。

数字に表れない効果等

漁協、釣具店等からのヒアリング

1. 遊漁者層の変化

- (1)若齢層や女性の増加
- (2)アユルアーから友釣りへのシフト
- (3)高齢で川に入れなくなった友釣り師が護岸からのアユルアー専門に

2. 遊漁者の意識

- (1)友釣り等への配慮意識高くトラブル無
- (2)無券の割合が低く、相互監視効果高い
- (3)沢山釣れなくても満足する

3. 協力・連携

- (1)漁協とメーカー、釣具店が連携して盛り上げていく機運の高まり
- (2)釣り大会、地元経済の活性化(県外の遊漁者多い)

4. 課題等

- (1)週末等は漁場が混雑
→区間拡大により対応
- (2)友釣りよりも沢山は釣れない
→ノウハウの蓄積で徐々に解消
- (3)日釣券>年券の傾向

9

また「遊漁者の意識」については、友釣りへの配慮意識が高く、大きなトラブルは特に起きていないと聞いています。加えて、無券での釣りが少なく、皆様きちんと券を購入して釣りをされています。お互いに見合っていることで、相互監視効果も高まっているのではないのでしょうか。

さらに、この釣り自体がいわゆる「ゲームフィッシング」としての側面が強いため、たくさん釣れなくても比較的満足しやすい釣りであるという傾向もございます。

「協力・連携」の面では、漁協、メーカー、釣具店が三位一体となって、始まったばかりのこの釣りを盛り上げていこうという良いきっかけになっています。実際に釣り大会の開催などで地元経済も活性化しており、県外からの遊漁者も多く訪れているとのこと。

今後の課題についてお話しします。まず、週末は漁場が非常に混雑するため、今後は区間をさらに拡大していく必要があると感じています。また、現状では友釣りと比べるとまだそれほど多くは釣れないという面もありますので、ノウハウを蓄積し、アユルアーでも数釣りが楽しめるような環境づくりが必要になってくるかもしれません。

遊漁券については、年券よりも日釣り券の割合が高い傾向にあります。そのため、アユルアーの利用者についても、いかにリピーターや固定層を増やしていくかが重要になると考えています。

●続いて、より効果的な導入についてお話しします。資料には「個人的見解を含む」とありますが、これは前任者のスライドを引き継いだ内容です。私自身も概ねその通りだと考えておりますので、その視点からお伝えいたします。

効果的な導入のポイント、1つ目は「メーカーや釣具店と協力して進めること」です。これが非常に大切だと思います。

他の河川での事例やアユルアーの基本的な

釣り方など、専門的なノウハウを提供してもらい、講習会や大会を開催することが重要です。それが初期のスタートアップを成功させ、リピーターの獲得にも繋がります。

単に「遊漁規則を変えて、釣りができるようにすればいい」というわけではありません。ひっそりと解禁しても宣伝効果は薄いため、しっかりと準備をして、メーカーや釣具店と一緒に盛り上げていく下準備が必要です。

実際にヒアリングを行った漁協では、どこもメーカーや釣具店と連携し、キーパーソンとなるテスターやスタッフの協力を得て、積極的に盛り上げていました。最近はInstagramやYouTubeなどのSNSも活発ですので、そうしたメディアで発信力のある方々と協力することも、これからは不可欠だと思われます。

より効果的な導入(個人的見解を含む)

- ①メーカーや釣具店等と協力・連携して進める
他の河川での釣り方などノウハウを提供してもらう
初心者向け講習会や釣り大会の開催
→○スタートアップの成功、リピート率向上
→○宣伝効果の拡大、集客

ひっそりと解禁しても効果は薄い

※ヒアリングした漁協では、いずれもメーカーや釣具店と連携関係
キーとなる人物(テスター、スタッフ)と協力して盛り上げていた

10

より効果的な導入(個人的見解を含む)

- ②アユルアーにもしっかりと好漁場を解禁する
釣れにくい漁場を解放しても遊漁者は来ない！
解禁を聞きつけてせっかく訪れた遊漁者も…
→×漁場がイマイチ、釣れない、がっかり感
→×再訪なし、良くない口コミ広がる
→○好漁場、釣れる、SNS等で良い口コミ広がる
→○漁協のプラスイメージ

不人気・非活用漁場の有効活用という考え方だけではNG

※ヒアリングした漁協からは「これからうちはアユルアーメインの川になるかも」といった声も聞こえてきた

11

逆に、良い漁場でしっかりと釣れる体験ができれば、SNS等で良い口コミが広がり、漁協のイメージアップにも繋がります。

「不人気な場所や活用されていない場所だけをアユルアーに割り当てる」という考え方だけでは、あまり上手くいかないようです。

ただし、先ほどの山形県様の発表にもあったように、「上流部で木が茂っていて友釣りには不向きだが、アユはしっかりと定着している」というような場所をアユルアーに割り当てるとするのは、非常に有効な考え方だと思っています。

ヒアリングした漁協からは、「これからはうちの川はアユルアーがメインになるかもしれない」といった声も聞こえてきました。

●一方で、おとり店が「おとりが売れなくなる」とルアーを敬遠したり、友釣り愛好家からの反対意見があったりすることもあるかと思えます。これについては、少しずつ周囲の理解を求めていく必要がありますが、最終的には幹部によるトップダウンでの意思決定が必要な場面もあるかもしれません。

しかし、それとは逆に、友釣り利用者が減少しておとり店が廃業している地域もあり、「アユルアーでの集客が求められている」という切実な実情もあるようです。

より効果的な導入(個人的見解を含む)

とは言っても…

- ・おとり屋さんがルアーは嫌がっていて…
- ・友釣り師から反対の声が大きくて…

→少しずつ周囲の理解を求めていき、最終的には組合幹部からのトップダウンで意思決定をせざるを得ない。

※友釣り師の減少に伴いおとり屋の廃業が増えている中で、アユルアーでの集客が求められているという声もあった。

12

まとめ、課題

<まとめ>

- アユルアーは遊漁規則の変更だけで一定の効果が見込める振興策
 - ・増殖量を増加や、電子遊漁券の導入と違って初期コストは0
 - ・それでも、一定の効果(遊漁者数増加)が認められる。
- より効果的に取り組むには…
 - ・釣り業界を巻き込んで宣伝、集客!
 - ・せっかくの解禁!アユルアーにも良い漁場を使わせる

<課題>

- 一時的なブームで終わらせないためにはどうするか。
 - 業界全体で盛り上げていく、ビギナー層→コア層の拡大
 - 友釣りへのシフトの支援など

13

●最後にまとめです。

アユルアーは、遊漁規則を変更するだけで一定の効果が見込める振興策です。増殖量の増加や電子遊漁券の導入などと異なり、初期コストがほぼゼロで始められるのが大きなメリットです。

さらに効果的に取り組むには、釣り業界を巻き込んで宣伝し、集客を図ること、そしてせっかく解禁するのであれば、アユルアーにも良い漁場を割り当てることが重要

です。

一過性のブームで終わらせないためには、業界全体で盛り上げ、初心者層をコアなファンへと定着させたり、友釣りへのステップアップを支援したりといった工夫が考えられます。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

～質疑応答～

岩下（事務局）：

加藤さん、どうもありがとうございました。急なお願いにもかかわらず、誠にありがとうございました。昨年6月の学会時にもお話も伺いましたが、改めて詳しくお聞きすることができ、非常に勉強になりました。

それでは、加藤さんのご発表について、何かご質問はございませんか？

……はい、湊屋さんお願いします。

湊屋（米代川水系サクラマス協議会）：

秋田の湊屋と申します。アユルアーについては非常に興味を持っておりまして、メーカー側からも「川で釣らせてほしい」という要望を数年前から受けています。

今のお話の中で「遊漁規則の変更」という点がありましたが、具体的にはどのような変更をされたのでしょうか。あるいは、どのような変更をすべきだとお考えか、お聞かせください。

加藤（神奈川県水産課）：

ご質問ありがとうございます。

具体的に申しますと、まずはルアーの「針」について、ハリスの長さを何センチ以内にするか、といった規定です。神奈川県内では「10センチ以内」としているところが多いです。これは友釣りのルールと合わせたものだと思います。

そのほか、アユルアーを許可する時期や場所の指定も、必要に応じて規則に盛り込んでいます。

また、これは個人的な見解ですが、規則には「ミノー」だけでなく「バイブレーション」なども含めて「ルアー」と総称して記述するのが良いと思います。「ミノー」と限定して書かれている他県の例も見受けられますが、幅広く「ルアー」としたほうが、今後の展開を考えると適切ではないでしょうか。

あとは課題として、遊漁規則にはまだ盛り込めていないのですが、竿の長さの制限についても検討しています。おとりの代わりにルアーを使う際、延べ竿（のべざお）でアユルアーをされる方もいらっしゃるようです。そこでリール竿を使うと、従来の釣りとの秩序が乱れるのではないかという懸念があり、竿の長さを制限すべきではないかと、ある漁協さんと話をしています。

具体的な長さについては課題ですが、現在の市販品ではがまかつさんの3.3メートルが一番長いようですので、4メートルや5メートルといったあたりが基準になるのかな、といった話をしています。

湊屋：

ありがとうございます。実は私のところでも、本流と支流（支流4箇所、本流3箇所）にある友釣り専用区を、今年の総会で撤廃しようと考えています。アユルアーを楽しみたい方々に、川を開放してあげたいという思いがあるからです。

もちろんトラブルの懸念はありますが、規則で厳しく縛るよりも、釣り人のマナーや良心に期待したい

と考えています。友釣りの方がいるところにルアーを投げないといった、釣り人としての常識を意識づけていきたいという思いです。

また、先ほどもお話がありましたが、おとり店が減少しているという実情もあります。友釣りの場合でも、最初におとりが確保できなければ始まりませんが、アユルアーで最初の1匹をキャッチできれば、そのまま友釣りに繋げることができます。こうした流れが、これからの主流になっていくのではないかと予想しています。

それから、アユルアーの方は「数釣れなくても満足できる」という話をよく耳にします。友釣りの方は「10匹しか釣れなかった」と不満に思いがちですが、ルアーの方は1、2匹でも楽しんでいる。こうした価値観の違いも、アユルアーが広がる上での一つの特徴なのかなと感じています。非常に参考になるお話をありがとうございました。

岩下：

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。では、工藤先生お願いします。

工藤委員（東京海洋大学）：

ご報告ありがとうございました。今の湊谷さんのご質問とも関連しますが、相模川は相模川漁連が1つの漁業権（1河川1漁業権）を持っていますよね。その中に5つか6つの漁協があると思いますが、それぞれの漁協が独自の遊漁規則を持っていて、アユルアーを解禁しているところとそうでないところが分かれている、という理解でよろしいでしょうか。

加藤：

ご質問ありがとうございます。相模川については、相模川漁連が漁業権を保持しており、所属する各漁協自体は漁業権を持っていません。そのため、遊漁規則は相模川漁連としての1本のものがあり、全漁協がそれに則っています。

工藤：

なるほど、相模川漁連として1つの規則があるということですね。そうしますと、5枚目のスライドでアユルアーが「できる場所」と「できない場所」が緩やかに分かれていたのは、どういう理由でしょうか。

加藤

スライドでオレンジ色に囲った区域のみが、現在アユルアーを許可している区間ということになります。

工藤：

そうすると、自分の漁協の管轄区域でアユルアーが解禁されていない漁協も存在することになりますよね。そうした漁協から「うちの区域でも解禁したい」という要望は出ないのでしょうか。

加藤：

今のところ、そのような話は私の耳には届いておりません。そもそも上流部はそれほどアユ釣りが盛んではないという地域事情もあり、あまり話題に上らないのかもしれませんが。

工藤：

なるほど、承知いたしました。ありがとうございます。

岩下：

加藤さん、非常に有益な情報をいただき、大変ありがとうございました。

ここからは意見交換会として、ざっくばらんに進めていきたいと思えます。

本日ご報告いただいた6団体のうち、三重県さん、愛知県さん、山形県さんなど、多くの地域でアユルアーの取り組みに触れられていました。講習会を開催されたところもございませぬ。では、三重内水面漁連の齋藤さん、今の神奈川県さんのご発表や、これまでの報告を踏まえて、ご意見をいただけますでしょうか。

齊藤（三重県内漁連）：

はい、ご指名いただきましたので、少しお話しさせていただきます。

まず、先ほどの神奈川県さんの発表内容や、個人的な意見も含まれた提言の内容については、全く同感です。「やったほうがいいこと」と「やってはいけないこと」があると思えますが、実は「やってはいけないこと」の方が重要ではないかと私は考えています。

まず一番の問題は、やはり「釣れない川」であることです。釣れない川でイベントを行ってしまうのは問題です。これは昨日の話なのですが、ある漁協さんでヒアリングをした際、その組合長さんに「今回の事業はやめてしまいたい」と言われたそうです。理由を聞くと、イベントを開催したけれど誰も釣れなかったから、ということでした。

これは非常に残念な話ですが、我々としては、川釣りの一要素としてアユルアーを広めることで、最終的に漁協の利益に繋がるのはほぼ確実だと思って取り組んでいます。ただ、実際に「釣れない」という経験をしてしまうと、「この釣り方自体がダメなんだ」という考えに陥ってしまう可能性があります。

別の開催回でも「魚は見えているのに、どうしても釣れない」ということがありました。本来、川に来て「釣れる体験」をしてもらうのが目標なのですが、それが叶わないと、根気のある方は別として、一般の方は「あの川に行っても釣れない」という認識を持ってしまいます。そうなると漁協にとってはマイナスになってしまいます。ですので、確実にある程度面倒が見られる川、つまり「しっかり釣れる川」でイベントなどを開催しないと、逆効果になってしまうということを強く感じました。

それ以外の要素については、皆様もおっしゃる通り、ネットを見て有名な方が講師をしてくれれば「あの人が行った場所に行ってみたい」という動機付けになります。

具体例を挙げますと、昨年、私がいる三重県の大内山川にダイワの方が視察に来られました。「原西フィッシング倶楽部」というコンテンツの撮影も兼ねていたのですが、その後、漁協には毎週のように「原西さんが行っていた場所はどこですか？」という問い合わせが来ています。やはり発信力のある方に実際に来ていただく効果は非常に高いです。

逆に、友釣りのイベントを開催して漁協の方が教えたけれど、なかなか効果が出ないという話も聞きます。宣伝効果も含めて、プラスになる形で企画を組まないと、せっかくのイベントも成果が薄くなってしまっていると感じています。

これから新しく取り組まれる皆様も、「ここで釣りをしても無駄だ」と思われぬような形のイベント運営をお勧めします。とりあえず私からは以上です。

岩下（事務局）：

ありがとうございました。齊藤さんのところは「アユルアー塾」として、この事業を活用して2年間、かなりの回数をこなしてこられましたから、その経験に基づいた貴重なご意見だと思えます。

神奈川県に加藤さんにお伺いしたいのですが、相模川の漁協さんの中で、こうした「教室」のようなものは開催されているのでしょうか。

加藤：

漁協が主催している教室というのは、私は聞いたことがありません。メーカーや釣具店が主催する講習会などは行われているようですが、漁協が主体となって、というのは把握しておりません。

岩下：

なるほど。そうしますと、まずはその川でアユルアーができるという体制が固まっていないと、釣具店やメーカーも入ってこれないわけですね。漁協側がまずは門戸を開き、情報を流して集客をする。その上で、どうやって愛好家を増やしていくか。

斎藤さんのおっしゃる通り、まずは「釣れる」ことが大前提ですが、その先の技術的なことやマナーを伝える場をどう設けるか。これは漁協がやるべきなのか、メーカーがやるべきなのか。……本来は皆で協力してやれば一番良いのですが、役割分担も含めて、斎藤さんはどうお考えですか？

齊藤：

まず「みんなでやるぞ」という事業名で進めているこの取り組み自体、非常に重要だと感じています。なぜ今「みんなで」という話になっているかと言えば、これまでの漁協や漁連の組織では、十分な連携ができていなかったからではないでしょうか。

販売量を増やしたい釣具店やメーカーは、当然「やりたい」と考えています。しかし、それに対して各漁協や漁連が具体的に足並みを揃えて動くということが、実際にはできていなかったのが現状だと思います。我々の役割はシンプルに言えば「橋渡し」です。メーカー側のニーズは分かっているのですから、場を作って進めていけばいい。

ただ、現実的な問題もあります。昨日回ったある漁協さんでは、「うちは駐車場がないから、アユルアーの受け入れは無理だ」という話がありました。駐車場がないという課題は分かっているのに、なぜそれを作らないのか。

私がいる大内山川漁協では、友釣りの方が来られる場所として、自ら能動的に駐車場の整備を進めています。それが川の振興に繋がると分かっているからです。しかし、多くの漁協ではその問題を解決する能力がないか、あるいは放置してしまっているのが実情です。

全国的に見ても、しっかり取り組んでいるところとそうでないところの差は非常に大きいです。釣具店さんなどがイベントを提案してくれた際、ノウハウがなくても「任せるからやってくれ」と乗るだけでもいいはず。とにかく、お客さんが来るような活動を形にしない限り、何も始まりません。

漁協単体でやるのが難しいのであれば、できる場所のノウハウをそのまま取り入れて動けばいい。少なくとも私はそのように考えて、この数年間、お手伝いをするための組織化を進めてきました。

岩下：

ありがとうございます。今年2回目の講習会を開催された山形県の桂さんはいかがでしょう。山形県での手応えを教えてください。

桂（山形県内漁連）：

先ほど「漁協単体で」というお話がありましたが、実は山形県の「最上漁協」さんは、我々の事業より前から単体でアユルアーの講習会を開催されていました。というのも、組合長さんご自身が友釣りのプロのような方で、メーカーとも強い繋がりがあったため、独自に講師を招いて開催できていたのです。

2月の検討会の際、他の漁協さんからも「アユルアーを始めたいが、理事や役員がどんなものかよく分かっていない。どうすればいいか」という相談がありました。その都度、メーカーの方を呼ぶのも大変で

すので、県内で指導できる方を育成し、要望があった漁協へ派遣できるようなシステムを作れないか、という議論が出たところです。

岩下：

ありがとうございます。山形県内でもまだ4河川ということで、これからさらに広がっていく余地がありますね。ただ、始めるにあたって「組合員の方々が内容をよく知らない」という点がネックになっている。それを解決するための一手として、愛知県の大竹さんは、あえて初心者向けではなく「漁協の組合員向け」にアユルアーの講習を行われたわけですね。大竹さん、いかがでしょうか。

大竹（愛知県内漁連）：

愛知県のアユルアーに対する考え方についてお話しします。まず、漁協の人間、つまりアユルアー導入の決断を下すべき立場の人間が、アユルアーのことをよく知らなかったという現状がありました。そこで、まずはアユルアーとはどのようなものかを知ってもらうために、先ほどのような講習会を開催しました。

会場となった寒狭川中部漁協さんは、ある意味で先駆的にアユルアー専用区を開設されています。この組合長さんは、新しいことに挑戦することを恐れない方です。かつ、漁協内でも非常に強いリーダーシップで引っ張っていける方だからこそ、導入が進んだという側面があります。

その組合長さんをもってしても、「この川はアユの友釣りには向かない川だからこそ、ルアーをやらせてくれ」というのが精一杯の説得材料だったようです。そこから今回の事業を通して、徐々に理解が広がり、区域も拡大していけるようになりました。

岩下：

ありがとうございます。色々な地域のお話を伺うと、懸念されていた「友釣りとルアーのトラブル」というのは、意外と「起きていない」という声が多いですね。イメージとしては「ルアーは邪魔だ」といったトラブルがあるかと思われがちですが、実際はどのようなのでしょうか。齊藤さんいかがですか。

齊藤：

トラブルについては、実はありません。ちょうどタイムリーな話があります。

私が普段活動している大内山川漁協では、昨年度は一部解禁でしたが、今年度からは全域でアユルアーを解禁しました。全域解禁して起きた「トラブル」と言えば、わずか2件です。1つは「こんなところでアユルアーをやるな」と文句を言われたこと。もう1つは、全域開放していることを知らずに「ここはルアー禁止だぞ」と注意されたことです。ちなみに、その時に釣っていたのは私自身でした。翌日からは別の場所で釣るようにするなど配慮しています。

そうした配慮をしながら行っているのですが、実質的なトラブルは起こり得ないのが実情なのですが、昨日、別のトラブルが発覚しました。ある漁協へ行った際に、「大内山川はアユルアーを入れたせいでトラブルだらけらしいな」と言われたのです。これは完全な風評被害ですので、その場できっちり否定しておきました。実際にはトラブルが起きているどころか、アユルアーで釣っていると、友釣りの方から「本当に釣れるの？」と声をかけてもらえるほどです。「ここで2匹釣れましたよ」と答えると、「へえ、釣れるもんなんだね」といった温度感でやり取りができています。

皆様が思っている以上に、少なくとも私の周囲では、友釣りの方がアユルアーに対して全否定的な意見を言うことはほぼありません。ただ、トラブルが絶対に起こらないとは限りませんので、メーカー側もマナーについては口を酸っぱくして伝えています。そこは当然気をつけるべき点です。

ですので、実際にはトラブルはほぼ皆無であるにもかかわらず、こうした「風評被害」が起きかねない

という点には注意が必要です。誰が言い出したのかまでは問い詰めませんでしたが、事実と反する噂が一人歩きしてしまうことがあるのも、この釣りの現状かもしれません。

岩下：

ありがとうございます。やはり友釣り師の方々にとっては、アユルアーというのはまだ「得体の知れないもの」という恐れや、疑心暗鬼になってしまう部分があるのでしょうか。

実際に現場で普及を進めていく中で、何か具体的な問題点や、ネックになっていると感じることはありますか？

齊藤：

すでにお話しされている方も多いかと思いますが、一つは「おとり店（友鮎販売店）」との関係です。おとり店の方々の中には、どのような説明をしても強固に同意していただけないケースもあります。

ただ、我々の方での成功事例を一つご紹介します。1年目にアユルアーをやってみて、最初はほとんど釣れず、シーズンの終わりにようやく数匹釣れたという方がいました。その方は2年目には、ほぼルアーをやらずに友釣りに転向されたのです。

実際にルアーでやってみたことで、「やはり友釣りの方が面白いし、効率も良い」と体感されたわけですね。本格的に釣りをやるのであれば友釣りをしない理由はない、と気づかれた事例です。

ですので、アユルアーが友釣りの邪魔になるというよりも、最終的にはアユルアー利用者の5%から10%程度は友釣りに移行していくのではないかと考えています。そうなれば、その方々は確実におとり店を利用するようになります。

他県の事例としても、「最初はルアーをやっているけど、すぐに友釣りに移行する人が結構いる」という実情を、おとり店の方々にも伝えていくことが大切です。最終的にはおとりアユの販売促進にも繋がるのだということを、皆様で共有していくべきだと思います。

岩下：

ありがとうございます。まさに「案ずるより産むが易し」といった側面が強いようですね。山形県の桂さんはいかがでしょう。何か不安な点や、課題だと感じていることはありますか？

桂：

先ほど神奈川県さんからもご指摘があった通り、山形県でも「アユルアーを始めたい」という声が上がった場所の多くは、実は友釣りがほとんどできず、アユもあまりいないような場所でした。そうした場所で無理に導入しようとするのは、やはり「まずいやり方」だったと今は反省しています。

一方で、ある漁協さんでは、ダムの下流でカワウやブラックバスの影響でアユが育たない場所があるのですが、そこではなく「小さな支流」に注目しています。そこは支流のため、おとりアユを泳がせにくいのですが、そこに集中放流をして、アユルアーの漁場を作ろうと計画しています。

また別の例では、ダムの上流部があります。これまではイワナの川だったのですが、近年の地球温暖化の影響で、夏場に水温が25度まで上がるようになってしまいました。イワナがさらに上流へ逃げたため、その空いたエリアにアユを放流し、アユルアーの漁場にしようという動きがあります。

このように、漁協さんなりにアユルアーを導入するにあたって、場所の選定やゾーニングを色々と考えてくださっていますので、我々もしっかりと支援していきたいと考えています。

岩下：

ありがとうございます。アユルアーの導入が、川の資源のあり方を改めて考えるきっかけにもなっているんですね。

その他、いかがでしょうか。……はい、丸茂様お願いします。

丸茂課長補佐（水産庁栽培養殖課）：

水産庁の丸茂です。斎藤さんのお話の中に「アユルアーから友釣りに移行する人がいる」という非常に興味深いエピソードがありました。

実際に和歌山県などで開催されている「友釣り塾」では、37名ほどの方が参加されていると記憶していますが、その参加者の方々の属性はどういった背景の方が多いのでしょうか。

例えば、「全くの釣り初心者だけれど友釣りを始めたい」という方なのか、それとも「海釣りなど他の釣りをしていたけれど、友釣りに興味を持った」という方なのか、あるいは「アユルアーをやってみただけれど、もっと本格的に釣りたいから友釣りに転向した」という方なのか。そのあたりの割合や背景を教えてくださいいただけますでしょうか。

齊藤：

今のところ、アユルアーを経験してから友釣り塾に入られたという方は、それほど多くはありません。主な層としては、海釣りなどを中心にされていた方が「川の釣りもやってみたい」と思われたケースがほとんどです。ただ、これまでは友釣りというのは非常に敷居が高く、教えてくれる人もいなかった。そこに「アユルアー塾」という受け皿ができたことで参加された、という方が多いですね。ルアーから友釣りへの明確な移行については、これから徐々に増えていく段階なのかなと感じています。

岩下：

はい、ありがとうございました。私も、ルアー塾に来られる方々の背景がどのようなものかお聞きしたかったので、非常に参考になりました。ありがとうございます。

さて、新潟県さんの方からも「アユルアーを導入したい漁協がある」というお話がありました。新潟県も友釣りで有名な河川が多い中で、今後どのように進めていかれる予定でしょうか。

藤田（新潟県内漁連）：

そうですね。やはり最初はトラブルを心配する声もありましたが、今は「そうも言っていない」という考え方が主流になりつつあります。「皆で仲良くやればいいのか」というのが基本的なスタンスです。ただ、中には「専用の区域を設けたい」という要望を持っている組合長さんもいらっしゃいます。

岩下：

ありがとうございます。トラブルについては、今回のお話をぜひ持ち帰っていただき、過度に不安がらずに広めていただければ幸いです。皆様が仲良く釣りを楽しめるのが一番ですからね。

それでは、他にご質問のある方はいらっしゃいますか？ ……はい、お願いします。

大竹（愛知県内漁連）：

私の関わっている漁協さんの中には、経営的に非常に厳しい状況にあるところもあります。そうした中で、「何もしないよりは」ということで、来年度からアユルアーを解禁する予定の漁協がございます。

斎藤さんに質問なのですが、先ほどの神奈川県さんのお話にもあったように、普及には「発信力・宣伝

力」が不可欠だと感じています。「アユルアーをやりたい」という方がいる中で、しっかりと情報を届けていく必要があります。

三重県さんでは「小委員会」という実行部隊を作られています。そうしたメンバーをどのように集められたのでしょうか。また、どのような知識や技術を持つ人を集めると、事業がスムーズに進みやすいといったアドバイスがあれば教えてください。

齊藤：

ご質問ありがとうございます。まず小委員会の集め方ですが、三重県内水面漁連から各漁協に対し、理事会で決定した旨を公文書で通知しました。「小委員会を組織するので、活動に協力的な方を自薦・他薦問わず選出してほしい」という内容です。

ただ、実際のところは、日頃から各漁協を回る中で「この漁協にはこんな活動的な方がいるな」という目星をあらかじめ付けていました。公文書を送った後、そのターゲットとした方々に一本釣りで「ぜひ入ってほしい」と直接交渉も行いました。

また、今後イベントや活動を強化したいと考えている漁協に対しては、「お宅の漁協からも必ず一人出してください」と個別に依頼もしています。

正直なところ、どの組織でもそうだと思いますが「やりたい人は手を挙げてください」と言って自発的に集まることはまずありません。本気で「みんなでやるぞ」を実現したいのであれば、動いてくれそうな人を自分たちで見つけ出し、口説き落とすプロセスが必要不可欠です。

それから、メンバー構成についてですが、私のように「地域おこし協力隊」として動いている人間や、観光協会など、外部と連携して動ける人に声をかけるのが良いと思います。

メーカーさんの活用についても触れておきます。例えば愛知県には、もともと「パームス (PALMS)」さんなどのメーカーがイベント等で来られていましたよね。そうした繋がりのある漁協さんとメーカー、あるいは釣具店さんの力を活用しない手はありません。

メーカー側としては、自社製品を売りたいという当然のニーズがあります。そこを逆手に取って、彼らの持つ広報力や宣伝力を最大限に活用することが、普及への近道だと思います。

石井（京都府内漁連）：

メーカーさんとの繋がりという面で、少しお話しさせていただきます。私は京都府南部の木津川漁協で事務局を務めております。

3年前にアユルアーを解禁しようとしたのですが、ただ解禁するだけでは、先ほどのお話にもあった通り、誰にも知られないままひっそりと終わってしまうのではないかとという危惧がありました。友釣りの方も少ない現状で、このままでは不発に終わる。そう考え、理事会の中で「アユルアー教室を立ち上げられないか」という案が組合長から出されました。

当時「アユイング」という言葉をよく耳にしていたので、まずはその言葉を作られたダイワさんに連絡をしてみようということになりました。ダイワさんに連絡する際に注意した点は、「なぜアユルアーを解禁したいのか」「今、木津川漁協が置かれている現状はどうか」として「これを実施することで1年後、2年後にどのような姿を目指したいのか」ということを、正直にお伝えしたことです。

良いことも悪いことも含め、現状を踏まえて丁寧にお話ししたところ、ダイワの木森直樹さんがわざわざ足を運んでくださいました。それ以来、毎年当漁協のアユイング教室を手伝っていただくような形になっています。

メーカーさんに対しては、目的を明確に伝え、自分たちの置かれている現状を、悪い部分も含めて包み隠さずお話しすることが、良い協力関係を築く上では重要ではないかと感じています。

岩下：

どうもありがとうございました。京都府さんもかなり早い段階からアユルアーを解禁されていましたね。貴重な事例をありがとうございました。

皆様から色々ご意見をいただきましたが、ちょうど時間となりました。本日で発表いただいた皆様、そして急遽の参加依頼をご快諾いただいた神奈川県に加藤様、誠にありがとうございました。本日はこれにて終了とさせていただきます。大変ありがとうございました。

講 評

岩下（事務局）：

今年度の11団体の報告をいただきました。それでは、評価検討委員ならびに専門家、水産庁の皆様にご講評をいただきます。

佐野委員（滋賀県河川漁連）

全体的にどこもアユルアーですが、これに関して、各メーカーさんにきちんとしたルールを作ってもらわないと。今、一応メーカーさんが言われてるのは、針は4本、ただし3本錨でも蝶針2本。問題になるのがチラシで、チラシを4本まで巻いてしまうと長さが長くなる。

今、こちらの方でも問題が起きてるのが、そのチラシの長さ。このところをメーカーさんもきっちり、どういう方向で持っていくか決めないと、これからどんどん針の長さで問題が起きてくると思います。このところ各メーカーさんにきっちりと言って、うちの方ではそれに対して看板を立てようかなと思ってるんですけどね。このところが友釣りしてる釣り人とアユルアーの釣り人との差が出てくると思います。魚が多いところではやっぱり針の長さを長くしたら掛かるような感じになるんですね。どこの県もアユルアーの場合は、針の長さを気をつけるのが必要と思います。

それとやっぱり、釣れる川、釣れる要因。今、アユルアーがどんどん盛り上がってますけども、ここ2、3年でもし釣れなかったら、本当に終わってしまいます。そうならないためにはやっぱり釣れる川、それを目指していただかないと、今後ほんまに下がっていくと思いますんで。そのところだけ、どうぞよろしくお願いいたします。以上です。

佐藤委員（フィッシングジャーナリスト）

皆さん、2日間ありがとうございました。こちらも色々勉強させていただきました。本来なら一つ一つの事業に関してコメントをしたいところなんですけれども、時間がないので、気がついたところについて話させていただこうと思います。

昨日を中心にアユルアーということで、全国でいろいろな活動をしている方の話をお聞きしましたが、今後の内水面を考えた時に、やっぱりアユルアーの世界っていうのは、友釣りとは別に、アユという魚を対象にした一つ釣りの分野みたいなものを築いていくんじゃないかという気がしています。ぜひ、先ほど佐野会長からも指摘があったように、規則的なものや基礎的なものをきちんと周知をしていただいた上で、どんどん広げていって欲しいと思います。

それから、長野県さんの発表であった、天竜川の組合員にアユ事業の抜本的な見直しについてアンケートしたら、67%の方そうしたほうがいい、という情報がありました。全国各地に伺っていろいろな漁協さんとお話をするんですけども、やはり何でしょうかね、末端の組合員の方の考えや相違というものが上の方に届いていないなど。で、上の方は何をやってるかっていうと、同じことを連綿と繰り返して、どんどん右肩下がりにっていくという現状があまりにも多いので、このようなデータを元に、組合の中でもいろいろと話を循環させていって、組合員の活性化というか勢いづけていっていただければと思います。

あとは、今日お話しいただいた栃木県さんの発表ですとか京都、青森、宮城、秋田の発表では、特に青

森県さんは、青森県として全く新しい特設釣り場の開設ということで、いろいろと心配なこともあるかもしれませんが、これうちの方（群馬県）ではもう 20 年前からやっていることなので、聞いていただければ、いろいろ提案ができるかなと思います。また、秋田のドローンの映像はぜひ見たいと思うので来年もよろしく願います。以上でございます。ありがとうございました。

桑田委員（岐阜県里川・水産振興課）

ありがとうございます。まず全般聞かせていただきまして、やはり内水面漁業や漁協の経営を持続していくためにはやはり遊漁にしっかり力を入れて、単なる水産業振興だけではなくて、観光振興、そして地域振興へとつなげていこうという大きな流れがあるものという風に理解いたしました。その中でやはり皆様がいろいろと大変熱心に取り組んでおられ、本当に全国における先進事例だなと思って聞かせていただきました。

これは、次につながる人たちにしっかりわかるようにしていく必要がありますので、課題に対してどういった対処をしたのか、その具体的な手順等を、ぜひわかるようにしていただけたらありがたいと委員として思います。

そして、例えば具体的に言うと、特に今、佐野会長もおっしゃられていたように、勢いがあるのはアユルアーだと思えます。アユルアーも今日の発表を聞いていると、遊漁者の意識の部分で、例えば釣り方がわからない、もっと釣れる漁場を作ってほしい、そして、その釣れる漁場にどうアクセスすればいいのか、といったところが大きな課題であることがしっかりと整理されていたと思います。

逆に言えば、そういった課題に対して、例えばよく釣れる釣り場はどのくらい釣れる釣り場なのか、そして、そういった漁場では、駐車場や遊漁者を集客するための手段としてどんな案内をしたのか。例えば釣り教室やガイドさんについても、一体いくらでガイドさんをお願いしてどんな効果があったのか。そんなところがより具体化してくると、全国の先進事例として横展開をしやすくなるのではないかなと思いますので、今後とも引き続き頑張っていただきたいと思いますし、私も勉強させていただきたいと思っておりますので、よろしく願います。

工藤委員（東京海洋大学）

私も今回、各地の取り組みをお聞きして色々と興味深い点がありまして、勉強になりました。色々とお話ししたいことはあるんですけども、これは補助事業ですので、政策論の視点から少し野暮なコメントになりますけれどもさせていただければと思います。

皆様もご存知の通り、日本の川や湖での釣りは第五種共同漁業権と内水面漁協によって支えられており、我々にとっては当たり前ですが、この協同組合という仕組みを使って釣り場を作っている・管理している国というのは、多分日本しかないと思います。これは世界に誇れるシステムだと思っております。

今回取り組みを見ていても、やはり協同組合という仕組みを使って、釣りを活性化させていることを、本当に痛感しました。コーディネーターさんは基本的に、人と人との結びつきを活性化させることによって、アユルアーを導入したり、友釣り塾を開催したり、あるいは大学生や観光業と連携したりといった取り組みをしており、また、新しい技術を、例えば電子遊漁券がそうですけれども、デジタルマップやドローンといった技術を活用して釣りを活性化させている、非常に公益性の高い役割を発揮されてると思います。

もう少し分かりやすく言えば、コーディネーターさんがいることで川の自然と地域社会が豊かになって

いるというのが非常に実感できました。各漁協さんがコーディネーターさんを一人雇うことができれば、日本全体の川や湖の自然、それから社会がより豊かになっていくっていうのが、この事業によって明らかになっていくのではないかという風に思っております。

もう一つ感じたのは、この事業による受益者なんですね。受益者は誰かというと、組合員や組合ももちろん受益者かもしれませんが、もう少し広域な人たちですね。広範囲な人たちに、この事業の公益が行き渡ってるなという感じを受けたわけです。

つまり、やはりこういった補助事業の必要性になります。もちろん、これからも継続的にコーディネーターさんさえ設置できれば、各地で様々な取り組みを行ってくれることになりますので、まずは人が重要だということです。それからもう一つは、地域社会への貢献が非常に大きいという印象を受けました。つまり、都道府県や市区町村の行政からの積極的な支援があれば、コーディネーターさんも、より活躍ができるんじゃないかなという風に感じた次第です。

いずれにしましても、この釣り場をどのように維持したり活性化していくのかってことは、やはり人と人との結びつきを活性化していくことが非常に重要で、その基盤として人的結合体を組織基盤としている内水面漁協がこれからも活性化していくことが非常に重要だということを、今回の皆様の報告から理解を深めた次第です。昨日今日と報告いただいた方々に感謝いたします。どうもありがとうございました。

棟方専門家（宮城教育大学）

お疲れ様でした。これまでの話を伺っていて、やはり内水面を盛り上げていくためには、器である川、中身である魚、さらにその遊漁というソフトウェアが非常にバランスが取れていることが大事だと思いました。

器の方に関してちょっと話題提供させていただきます。最近私も関わっている、いわゆる「ネイチャーポジティブ」です。「サーティー・バイ・サーティー（30 by 30）」という言葉をご存知でしょうか。2030年までに国土の30%を自然環境エリアとして生態系を保全するというのが、現在国連の主導で広がってきております。こういった機運は今どんどん大きくなってまいりますので、そこ我々の活動がうまくアクセス、マッチングできると、それは大きな起爆剤になるのではないかなと思っています。

宮城県でも、まだ国土強靱化による川の整備ということが続いてまして、それに合わせて魚道の整備も続いているのですが、ややもすると、防災や治水のほうが優先されて、礫の撤去やまったく漁場を無視した整備が続いている場所があると思います。自然共生センターの方に伺うと、国土強靱化というのは防災治水だけではなくて、食の安全保障や生態系の維持という概念も組み込まれているということをおっしゃっていました。我々もそういったことを、外側にあるツールをちょっと勉強して取り入れることで、漁場の整備に活かせるのではないかなと思いました。

ただそれまでの間は、漁連や漁協が中心となって、孤軍奮闘の形でもう少し頑張っていけないという状況が続いていると思います。その中でやはりトピックになったのが、アユルアーということで、私も去年からアユ釣りを本格的に再開してましたので、勉強になりました。ただ、まだそのが黒船だとすると、抵抗勢力というものが、もしかしたら漁協そのものであったり、友釣りの釣り人であったりと、本来組めるはずの人がまだ、ややもすると敵対関係にあるようなところがあるので、そこをどのようにエビデンスを持って融合させていくかっていうことが大事です。

また、経済的な面では、例えばおとり屋さんが割りを食うという話があっても、もしかしたらアユルアーの方はそもそもエキストラの方で、おとり屋さんにはそんなに負荷を与えていないとか。漁協全体としてそれを収支をカバーできるとか、そういう経済的な評価ができれば、もう少しエビデンスとして多くの方

に説明できるのかと思いました。

あとは、私がずっと想像してるのは、釣り人が川に立つことが純粹にその川の資源を守るという、人間による保全の効果みたいなのが非常に大きいんじゃないかなと思っておりまして、やはりアユルアーの方を誘致して川に立ってもらおうということは、経済だけじゃなくて資源の保全効果っていうのもあるのではないかという風に思っています。そこをこのグループで、もしかすると研究者サイドの話かもしれませんが、そういったエビデンスを積んで、新しい釣りと既存の釣りを融合させていく流れが重要かと思いました。ネイチャーポジティブとか、私も不勉強で始めたばかりなのですが、ご興味があればご説明に伺いたいと思いますので。そういった新しいムーブメントを取り入れるというのも非常に大事ではないかなと今日伺って感じました。以上です。ありがとうございます。

丸茂課長補佐（水産庁栽培養殖課）

水産庁の丸茂です。皆様、発表ありがとうございました。この「みんなでやるぞ」事業も2年目となりました。今年度が2年目だった団体の取り組みを伺うと、やはり昨年の反省などをしっかり活かして、内容をさらにパワーアップさせて2年目の活動に取り組んでいるなど感じました。また、今年が1年目だった団体についても、すでに先行している2年目の事例を参考にして進めている様子が見受けられ、この事業が始まってまだ2年ですが、すでに良い広がりを見せていることを実感しています。

来年度は3年目に入ります。この事業には最長3年という決まりがありますので、来年が最後になるという団体も多いかと思いますが、3年間の活動をどう締めくくり、まとめていくかについても、これから一緒に考えていかなければならないと思っています。

皆様の発表の中でも触れられていましたが、当初の計画通りには進まなかったというケースもたくさんあったかと思います。私から昨日、愛知県の皆様に「計画に書いていないことが色々ありますね」といった質問をさせていただきましたが、これは決して「計画外のことをしてはいけない」と批判するような意味ではありません。

当初の予定通りにいかなかったとしても、その場その場で臨機応変に対応されたことは素晴らしいと思っています。そういった経緯を詳しく伺いたくて質問をいたしました。たとえ計画通りにいかなかったとしても、その状況でどうすればいいかと考え、行動したこと自体がこの事業の大切な成果だと考えています。来年度は、ぜひそういったプロセスも含めて取りまとめていただければと思います。

また、嬉しいことに、すでに来年度から新しく参加したいという相談もいくつか届いています。事業の評判が良く、「自分たちもやりたい」という場所が増えているのは、非常に喜ばしいことです。ただ、残念ながら予算の枠自体は変わらないため、参加希望が増える中で予算をやりくりしなければならないという苦しい事情もありますが、その点は何卒ご理解いただければ幸いです。本日は本当にありがとうございました。

岩下：

評価検討委員ならびに専門家、水産庁の皆様、大変ありがとうございました。

それでは皆様、2日間にわたりお疲れさまでした。今後も皆様の活動が進みますことを祈念して閉会とさせていただきます。大変ありがとうございました。

水産庁補助事業

令和7年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業
報告会講演録

令和8年3月

みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業 事務局

全国内水面漁業協同組合連合会
公益社団法人日本水産資源保護協会